

令和7年度

大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会

目 次

はじめに	(大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会委員長 山倉 健嗣)	1
------	--------------------------------------	---

I 大学FD活動状況

1	全学FD活動	
(1)	授業担当者懇談会実施報告	3
(2)	授業改善のためのアンケート実施概要	4
(3)	授業改善のためのアンケート集計結果	9
2	各学部の令和7年度FD活動の概要報告	
(1)	家政学部	41
(2)	文学部	43
(3)	社会情報学部	45
(4)	人間関係学部	47
(5)	比較文化学部	49
(6)	データサイエンス学部	51
(7)	短期大学部	53
3	人間文化研究科の令和7年度FD活動	55

II 全学FD講演会・研修会

1	講演会・研修会の内容及びアンケート結果	
(1)	我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～の答申を受けて	79
(2)	生成AIを授業にどう活かすか	95

参考資料

1	大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規程	107
2	令和7年度大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会名簿	109

はじめに

令和7年度大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会委員長 山 倉 健 嗣

令和7年度のFD活動報告書をお届けいたします。報告書の作成にご協力をいただいた教職員の皆様に心から感謝申し上げます。本報告書は令和7年度のFD活動をまとめたものです。全学及び学部、研究科のFD活動、FD研修から構成されており、本学のFDに対する取り組みを知ることができます。

令和7年度の授業は前年度に引き続き、原則対面で行われました。

学生の授業評価は、教員の授業方法・内容の改善を目的とし、「授業改善のためのアンケート」として位置づけられています。回収率向上の対策として、今年度は該当科目の授業時間内に10分程度の回答時間を設けるという運用を改めて徹底した結果、回答率は前期54.89%（前年度43.56%）、後期46.91%（前年度35.67%）へと上昇し、改善の兆しが見られました。

令和7年度の授業評価は、原則対面で授業を実施している実態に合わせ、授業形態を問う設問の削除、授業の到達目標の達成を問う設問の新設等、若干の変更を加えました。全体としての学生の授業評価の詳細は本報告書をご覧ください。学部・学科・専攻ごとの違いを知ることができますし、授業時間以外の学修時間は少ないという従来からの課題は残念ながら残っています。

令和7年度もFD委員会主催による、全学のFD講演会をオンラインで実施しました。

前期は7月29日に「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築への答申を受けて」と題し、本学に置き換えて学長 市川博先生にご講演いただきました。講演内容に関する満足度が高く、今回のテーマである「知の総和」や本学の状況など多岐にわたり理解を深めることができた、また、教育の質の向上について考える良い機会になった等、多くの意見が寄せられました。

後期は12月18日に「生成AIを授業にどう活かすか」をテーマに、教育の質向上に向けた具体的な活用や大学教育での成功事例等について、短期大学部 教授 豊田雄彦先生とデータサイエンス学部 教授 広瀬啓雄先生にご講演いただきました。AIに関する基本的な知識から現在授業で悩んでいるテーマまで幅広い話を聞くことができ参考になった、論文やレポートは完成物よりもプロセスに対する評価が重要になるとの指摘が参考になった等の意見が多く寄せられ、本テーマについての興味や関心の高さが伺える講演会となりました。

各学科・専攻の授業担当者懇談会は対面あるいはオンラインで行われました。例年と同じく参加した非常勤講師の先生より、授業の改善への多くの示唆がありました。参加された非常勤講師の先生方に感謝申し上げます。

今後ともFD活動へご協力のほどよろしくお願いいたします。

I 大学FD活動状況

1 全学FD活動

(1) 授業担当者懇談会実施報告

①概要

今年度も千代田キャンパス・多摩キャンパスにおいて、授業担当の教員(専任及び非常勤)による学生指導に関する各位の所見・抱負など活発な意見交換が行われた。

②実施内容(学科・専攻別懇談会)

千代田キャンパス

家政学部 被服学科	対面:5月10日(土)
家政学部 食物学科	対面:5月10日(土)
家政学部 児童学科	オンライン:5月10日(土)
家政学部 ライフデザイン学科	対面:5月10日(土)
文学部 日本文学科	対面:5月10日(土)
文学部 英語英文学科	対面:5月10日(土)
文学部 コミュニケーション文化学科	オンライン:5月10日(土)
社会情報学部 社会情報学科社会生活情報学専攻	オンライン:5月17日(土)
社会情報学部 社会情報学科環境情報学専攻	オンライン:5月17日(土)
社会情報学部 社会情報学科情報デザイン専攻	オンライン:5月17日(土)
比較文化学部 比較文化学科	対面:5月10日(土)
短期大学部 家政科家政専攻	対面:5月10日(土)
短期大学部 家政科生活総合ビジネス専攻	オンライン:5月27日(火)
短期大学部 家政科食物栄養専攻	対面:5月10日(土)
全学共通科目(基礎科目・教養科目)	対面:5月10日(土)
教職課程	オンライン:5月15日(木)
図書館学課程	対面:5月10日(土)
博物館学芸員課程	対面:5月10日(土)

多摩キャンパス

人間関係学部 人間関係学科社会学専攻	オンライン:5月24日(土)
人間関係学部 人間関係学科社会・臨床心理学専攻	オンライン:5月24日(土)
人間関係学部 人間福祉学科	オンライン:5月24日(土)

(2) 授業改善のためのアンケート実施概要

①概要

前・後期において、それぞれ授業改善のためのアンケートを実施した。
実施科目数及び回答学生数は次のとおりである。

実施科目数 前期（学期末）：1,417 科目

後期（学期末）：1,335 科目

回答学生数 前期（学期末）：32,288 名（受講者数 58,825 名 回答率 54.89%）

後期（学期末）：25,075 名（受講者数 53,458 名 回答率 46.91%）

②実施時期

前期（学期末）令和7年7月7日（月）～7月19日（土）

後期（学期末）令和7年12月8日（月）～12月20日（土）

③実施方法

大妻女子大学ポータルサイト「UNIVERSAL PASSPORT」（UNIPA）で実施した。

④調査項目（5～8 ページ参照）

⑤集計結果及び公表

集計は前期・後期のデータを、それぞれ全体・大学・短大別及び次の分類別に分析した。

また、集計結果は、UNIPA 上で授業担当者に公開している。

分類：全体、学部別、学生所属別、学年別、授業方法別、クラスサイズ別、専任・兼任別、年齢別

令和7年度（前期）大妻女子大学 「授業改善のためのアンケート」

このアンケートは、授業内容や授業方法の改善を図るためのものです。
無記名回答ですので、あなたの成績に影響することはまったくありません。率直に回答してください。

1.

1. 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|--|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい／確認していない |

2.

2. 教員は学生の理解を深めるための工夫（小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など）をしたと感じることができましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

3.

3. 授業においてmanabaは活用されましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

4.

4. 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|---|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい／発言の機会がなかった |

5.

5. この授業の授業外学修の時間（授業1回あたりの平均）はどの程度ですか。

※授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

選択必須

- | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| ☐ 3時間以上 | ☐ 2時間以上3時間未満 | ☐ 1時間以上2時間未満 |
| ☐ 30分以上1時間未満 | ☐ 30分未満 | ☐ していない |

6.

6. 課題に対する教員からのフィードバック（コメントや学習指導）は効果的でしたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

7.

7. この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

8.

8. この授業の到達目標を達成しましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

9.

9. あなたは授業に満足しましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

10.

10. 授業改善に向けたあなたの意見や要望・感想を書いてください。

【良かったところ、継続してほしいところ、改善・提案できるところ】

※授業改善に関連しないことや誹謗中傷にあたるようなことは入力しないでください。

ご協力、ありがとうございました。

全学ファカルティ・ディベロップメント委員会

回答

令和7年度（後期）大妻女子大学 「授業改善のためのアンケート」

このアンケートは、授業内容や授業方法の改善を図るためのものです。

無記名回答ですので、あなたの成績に影響することはまったくありません。率直に回答してください。

1.

1. 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|--|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい／確認していない |

2.

2. 教員は学生の理解を深めるための工夫（小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など）をしたと感じることができましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

3.

3. 授業においてmanabaは活用されましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

4.

4. 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|---|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい／発言の機会がなかった |

5.

5. この授業の授業外学修の時間（授業1回あたりの平均）はどの程度ですか。

※授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

選択必須

- | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| ☐ 3時間以上 | ☐ 2時間以上3時間未満 | ☐ 1時間以上2時間未満 |
| ☐ 30分以上1時間未満 | ☐ 30分未満 | ☐ していない |

6.

6. 課題に対する教員からのフィードバック（コメントや学習指導）は効果的でしたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

7.

7. この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

8.

8. この授業の到達目標を達成しましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

9.

9. あなたは授業に満足しましたか。

選択必須

- | | | |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| ☐ そう思う | ☐ ややそう思う | ☐ どちらともいえない |
| ☐ あまりそう思わない | ☐ そう思わない | ☐ わからない／判断しづらい |

10.

10. 授業改善に向けたあなたの意見や要望・感想を書いてください。

【良かったところ、継続してほしいところ、改善・提案できるところ】

※授業改善に関連しないことや誹謗中傷にあたるようなことは入力しないでください。

ご協力、ありがとうございました。

全学ファカルティ・ディベロップメント委員会

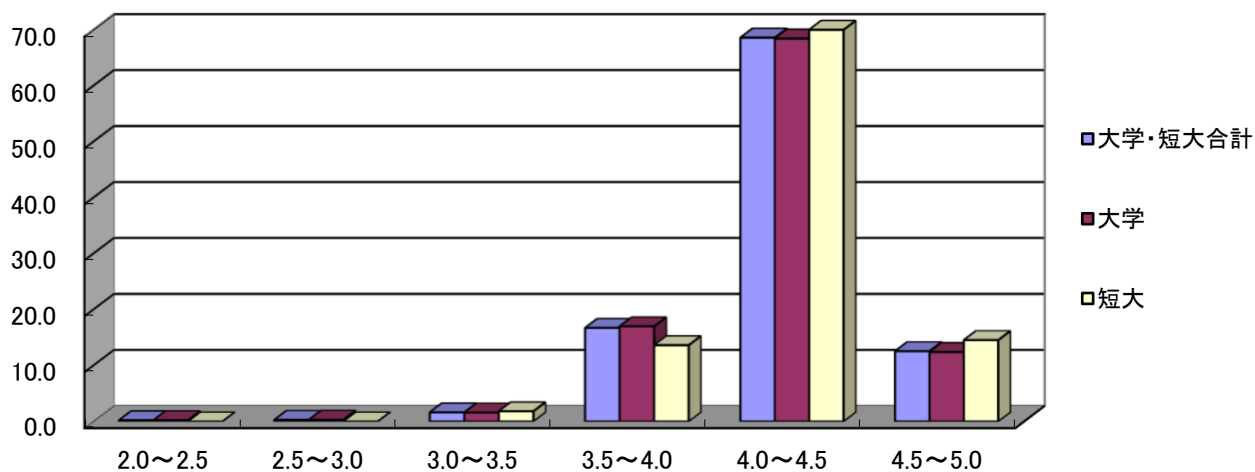
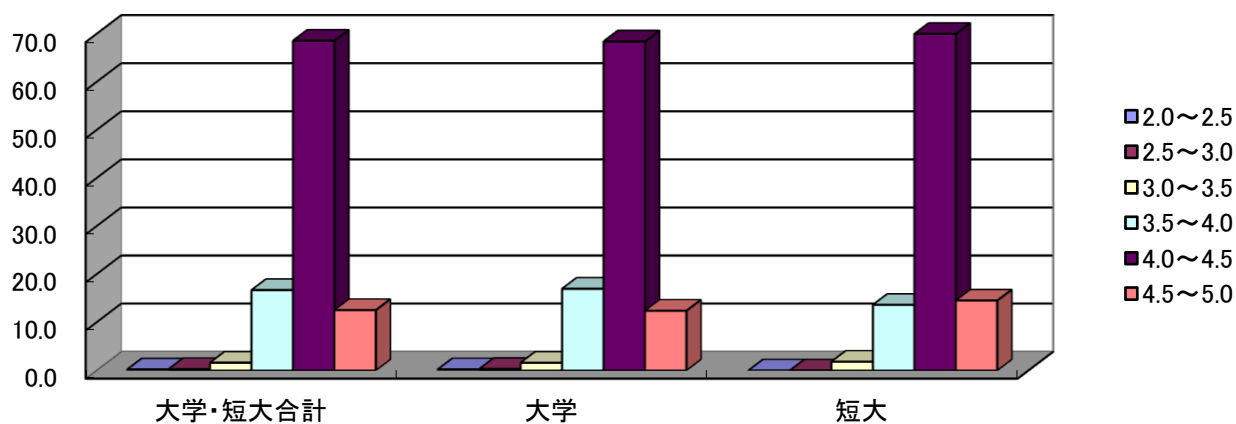
回答

(3) 授業改善のためのアンケート集計結果

2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(全体)

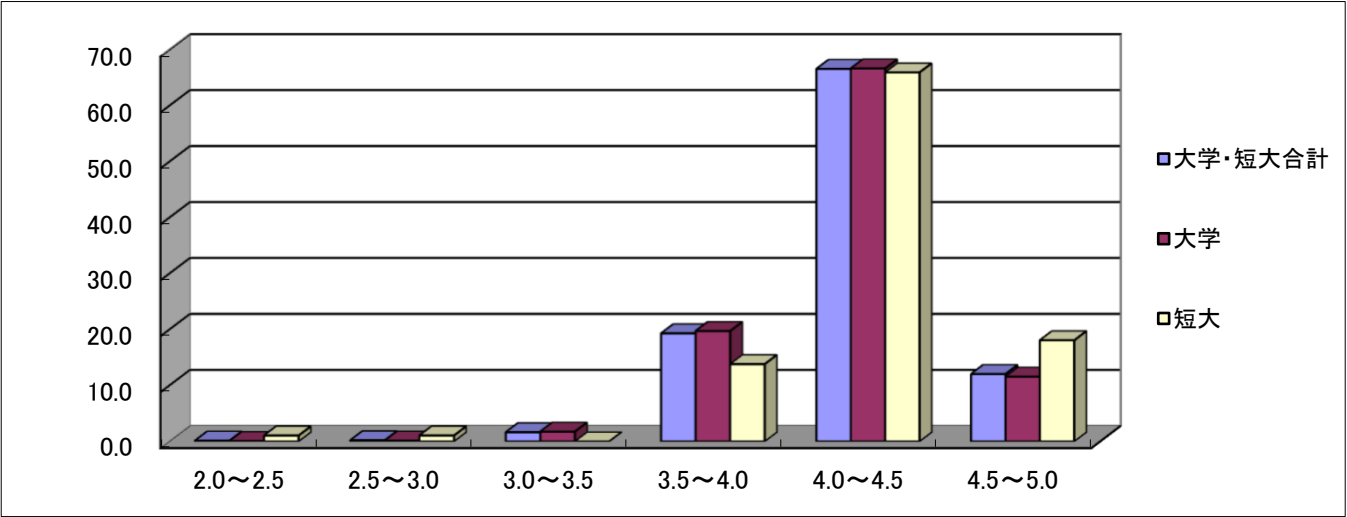
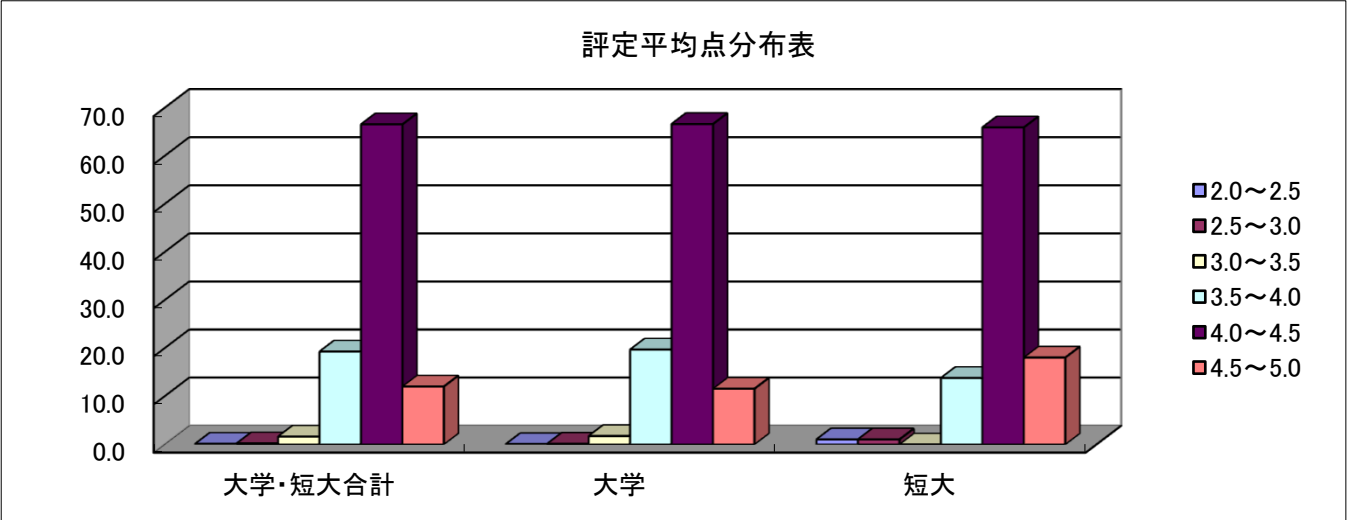
平均点	大学・短大合計		大学		短大	
	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)
2.0～2.5	3	0.2	3	0.2	0	0.0
2.5～3.0	4	0.3	4	0.3	0	0.0
3.0～3.5	23	1.6	21	1.6	2	1.8
3.5～4.0	237	16.7	223	17.0	15	13.6
4.0～4.5	972	68.6	898	68.4	77	70.0
4.5～5.0	178	12.6	163	12.4	16	14.5

評定平均点分布表



2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(全体)

平均点	大学・短大合計		大学		短大	
	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)
2.0～2.5	2	0.1	1	0.1	1	1.1
2.5～3.0	3	0.2	2	0.2	1	1.1
3.0～3.5	22	1.6	22	1.8	0	0.0
3.5～4.0	258	19.3	247	19.7	13	13.8
4.0～4.5	889	66.6	834	66.7	62	66.0
4.5～5.0	161	12.1	145	11.6	17	18.1



2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(全体及び学部別)

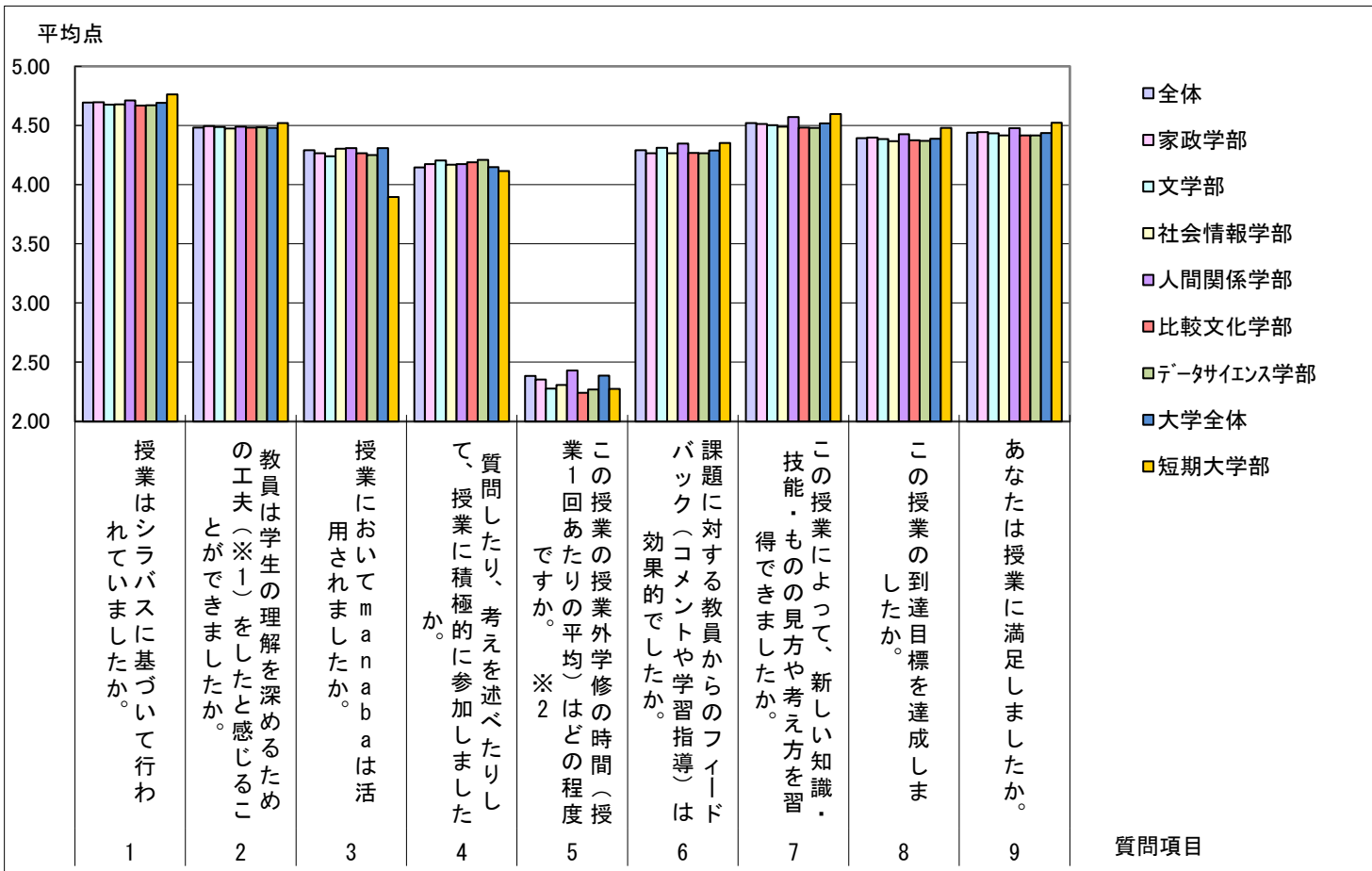
対象 科目数	実施 科目数	未実施 科目数
1,418	1,417	1

	全体	家政学部	文学部	社会情報学部	人間関係学部	比較文化学部	データサイエンス学部	大学全体	短期大学部
履修者数	58,825	30,691	24,227	24,488	8,263	20,654	17,823	56,754	2,179
回答者数	32,288	17,073	13,772	13,642	4,779	12,439	10,797	30,954	1,402
回答率(%)	54.89	55.63	56.85	55.71	57.84	60.23	60.58	54.54	64.34

		全体	家政学部	文学部	社会情報学部	人間関係学部	比較文化学部	データサイエンス学部	大学全体	短期大学部
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.69	4.69	4.68	4.68	4.71	4.67	4.67	4.69	4.76
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.48	4.49	4.49	4.48	4.49	4.48	4.48	4.48	4.52
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	4.29	4.27	4.24	4.30	4.31	4.26	4.25	4.31	3.90
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.15	4.17	4.20	4.17	4.17	4.19	4.21	4.15	4.12
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.38	2.35	2.28	2.31	2.43	2.24	2.27	2.39	2.27
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.29	4.27	4.31	4.27	4.35	4.27	4.26	4.29	4.35
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.52	4.51	4.50	4.49	4.57	4.48	4.48	4.52	4.60
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.39	4.40	4.39	4.37	4.43	4.37	4.37	4.39	4.48
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.44	4.44	4.43	4.42	4.48	4.42	4.42	4.44	4.52

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など

※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。



2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(全体及び学部別)

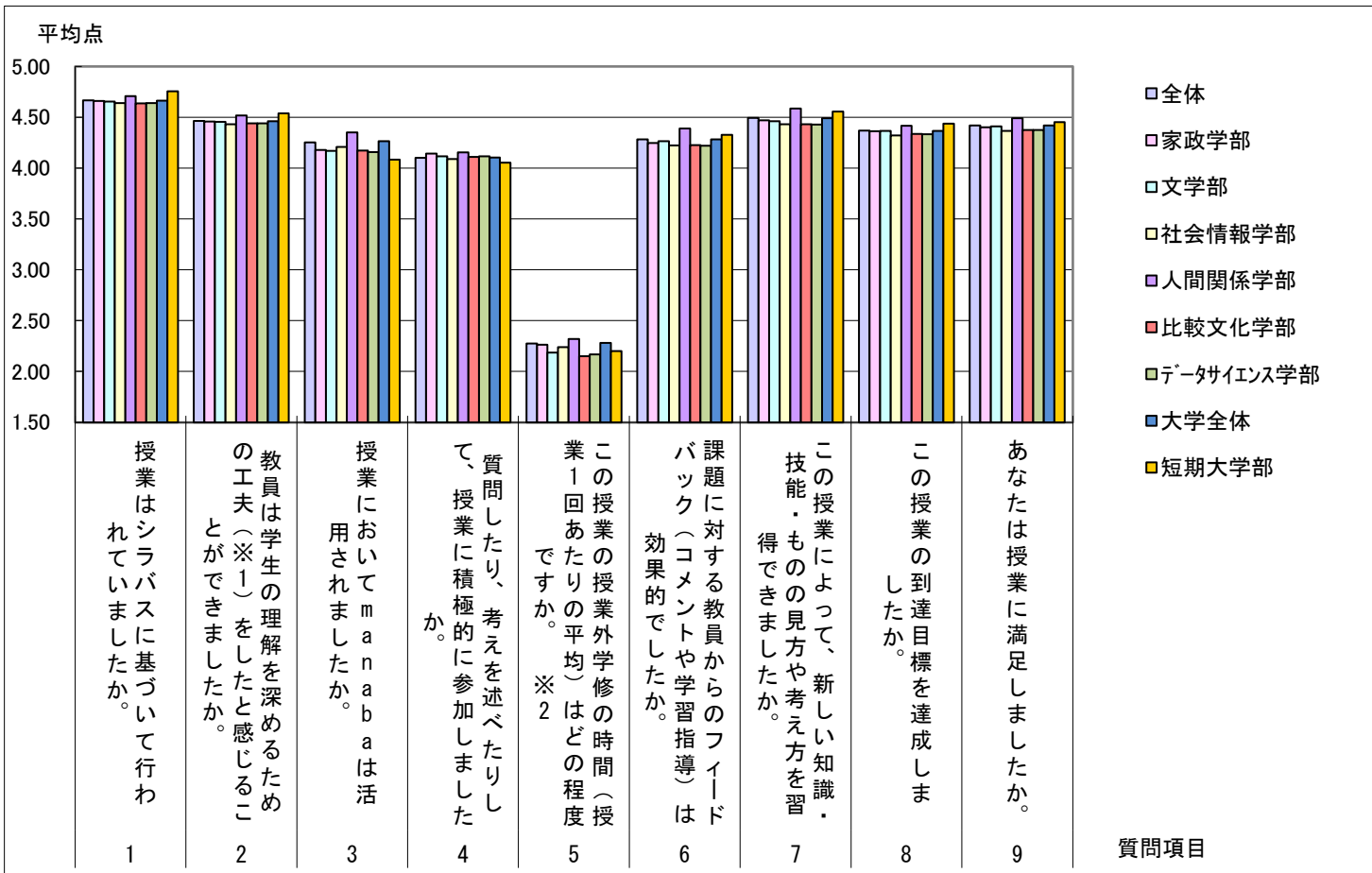
対象 科目数	実施 科目数	未実施 科目数
1,337	1,335	2

	全体	家政学部	文学部	社会情報学部	人間関係学部	比較文化学部	データサイエンス学部	大学全体	短期大学部
履修者数	53,458	27,840	22,853	22,342	7,464	19,425	16,870	51,698	2,075
回答者数	25,075	12,830	11,245	10,889	3,720	10,142	8,807	24,077	1,179
回答率(%)	46.91	46.08	49.21	48.74	49.84	52.21	52.21	46.57	56.82

		全体	家政学部	文学部	社会情報学部	人間関係学部	比較文化学部	データサイエンス学部	大学全体	短期大学部
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.67	4.66	4.66	4.64	4.71	4.64	4.64	4.66	4.75
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.46	4.46	4.45	4.43	4.52	4.44	4.44	4.46	4.54
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	4.25	4.18	4.17	4.21	4.35	4.17	4.16	4.26	4.08
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.10	4.14	4.12	4.09	4.16	4.11	4.12	4.10	4.05
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.28	2.26	2.19	2.24	2.32	2.15	2.17	2.28	2.20
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.28	4.25	4.26	4.22	4.39	4.23	4.22	4.28	4.33
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.49	4.47	4.46	4.43	4.58	4.43	4.43	4.49	4.56
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.37	4.36	4.37	4.32	4.42	4.34	4.33	4.37	4.44
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.42	4.40	4.41	4.37	4.49	4.37	4.37	4.42	4.45

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など

※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。



2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(学生の所属別)

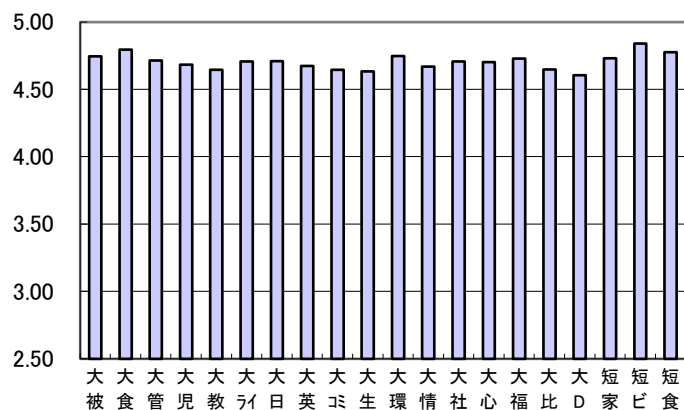
		回答者数	大被	大食	大管	大児	大教	大ライ	大日	大英	大コミ	大生	大環
			2,227	1,570	984	1,354	1,400	2,144	2,490	1,990	2,104	1,637	1,491
			大情	大社	大心	大福	大比	大D	短家	短ビ	短食		
			2,172	1,353	1,959	1,467	3,805	787	343	172	660		
			大被	大食	大管	大児	大教	大ライ	大日	大英	大コミ	大生	大環
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。		4.74	4.79	4.71	4.68	4.65	4.71	4.71	4.67	4.64	4.63	4.75
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと 感じることができましたか。		4.47	4.60	4.51	4.48	4.49	4.48	4.51	4.47	4.48	4.38	4.53
3	授業においてmanabaは活用されましたか。		4.30	4.46	4.23	4.26	4.20	4.34	4.26	4.28	4.26	4.31	4.37
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に 参加しましたか。		4.05	4.12	4.08	4.25	4.29	4.01	4.10	4.26	4.18	4.10	4.19
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)は どの程度ですか。※2		2.48	2.42	2.58	2.09	2.61	2.43	2.46	2.41	2.18	2.19	2.26
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学 習指導)は効果的でしたか。		4.23	4.37	4.28	4.18	4.32	4.25	4.41	4.35	4.31	4.19	4.27
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や 考え方を習得できましたか。		4.54	4.63	4.53	4.52	4.56	4.53	4.59	4.50	4.48	4.45	4.49
8	この授業の到達目標を達成しましたか。		4.43	4.48	4.38	4.39	4.51	4.37	4.41	4.40	4.34	4.34	4.37
9	あなたは授業に満足しましたか。		4.47	4.55	4.42	4.48	4.52	4.44	4.50	4.42	4.40	4.37	4.43

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

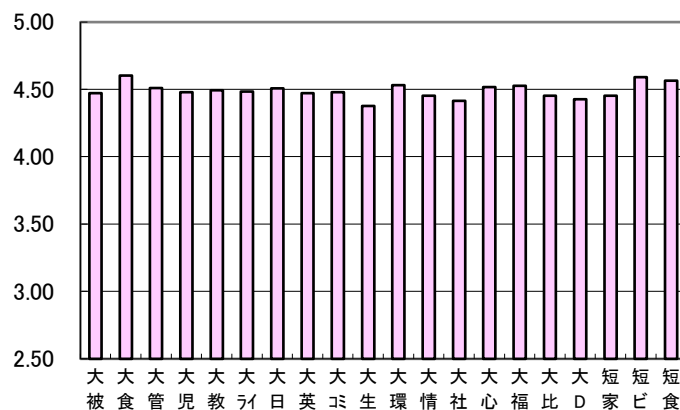
			大情	大社	大心	大福	大比	大D	短家	短ビ	短食
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。		4.67	4.71	4.70	4.73	4.65	4.60	4.73	4.84	4.77
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと 感じることができましたか。		4.45	4.41	4.52	4.53	4.45	4.43	4.45	4.59	4.56
3	授業においてmanabaは活用されましたか。		4.38	4.24	4.35	4.32	4.34	4.23	3.83	4.08	3.79
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に 参加しましたか。		4.10	4.16	4.16	4.21	4.17	4.13	4.13	3.99	4.11
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)は どの程度ですか。※2		2.49	2.36	2.56	2.31	2.31	2.47	2.16	1.74	2.44
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学 習指導)は効果的でしたか。		4.24	4.33	4.32	4.40	4.24	4.14	4.30	4.30	4.42
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や 考え方を習得できましたか。		4.47	4.54	4.58	4.58	4.46	4.36	4.60	4.65	4.59
8	この授業の到達目標を達成しましたか。		4.31	4.42	4.43	4.44	4.35	4.24	4.50	4.66	4.44
9	あなたは授業に満足しましたか。		4.36	4.46	4.47	4.50	4.36	4.29	4.59	4.69	4.48

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

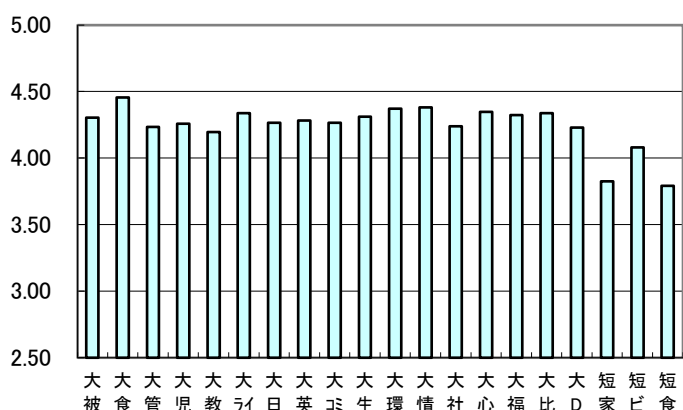
1 授業はシラバスに基づいて行われたか



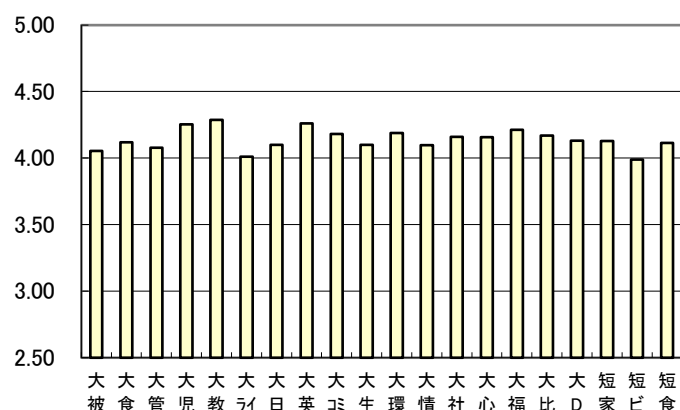
2 学生の理解を深めるための工夫を感じたか



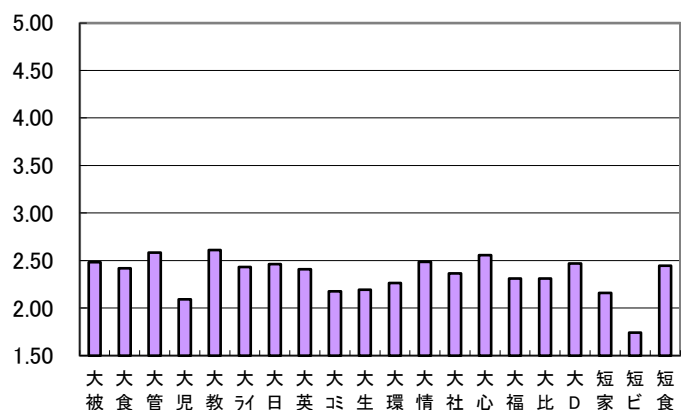
3 manabaは活用されたか



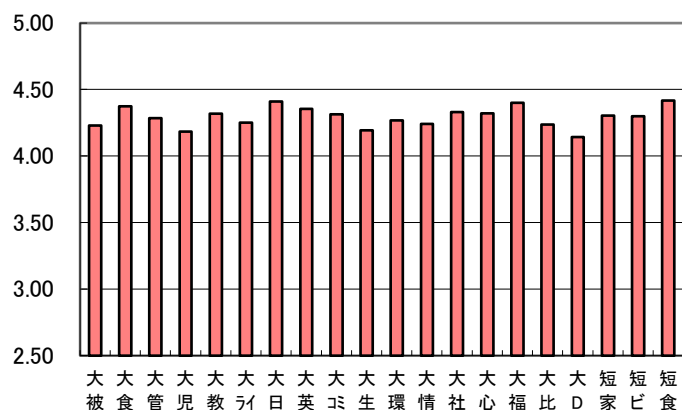
4 授業に積極的に参加したか



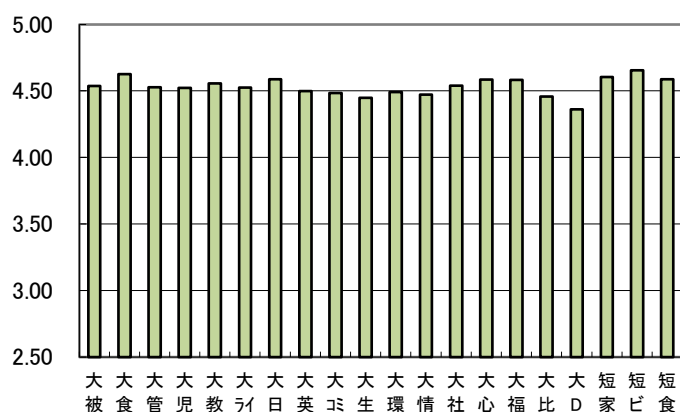
5 授業外学修時間(授業1回あたりの平均)



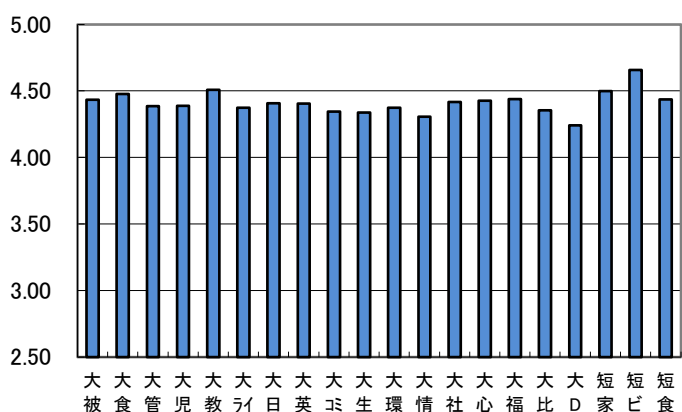
6 教員からのフィードバックは効果的だったか



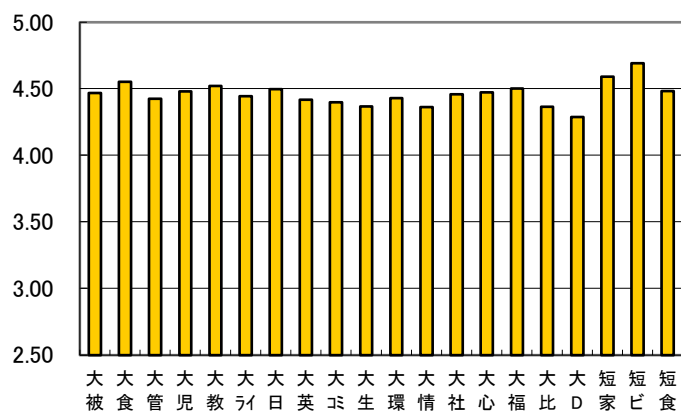
7 新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できたか



8 この授業の到達目標を達成したか



9 授業に満足したか



2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(学生の所属別)

		回答者数	大被	大食	大管	大児	大教	大ライ	大日	大英	大コミ	大生	大環
			1,594	1,120	688	1,036	820	1,527	2,336	1,433	1,522	1,352	1,281
			大情	大社	大心	大福	大比	大D	短家	短ビ	短食		
			1,686	1,021	1,467	1,228	3,247	693	203	182	462		
			大被	大食	大管	大児	大教	大ライ	大日	大英	大コミ	大生	大環
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。		4.68	4.72	4.75	4.59	4.66	4.74	4.71	4.64	4.68	4.63	4.67
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと 感じることができましたか。		4.43	4.47	4.53	4.45	4.53	4.51	4.46	4.44	4.49	4.42	4.46
3	授業においてmanabaは活用されましたか。		4.30	4.23	4.14	4.10	4.20	4.32	4.27	4.19	4.29	4.32	4.22
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に 参加しましたか。		4.09	4.09	4.15	4.17	4.34	4.10	4.02	4.17	4.15	4.18	4.06
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)は どの程度ですか。※2		2.30	2.44	2.45	2.07	2.49	2.38	2.24	2.30	2.23	2.16	2.08
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学 習指導)は効果的でしたか。		4.28	4.22	4.27	4.20	4.31	4.33	4.33	4.30	4.36	4.28	4.17
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や 考え方を習得できましたか。		4.52	4.54	4.56	4.44	4.53	4.55	4.57	4.43	4.51	4.42	4.38
8	この授業の到達目標を達成しましたか。		4.40	4.39	4.38	4.35	4.49	4.42	4.42	4.34	4.41	4.34	4.35
9	あなたは授業に満足しましたか。		4.43	4.42	4.45	4.41	4.47	4.46	4.50	4.38	4.45	4.37	4.33

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など

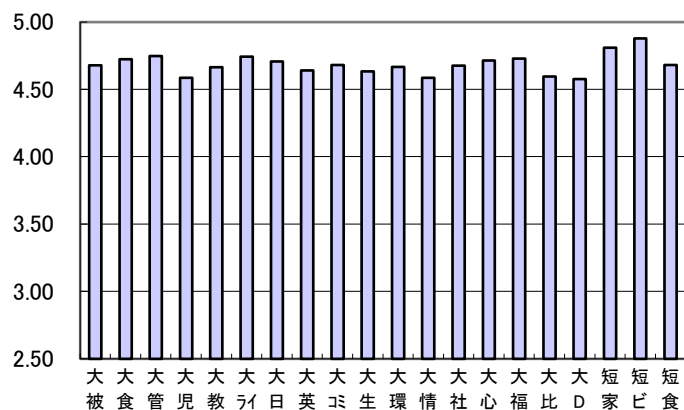
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

			大情	大社	大心	大福	大比	大D	短家	短ビ	短食
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。		4.58	4.67	4.71	4.73	4.59	4.58	4.81	4.88	4.68
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をした と 感じることができましたか。		4.40	4.43	4.54	4.56	4.40	4.44	4.44	4.74	4.53
3	授業においてmanabaは活用されましたか。		4.26	4.28	4.43	4.31	4.25	4.17	4.08	4.16	3.88
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に 参加しましたか。		3.89	4.05	4.22	4.17	4.08	3.99	3.90	4.34	4.05
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)は どの程度ですか。※2		2.53	2.34	2.39	2.22	2.17	2.11	2.14	2.03	2.31
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学 習指導)は効果的でしたか。		4.17	4.33	4.44	4.37	4.20	4.27	4.30	4.60	4.25
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や 考え方を習得できましたか。		4.41	4.51	4.65	4.57	4.40	4.41	4.60	4.76	4.48
8	この授業の到達目標を達成しましたか。		4.18	4.33	4.45	4.44	4.31	4.29	4.50	4.64	4.34
9	あなたは授業に満足しましたか。		4.33	4.41	4.55	4.49	4.33	4.41	4.52	4.76	4.35

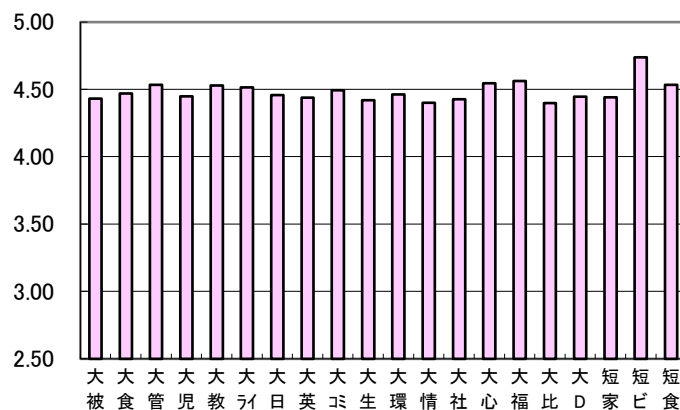
※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など

※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

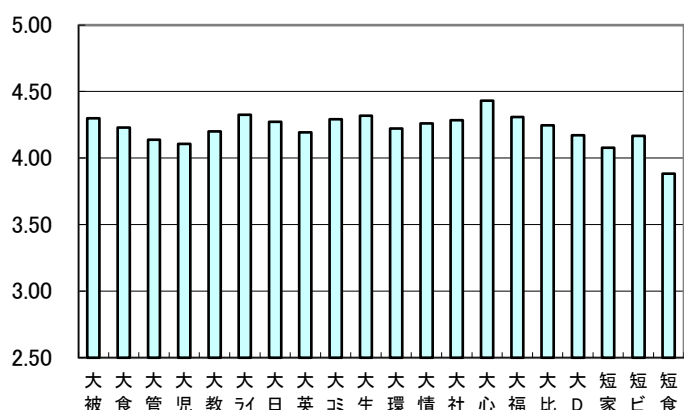
1 授業はシラバスに基づいて行われたか



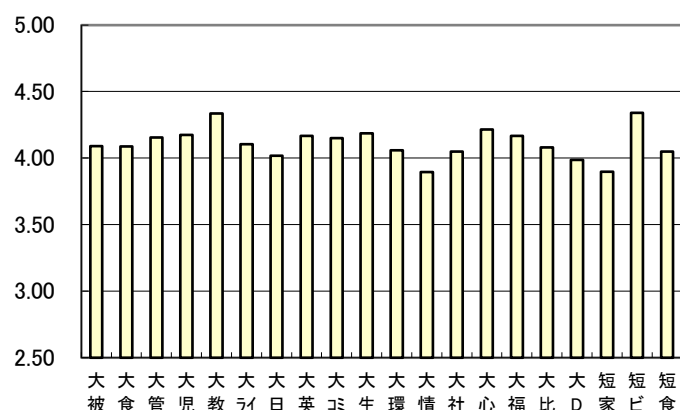
2 学生の理解を深めるための工夫を感じたか



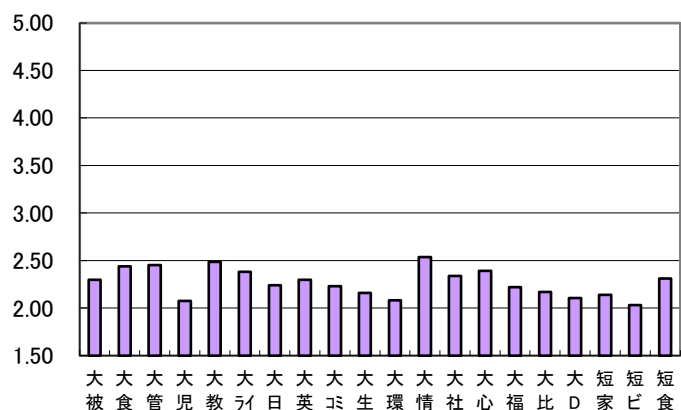
3 manabaは活用されたか



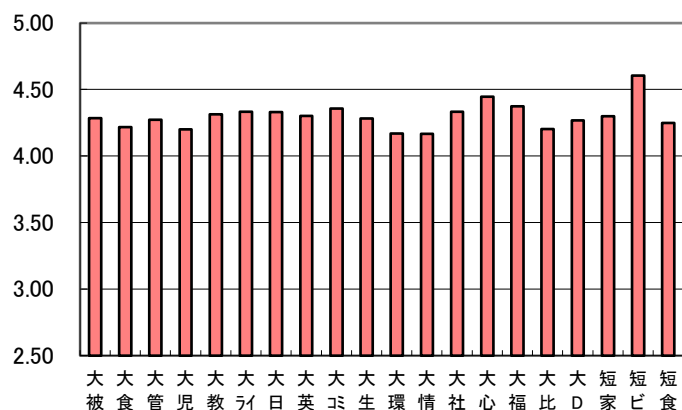
4 授業に積極的に参加したか



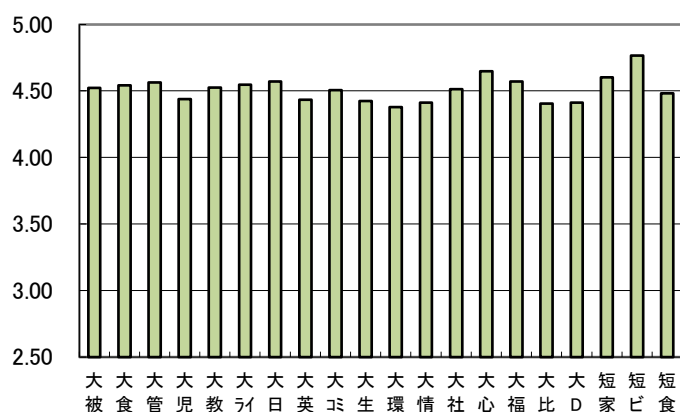
5 授業外学修時間(授業1回あたりの平均)



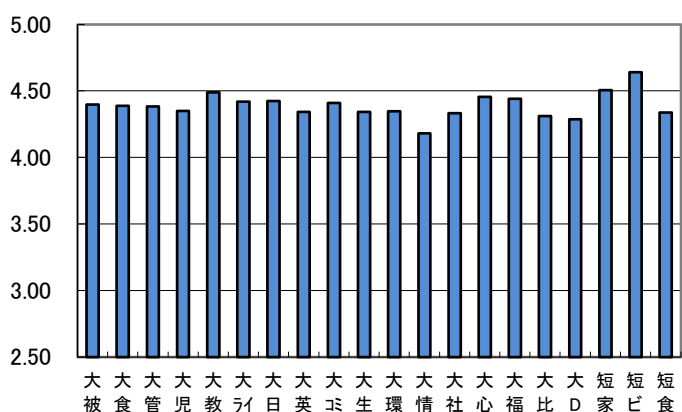
6 教員からのフィードバックは効果的だったか

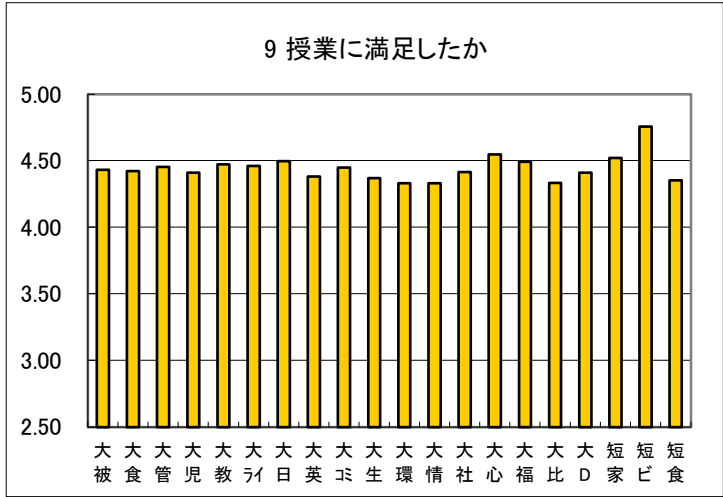


7 新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できたか



8 この授業の到達目標を達成したか



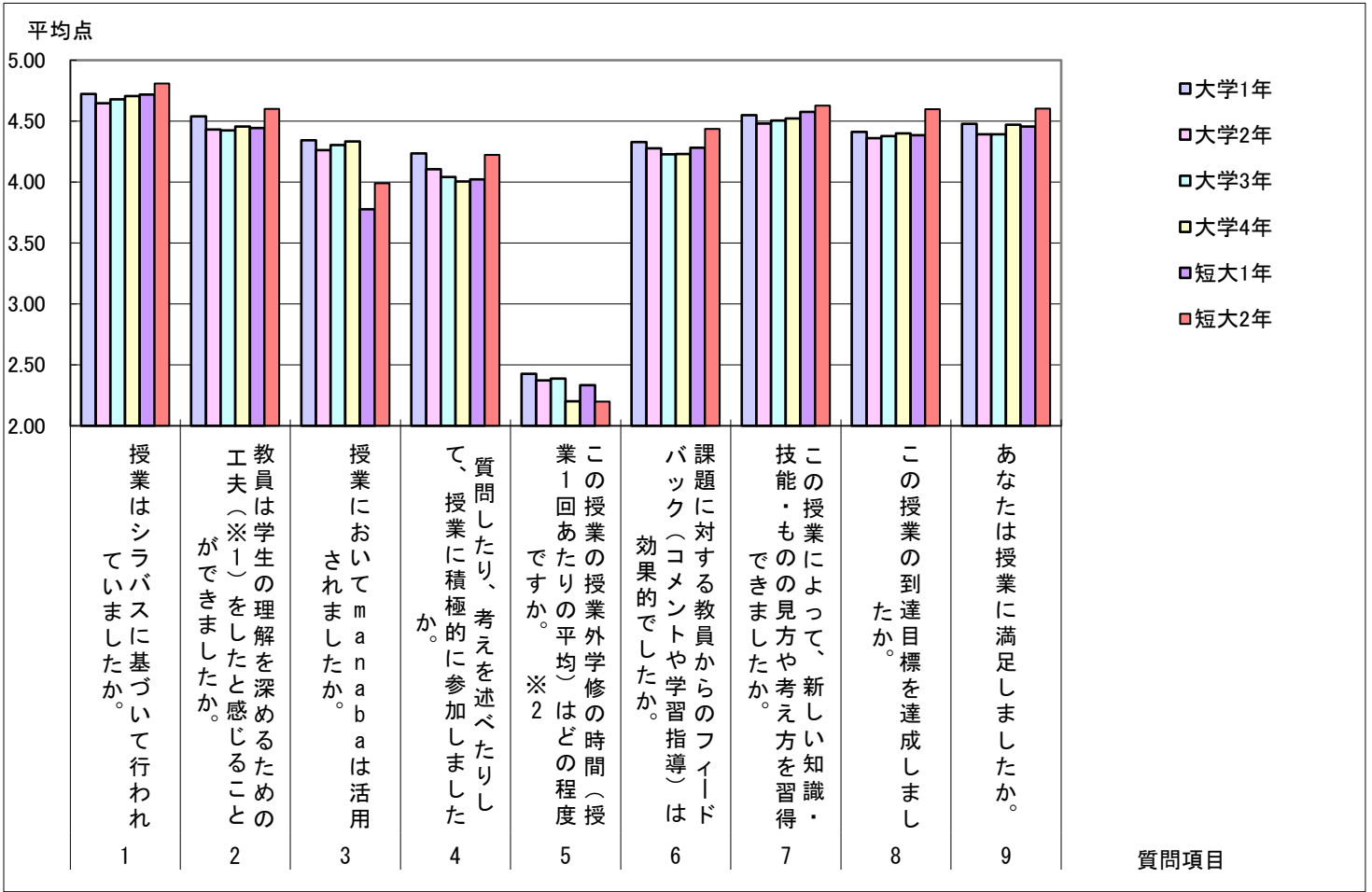


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(学年別)

	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	短大1年	短大2年
回答者数	13,875	9,628	5,305	2,146	748	627

		大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	短大1年	短大2年
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.72	4.65	4.68	4.71	4.72	4.81
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.54	4.43	4.42	4.45	4.44	4.60
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	4.34	4.26	4.30	4.33	3.78	3.99
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.23	4.11	4.04	4.00	4.02	4.22
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	2.42	2.37	2.39	2.20	2.33	2.20
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.33	4.28	4.23	4.23	4.28	4.44
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.55	4.48	4.50	4.52	4.57	4.63
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.41	4.36	4.38	4.40	4.38	4.60
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.48	4.39	4.39	4.47	4.46	4.60

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

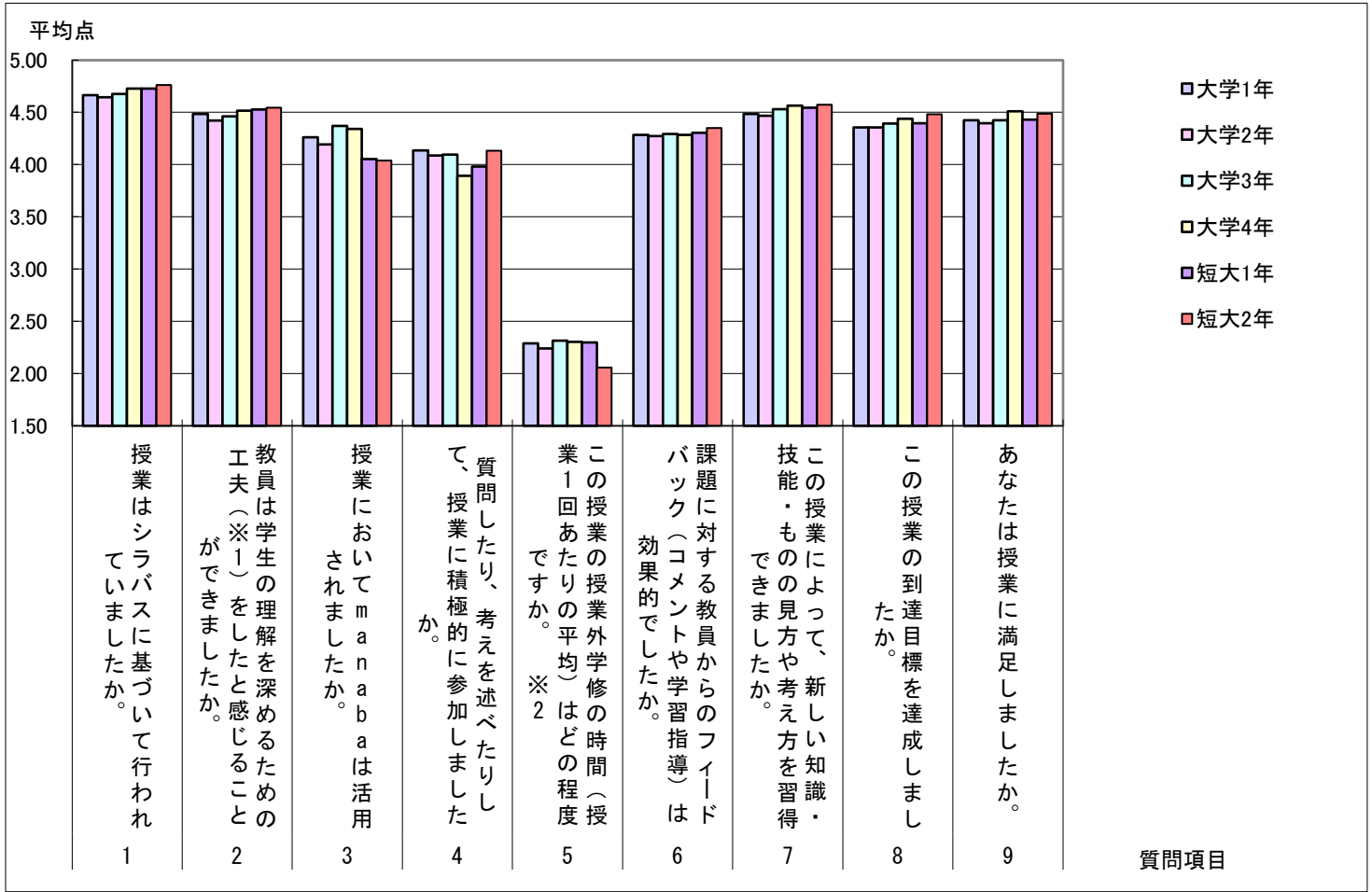


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(学年別)

	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	短大1年	短大2年
回答者数	10,932	7,725	4,399	1,021	534	566

		大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	短大1年	短大2年
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.67	4.64	4.67	4.73	4.73	4.76
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.48	4.42	4.46	4.52	4.53	4.54
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	4.26	4.19	4.37	4.34	4.05	4.04
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.13	4.09	4.10	3.89	3.98	4.13
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	2.29	2.24	2.31	2.30	2.30	2.06
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.28	4.27	4.29	4.28	4.30	4.35
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.48	4.47	4.53	4.57	4.54	4.57
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.36	4.35	4.39	4.44	4.40	4.48
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.42	4.40	4.42	4.51	4.43	4.49

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

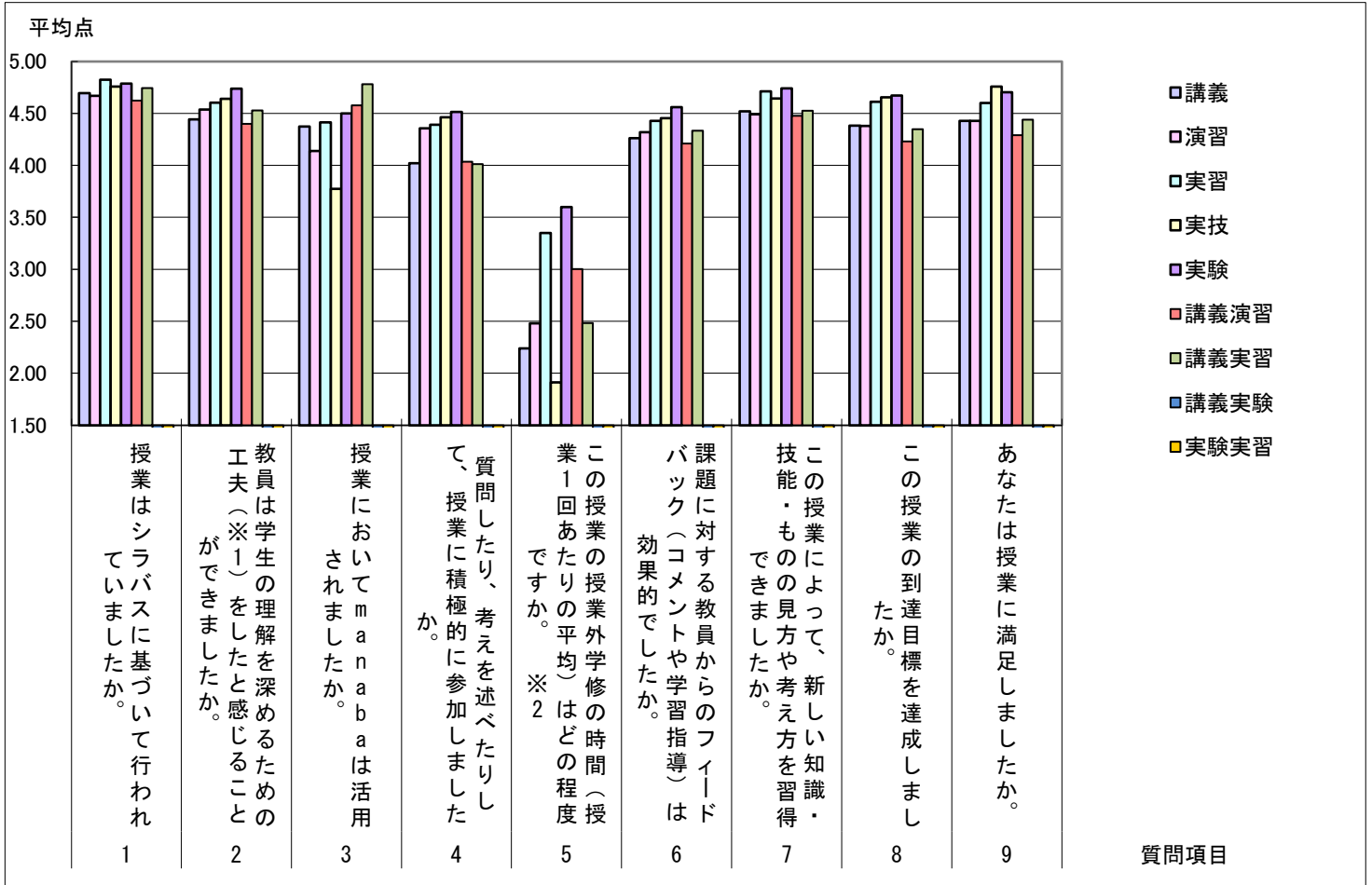


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(授業方法別)大学

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
履修者数	36,098	15,223	1,070	863	797	2,205	498	-	-
回答者数	18,744	9,156	517	533	427	1,286	291	-	-
回答率(%)	51.93	60.15	48.32	61.76	53.58	58.32	58.43	-	-

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.69	4.67	4.82	4.76	4.79	4.62	4.74	-	-
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感ずることができましたか。	4.44	4.54	4.60	4.64	4.74	4.40	4.53	-	-
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.37	4.14	4.41	3.77	4.50	4.58	4.78	-	-
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.02	4.36	4.39	4.46	4.51	4.03	4.01	-	-
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.24	2.48	3.35	1.91	3.60	3.00	2.48	-	-
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.26	4.32	4.43	4.45	4.56	4.21	4.33	-	-
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.52	4.49	4.71	4.64	4.74	4.48	4.53	-	-
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.38	4.38	4.61	4.65	4.67	4.23	4.35	-	-
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.43	4.43	4.60	4.76	4.70	4.29	4.44	-	-

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

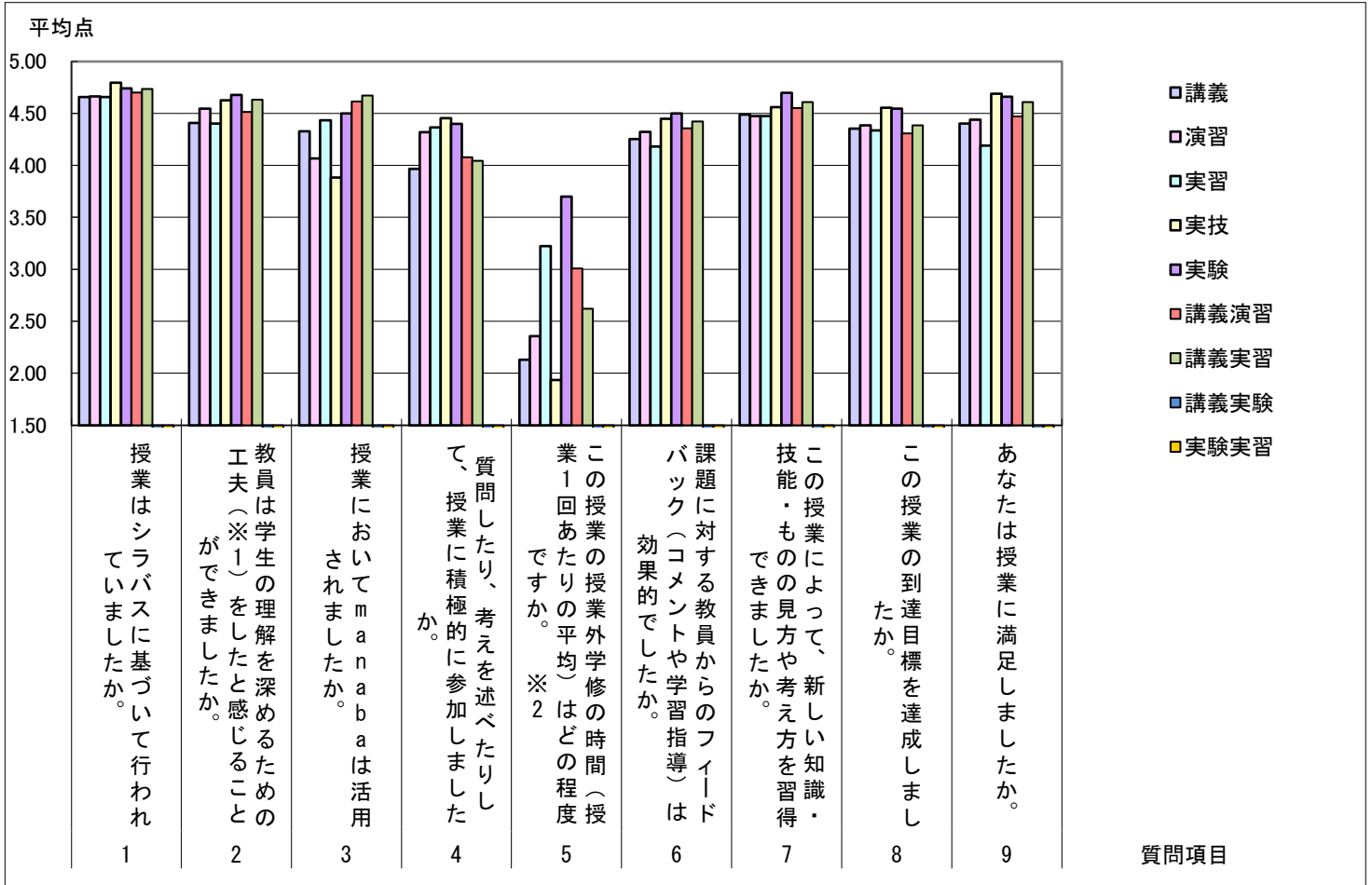


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(授業方法別)大学

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
履修者数	33,161	13,601	1,503	735	453	1,808	437	-	-
回答者数	14,701	7,157	601	359	196	839	224	-	-
回答率(%)	44.33	52.62	39.99	48.84	43.27	46.40	51.26	-	-

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.66	4.66	4.66	4.79	4.74	4.70	4.73	-	-
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.41	4.54	4.40	4.63	4.68	4.51	4.63	-	-
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.33	4.07	4.43	3.88	4.50	4.61	4.67	-	-
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	3.97	4.32	4.36	4.45	4.40	4.08	4.04	-	-
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.13	2.36	3.22	1.93	3.70	3.01	2.62	-	-
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.25	4.32	4.18	4.45	4.50	4.36	4.42	-	-
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.49	4.47	4.47	4.56	4.70	4.55	4.61	-	-
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.35	4.38	4.34	4.56	4.54	4.31	4.38	-	-
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.40	4.44	4.19	4.69	4.66	4.47	4.61	-	-

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

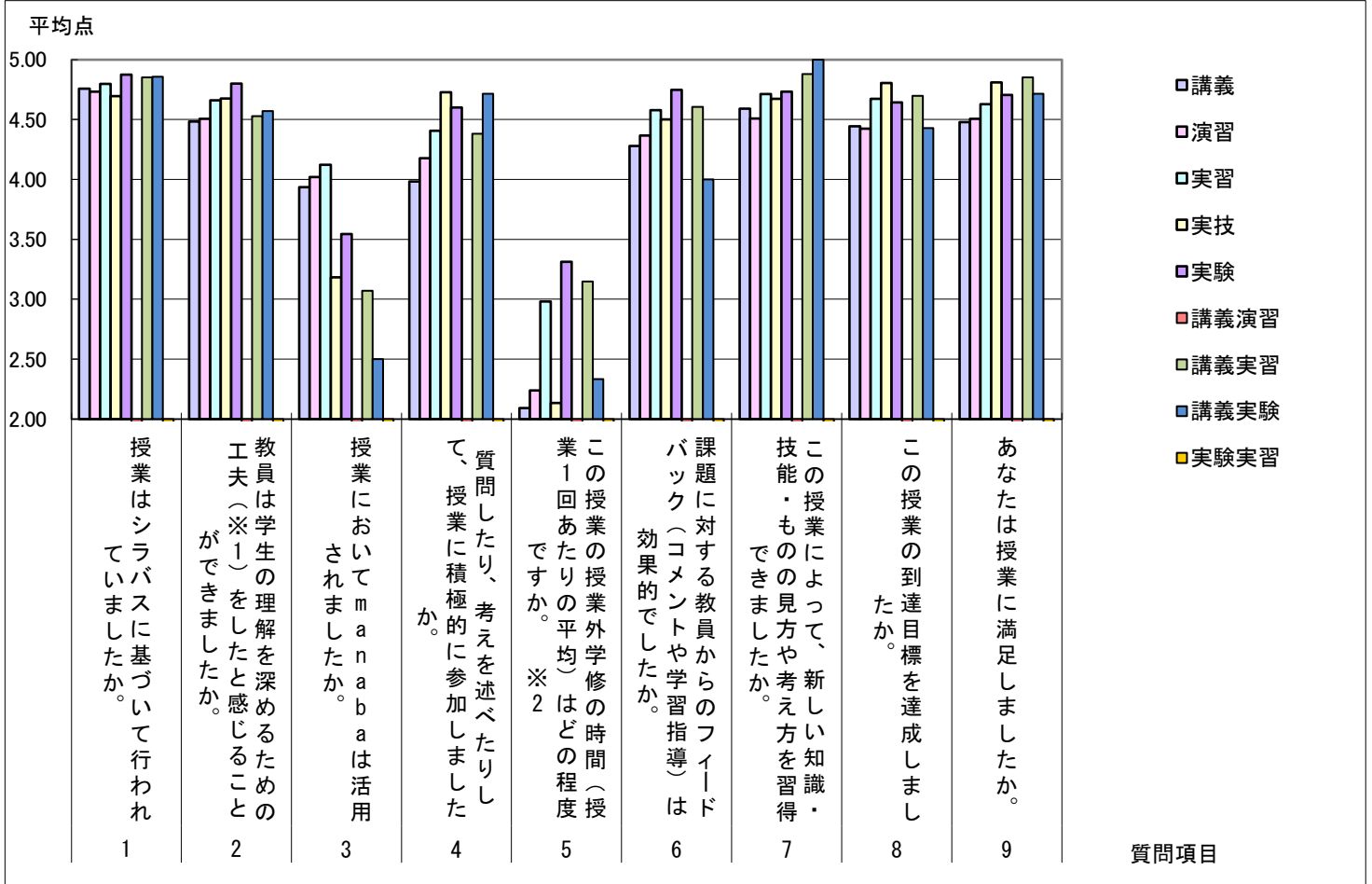


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(授業方法別)短大

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
履修者数	1,366	477	89	80	117	-	42	8	-
回答者数	888	296	59	47	71	-	34	7	-
回答率(%)	65.01	62.05	66.29	58.75	60.68	-	80.95	87.50	-

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.76	4.73	4.80	4.70	4.87	-	4.85	4.86	-
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.48	4.51	4.66	4.67	4.80	-	4.53	4.57	-
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	3.93	4.02	4.12	3.18	3.55	-	3.07	2.50	-
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	3.98	4.18	4.41	4.73	4.60	-	4.38	4.71	-
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.09	2.24	2.98	2.13	3.31	-	3.15	2.33	-
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.28	4.37	4.58	4.50	4.75	-	4.61	4.00	-
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.59	4.51	4.71	4.67	4.73	-	4.88	5.00	-
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.44	4.42	4.67	4.80	4.64	-	4.70	4.43	-
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.48	4.51	4.63	4.81	4.70	-	4.85	4.71	-

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

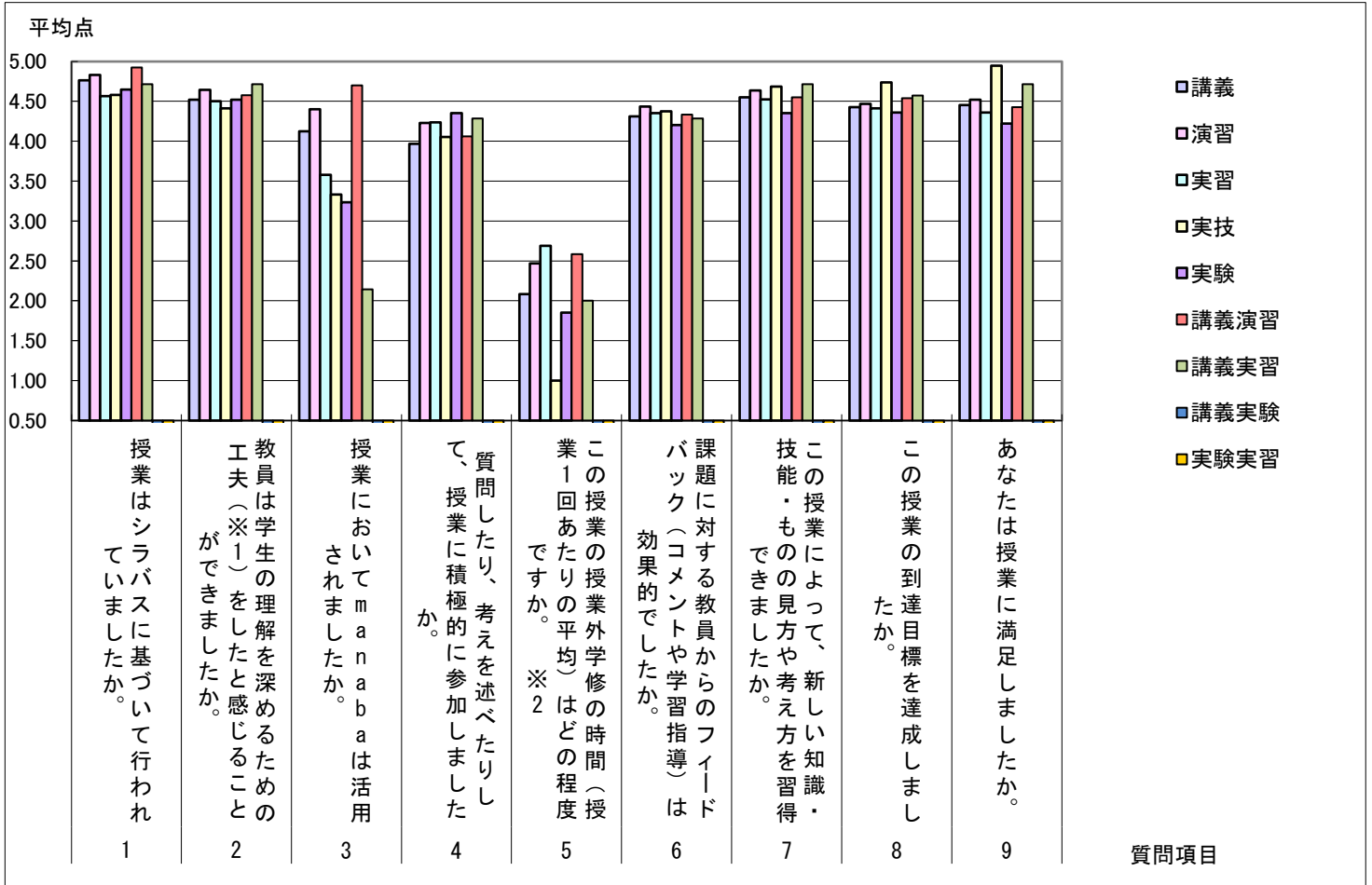


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(授業方法別)短大

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
履修者数	1,437	281	143	47	76	84	7	-	-
回答者数	808	165	86	19	54	40	7	-	-
回答率(%)	56.23	58.72	60.14	40.43	71.05	47.62	100.00	-	-

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.76	4.83	4.56	4.58	4.65	4.92	4.71	-	-
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.52	4.64	4.50	4.41	4.52	4.58	4.71	-	-
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.12	4.40	3.58	3.33	3.23	4.70	2.14	-	-
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	3.97	4.23	4.24	4.05	4.35	4.06	4.29	-	-
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.08	2.47	2.69	1.00	1.85	2.58	2.00	-	-
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.31	4.43	4.35	4.38	4.20	4.33	4.29	-	-
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.55	4.64	4.52	4.68	4.35	4.55	4.71	-	-
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.43	4.47	4.41	4.74	4.36	4.54	4.57	-	-
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.45	4.52	4.36	4.95	4.22	4.43	4.71	-	-

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

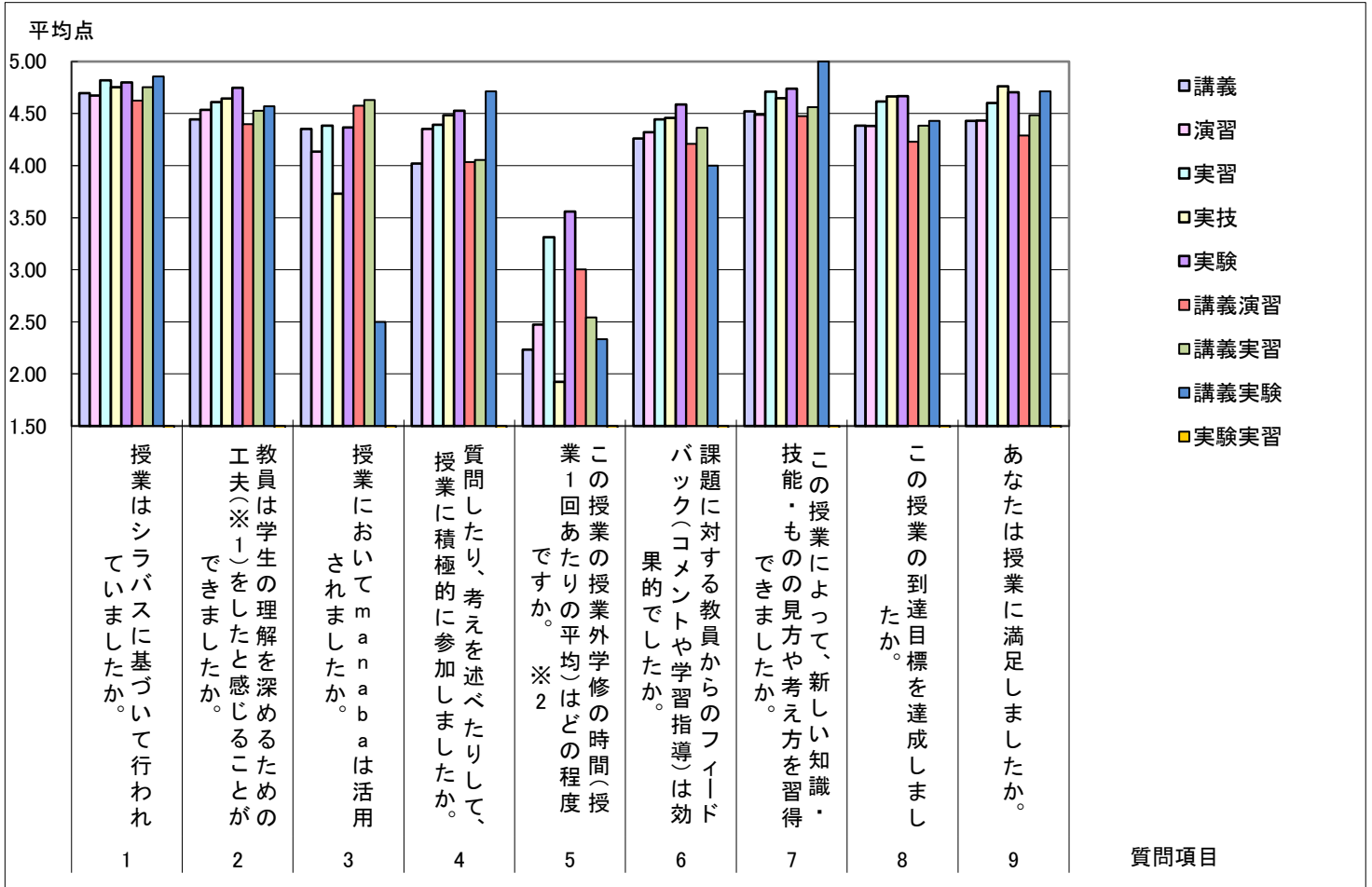


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(授業方法別)大学・短大合計

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
履修者数	37,375	15,681	1,159	943	914	2,205	540	8	－
回答者数	19,576	9,440	576	580	498	1,286	325	7	－
回答率(%)	52.38	60.20	49.70	61.51	54.49	58.32	60.19	87.50	－

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.70	4.67	4.82	4.75	4.80	4.62	4.75	4.86	－
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.44	4.54	4.61	4.64	4.75	4.40	4.53	4.57	－
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.35	4.13	4.38	3.73	4.37	4.58	4.63	2.50	－
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.02	4.35	4.39	4.48	4.53	4.03	4.05	4.71	－
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.23	2.47	3.31	1.92	3.56	3.00	2.54	2.33	－
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.26	4.32	4.44	4.46	4.59	4.21	4.36	4.00	－
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.52	4.49	4.71	4.65	4.74	4.48	4.56	5.00	－
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.39	4.38	4.62	4.67	4.67	4.23	4.38	4.43	－
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.43	4.43	4.60	4.76	4.70	4.29	4.48	4.71	－

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

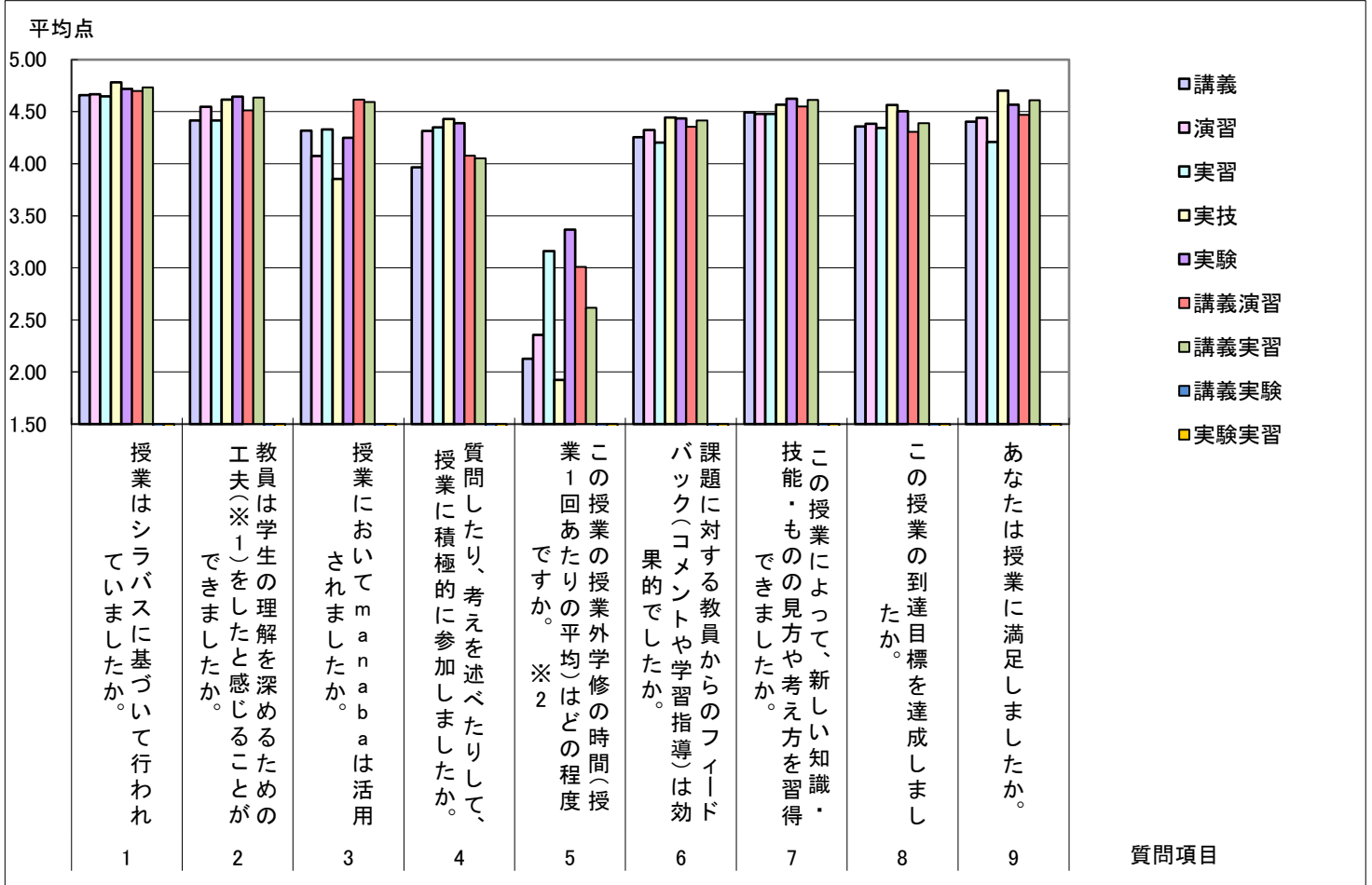


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(授業方法別)大学・短大合計

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
履修者数	34,379	13,870	1,646	782	529	1,808	444	-	-
回答者数	15,377	7,313	687	378	250	839	231	-	-
回答率(%)	44.73	52.73	41.74	48.34	47.26	46.40	52.03	-	-

	講義	演習	実習	実技	実験	講義演習	講義実習	講義実験	実験実習
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.66	4.67	4.65	4.78	4.72	4.70	4.73	-	-
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.41	4.55	4.41	4.62	4.64	4.51	4.63	-	-
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.32	4.07	4.33	3.85	4.25	4.61	4.59	-	-
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	3.97	4.32	4.35	4.43	4.39	4.08	4.05	-	-
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.13	2.36	3.16	1.92	3.37	3.01	2.62	-	-
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.26	4.32	4.20	4.44	4.44	4.36	4.42	-	-
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.49	4.48	4.48	4.57	4.62	4.55	4.61	-	-
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.36	4.39	4.34	4.56	4.50	4.31	4.39	-	-
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.40	4.44	4.21	4.70	4.57	4.47	4.61	-	-

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

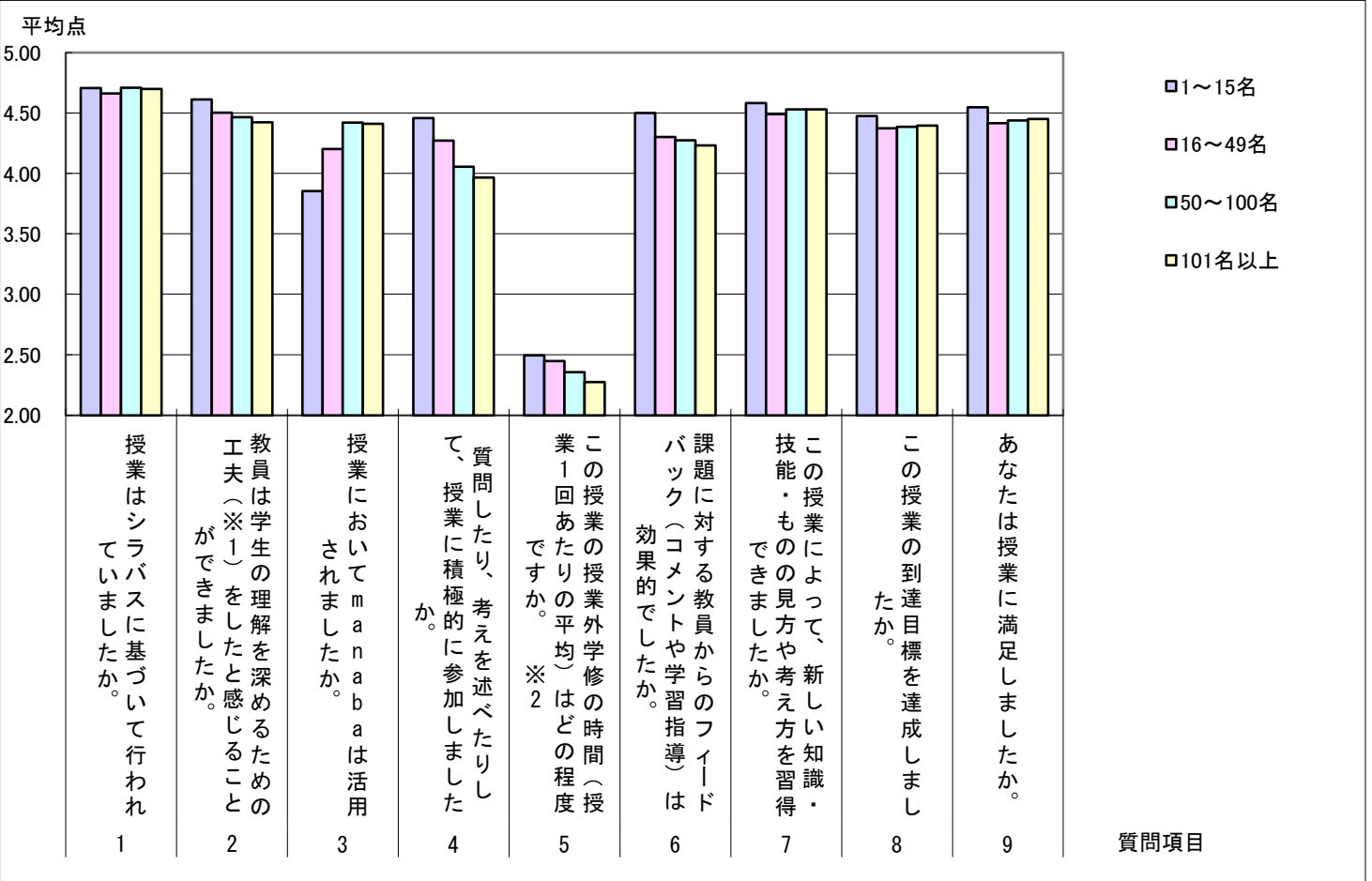


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(クラスサイズ別)大学

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
履修者数	2,206	21,411	23,393	9,744
回答者数	1,264	12,456	12,198	5,036
回答率(%)	57.30	58.18	52.14	51.68

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.71	4.66	4.71	4.70
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.61	4.50	4.47	4.42
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	3.85	4.20	4.42	4.41
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.46	4.27	4.05	3.97
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.49	2.45	2.36	2.27
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.50	4.30	4.27	4.23
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.58	4.49	4.53	4.53
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.48	4.37	4.39	4.40
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.55	4.42	4.44	4.45

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

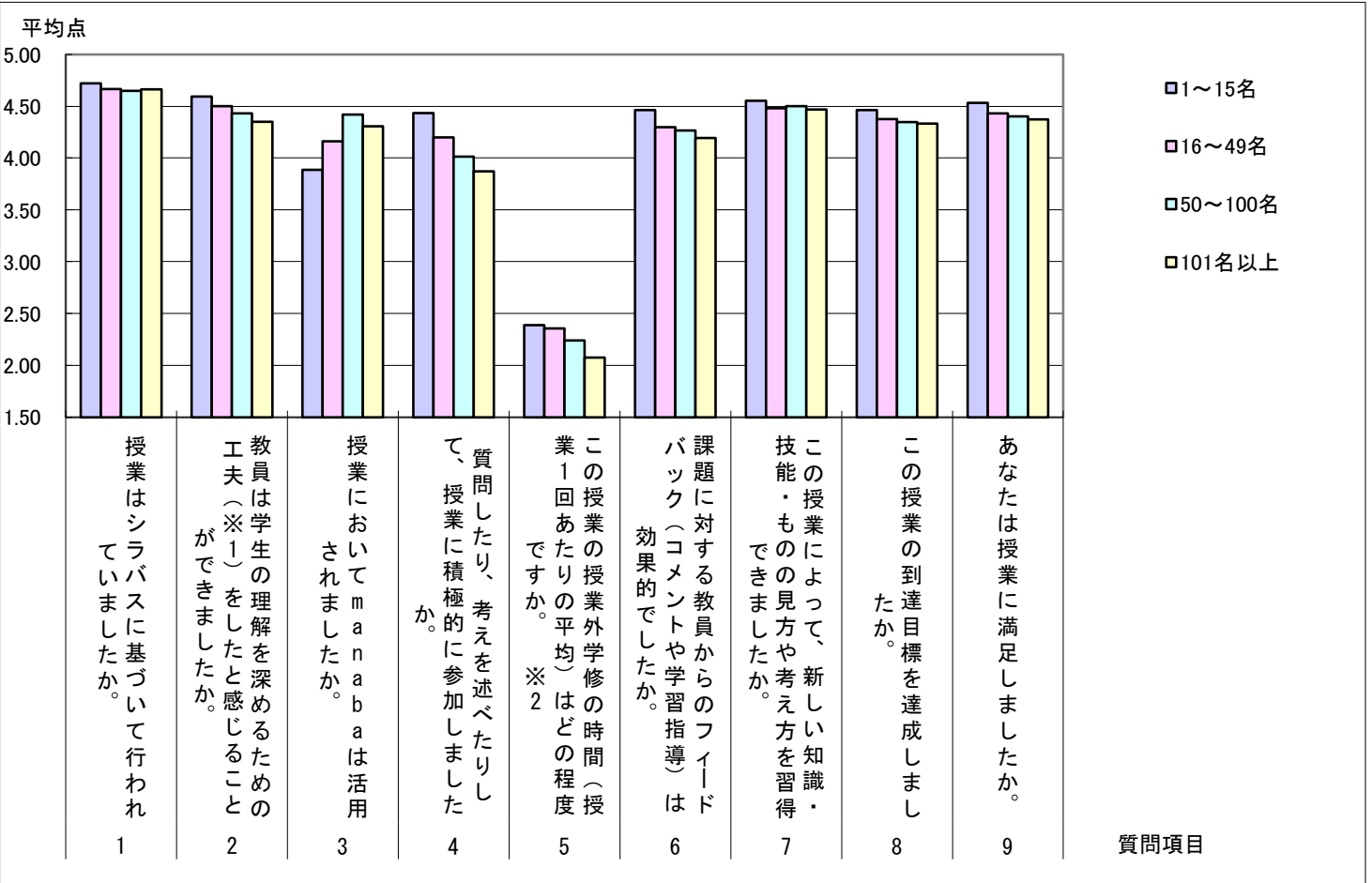


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(クラスサイズ別)大学

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
履修者数	2,373	21,314	20,500	7,511
回答者数	1,194	10,869	8,708	3,306
回答率(%)	50.32	50.99	42.48	44.02

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.72	4.67	4.65	4.66
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感することができましたか。	4.60	4.50	4.43	4.35
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	3.88	4.16	4.42	4.31
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.43	4.20	4.01	3.87
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.39	2.36	2.24	2.07
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.46	4.30	4.27	4.19
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.55	4.48	4.50	4.47
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.46	4.38	4.35	4.33
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.53	4.43	4.40	4.38

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

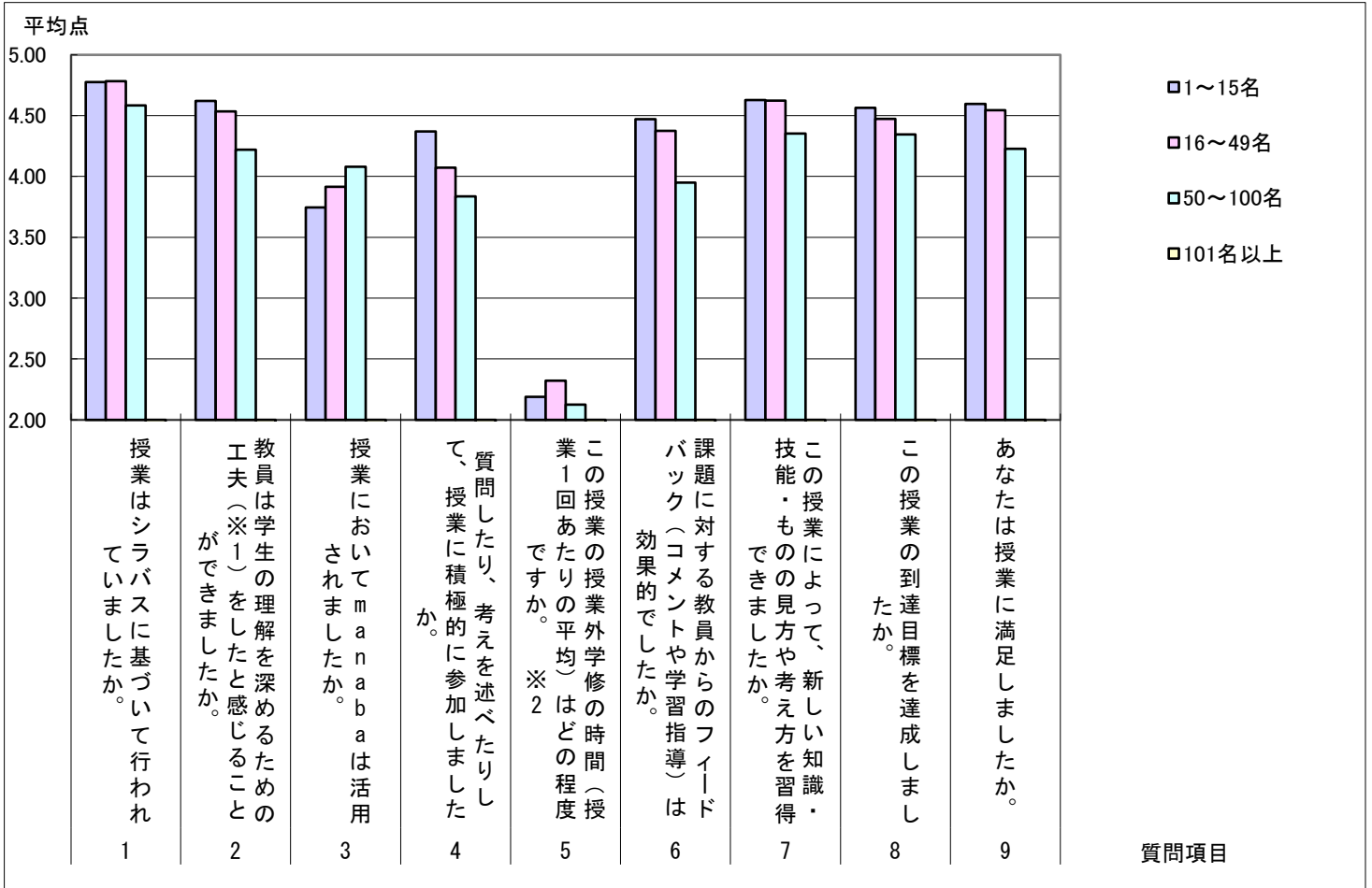


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(クラスサイズ別)短大

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
履修者数	405	1,460	314	－
回答者数	289	965	148	－
回答率(%)	71.36	66.10	47.13	－

		1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.77	4.78	4.58	－
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感ずることができましたか。	4.62	4.53	4.22	－
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	3.74	3.91	4.08	－
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.37	4.07	3.84	－
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.19	2.32	2.13	－
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.47	4.37	3.95	－
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.63	4.62	4.35	－
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.57	4.47	4.35	－
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.60	4.55	4.23	－

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

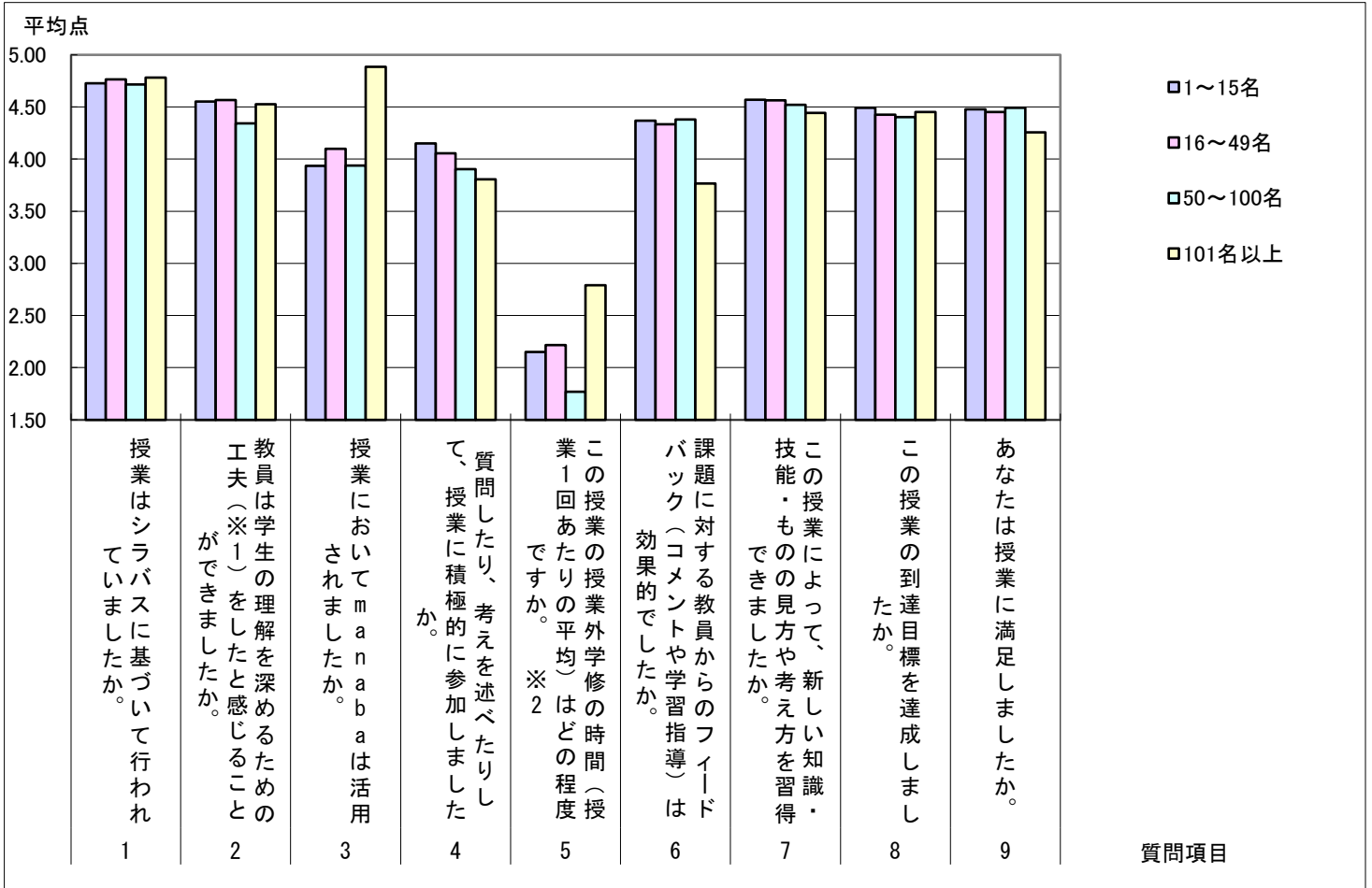


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(クラスサイズ別)短大

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
履修者数	372	1,268	287	148
回答者数	221	792	123	43
回答率(%)	59.41	62.46	42.86	29.05

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.73	4.77	4.72	4.78
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感ずることができましたか。	4.55	4.56	4.34	4.53
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	3.93	4.10	3.94	4.88
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.15	4.06	3.90	3.81
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.15	2.22	1.77	2.79
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.37	4.33	4.38	3.76
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.57	4.56	4.52	4.44
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.49	4.43	4.40	4.45
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.48	4.45	4.49	4.26

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

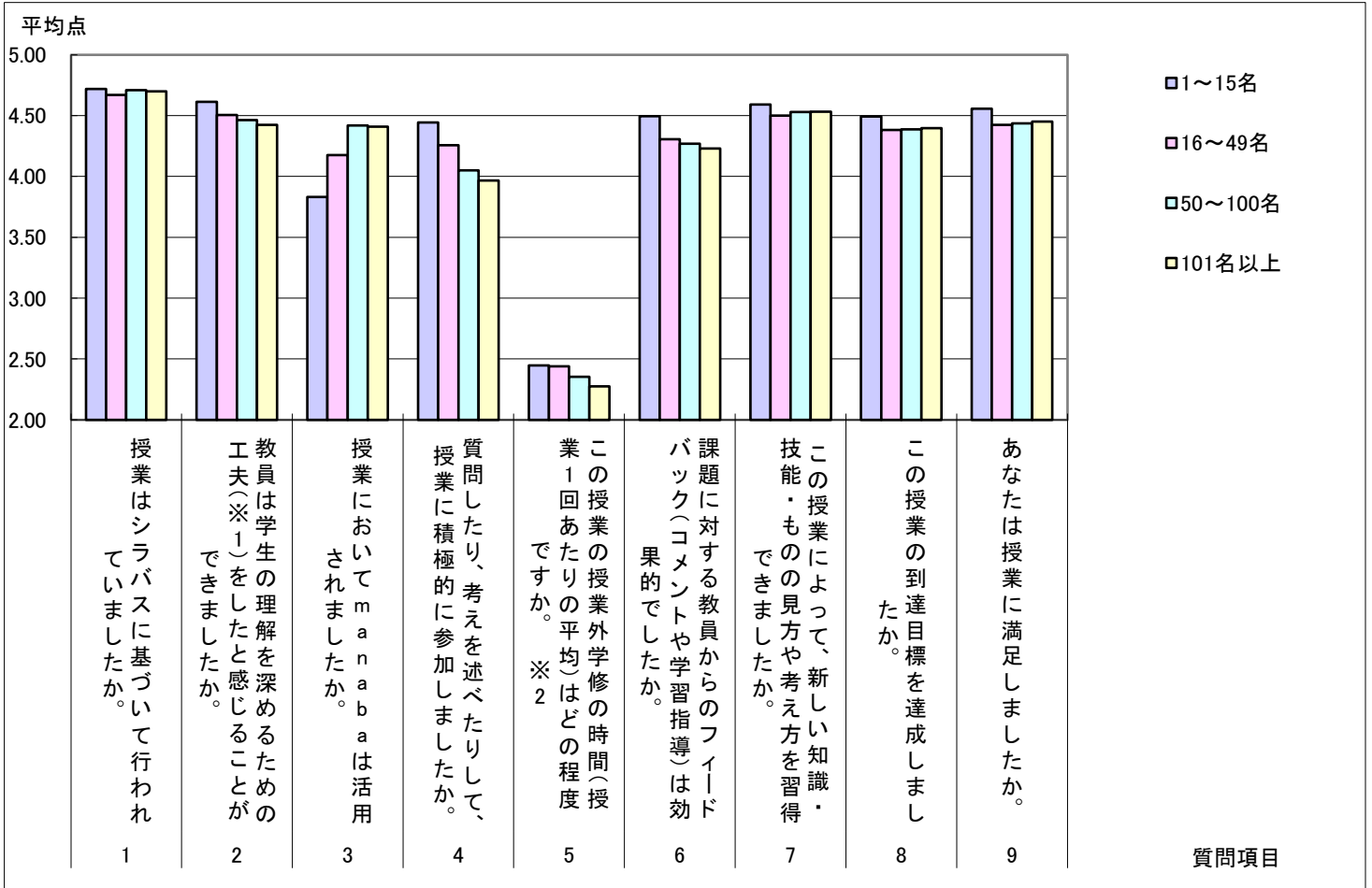


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(クラスサイズ別)大学・短大合計

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
履修者数	2,611	22,763	23,707	9,744
回答者数	1,553	13,353	12,346	5,036
回答率(%)	59.48	58.66	52.08	51.68

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.72	4.67	4.71	4.70
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.61	4.50	4.46	4.42
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	3.83	4.18	4.42	4.41
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.44	4.26	4.05	3.97
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.45	2.44	2.35	2.27
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.50	4.31	4.27	4.23
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.59	4.50	4.53	4.53
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.49	4.38	4.39	4.40
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.56	4.42	4.44	4.45

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

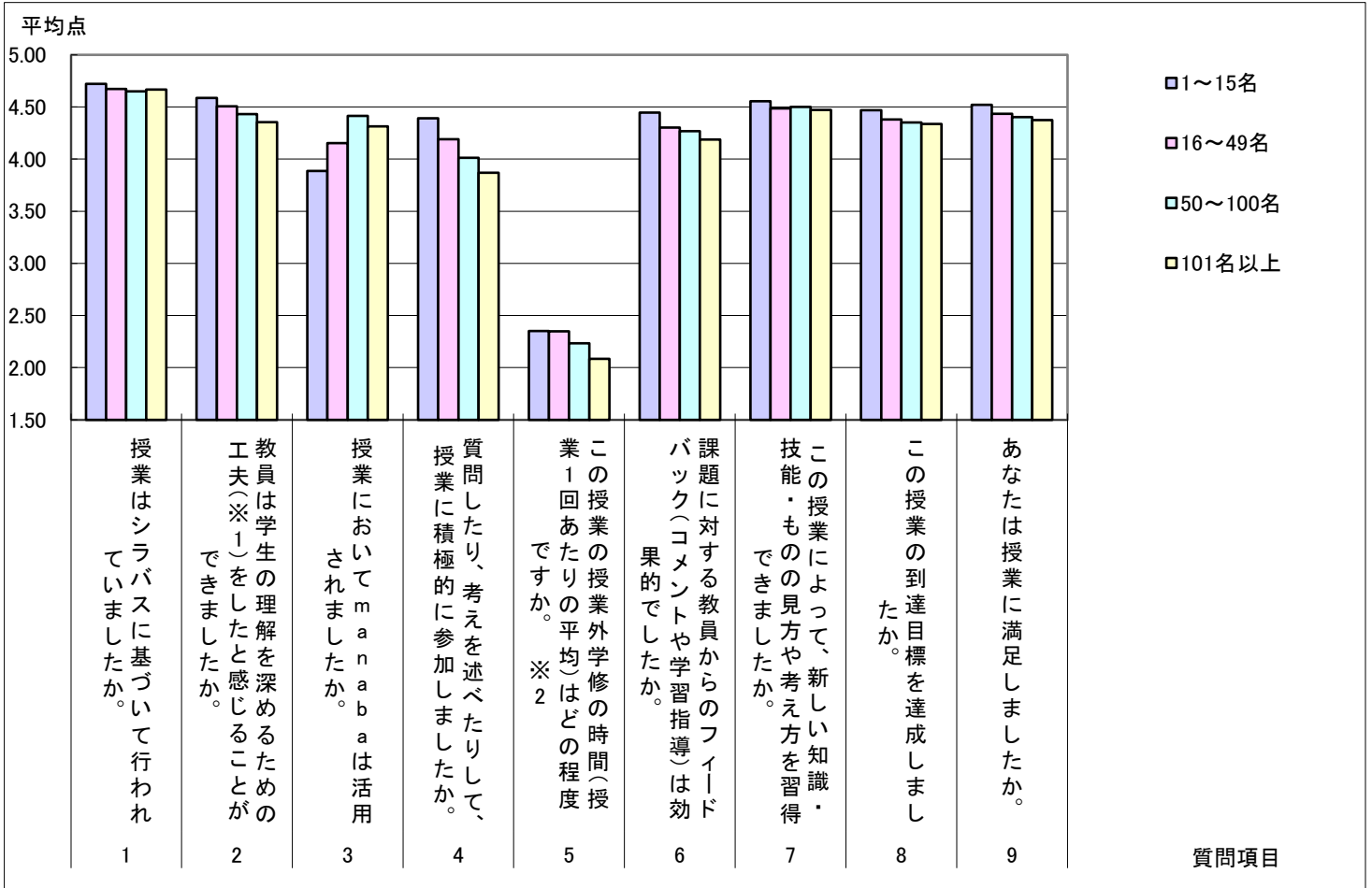


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(クラスサイズ別)大学・短大合計

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
履修者数	2,733	22,279	20,787	7,659
回答者数	1,406	11,489	8,831	3,349
回答率(%)	51.45	51.57	42.48	43.73

	1～15名	16～49名	50～100名	101名以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.72	4.67	4.65	4.67
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感ずることができましたか。	4.59	4.51	4.43	4.35
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	3.89	4.15	4.41	4.31
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.39	4.19	4.01	3.87
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.35	2.35	2.23	2.08
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.45	4.30	4.27	4.19
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.56	4.49	4.50	4.47
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.47	4.38	4.35	4.34
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.52	4.43	4.40	4.37

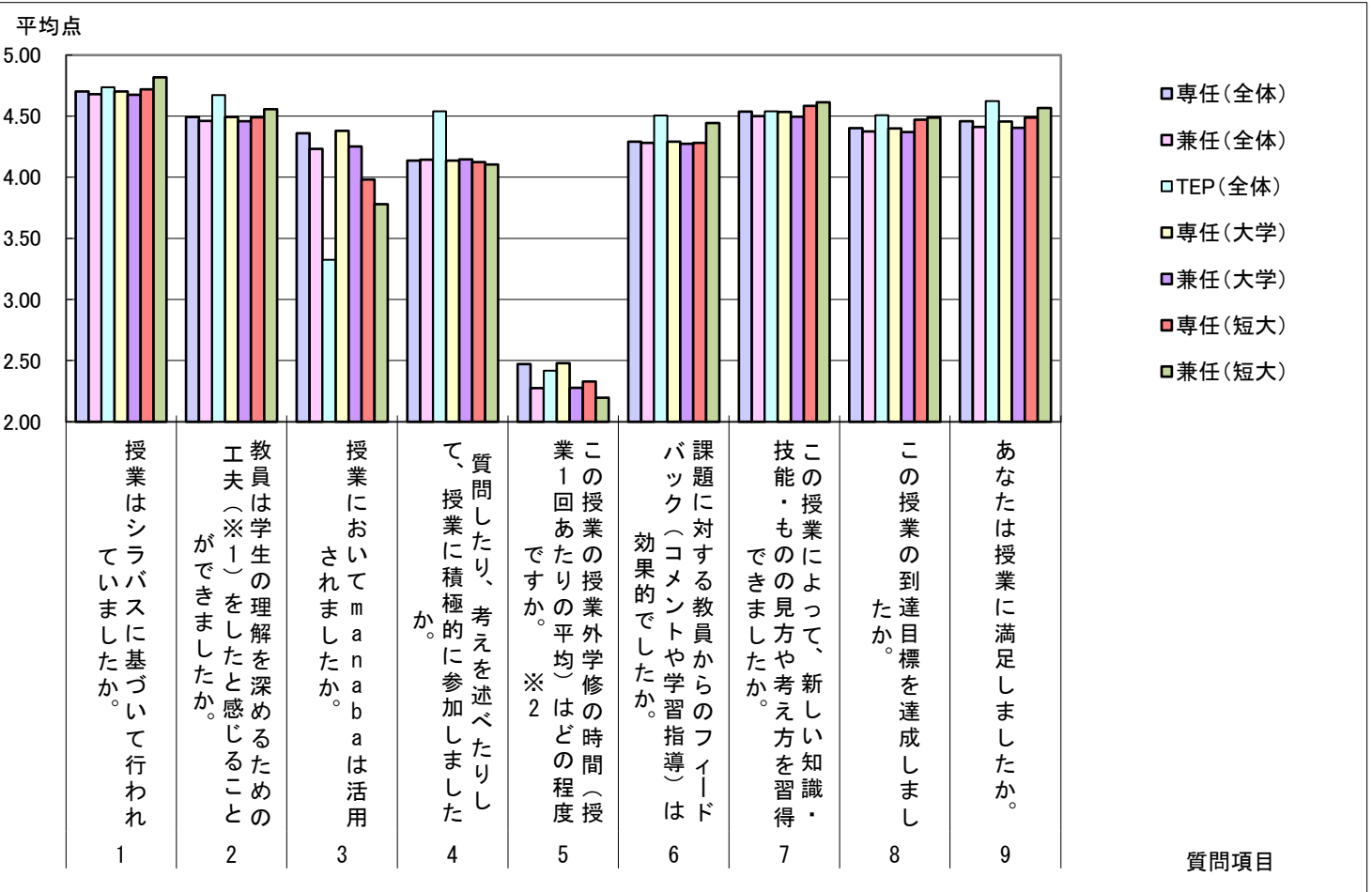
※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。



2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(専任・兼任別)

		専任(全体)	兼任(全体)	TEP(全体)	専任(大学)	兼任(大学)	専任(短大)	兼任(短大)
履修者数		32,907	25,161	757	31,738	24,259	1,239	940
回答者数		17,218	14,663	407	16,466	14,081	802	600
回答率(%)		52.32	58.28	53.76	51.88	58.04	64.73	63.83
		専任(全体)	兼任(全体)	TEP(全体)	専任(大学)	兼任(大学)	専任(短大)	兼任(短大)
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.70	4.68	4.74	4.70	4.67	4.72	4.82
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.49	4.46	4.67	4.49	4.46	4.49	4.56
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	4.36	4.23	3.32	4.38	4.25	3.98	3.78
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.14	4.14	4.54	4.14	4.15	4.12	4.10
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.47	2.27	2.42	2.48	2.28	2.33	2.20
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.29	4.28	4.51	4.29	4.27	4.28	4.44
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.54	4.50	4.54	4.54	4.50	4.58	4.61
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.40	4.37	4.51	4.40	4.37	4.47	4.49
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.46	4.41	4.62	4.46	4.40	4.49	4.57

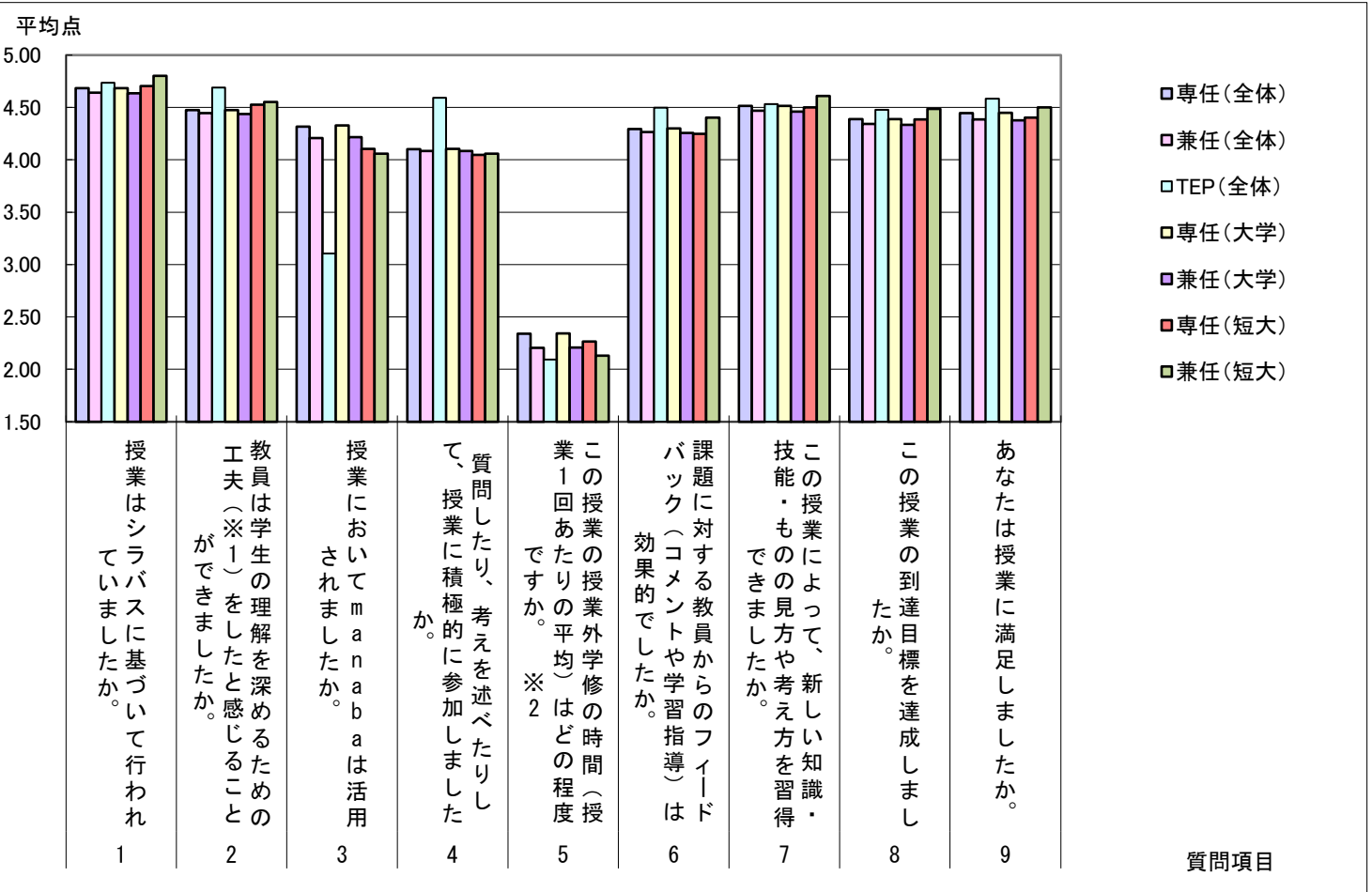
※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。



2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(専任・兼任別)

		専任(全体)	兼任(全体)	TEP(全体)	専任(大学)	兼任(大学)	専任(短大)	兼任(短大)
履修者数		30,291	22,163	773	29,379	21,315	1,080	995
回答者数		13,094	11,554	339	12,617	11,033	577	602
回答率(%)		43.23	52.13	43.86	42.95	51.76	53.43	60.50
		専任(全体)	兼任(全体)	TEP(全体)	専任(大学)	兼任(大学)	専任(短大)	兼任(短大)
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.68	4.64	4.74	4.69	4.63	4.70	4.80
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.47	4.45	4.69	4.47	4.44	4.53	4.55
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	4.32	4.21	3.10	4.33	4.22	4.11	4.06
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.10	4.08	4.59	4.10	4.08	4.05	4.06
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。※2	2.34	2.20	2.09	2.34	2.21	2.26	2.13
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.29	4.27	4.50	4.30	4.26	4.25	4.40
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.51	4.47	4.53	4.52	4.46	4.50	4.61
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	4.39	4.34	4.48	4.39	4.33	4.39	4.49
9	あなたは授業に満足しましたか。	4.45	4.38	4.58	4.45	4.38	4.40	4.50

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

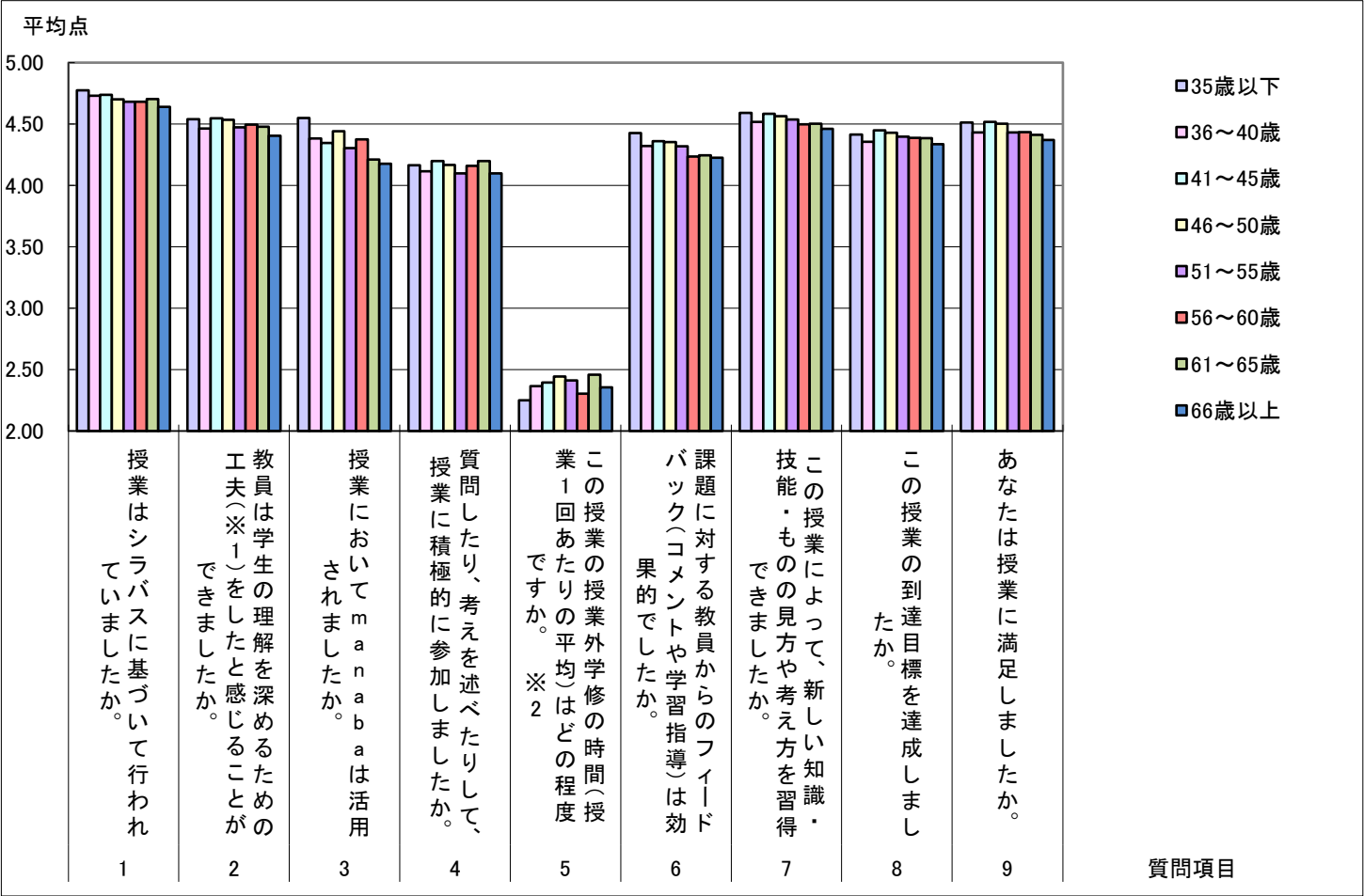


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(教員の年齢別)大学

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
履修者数	2,094	3,143	4,633	8,996	7,806	8,907	8,973	12,142
回答者数	1,170	1,703	2,335	4,748	4,409	4,702	5,249	6,613
回答率(%)	55.87	54.18	50.40	52.78	56.48	52.79	58.50	54.46

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.77	4.73	4.74	4.70	4.68	4.68	4.70	4.64
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.54	4.46	4.55	4.53	4.47	4.49	4.48	4.40
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.55	4.38	4.34	4.44	4.30	4.37	4.21	4.18
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.16	4.11	4.20	4.17	4.10	4.16	4.20	4.10
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	2.25	2.37	2.39	2.44	2.41	2.30	2.46	2.36
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.43	4.32	4.36	4.35	4.32	4.23	4.24	4.23
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.59	4.52	4.58	4.56	4.54	4.50	4.50	4.46
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.41	4.36	4.45	4.43	4.40	4.39	4.38	4.34
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.51	4.43	4.52	4.50	4.43	4.43	4.41	4.37

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

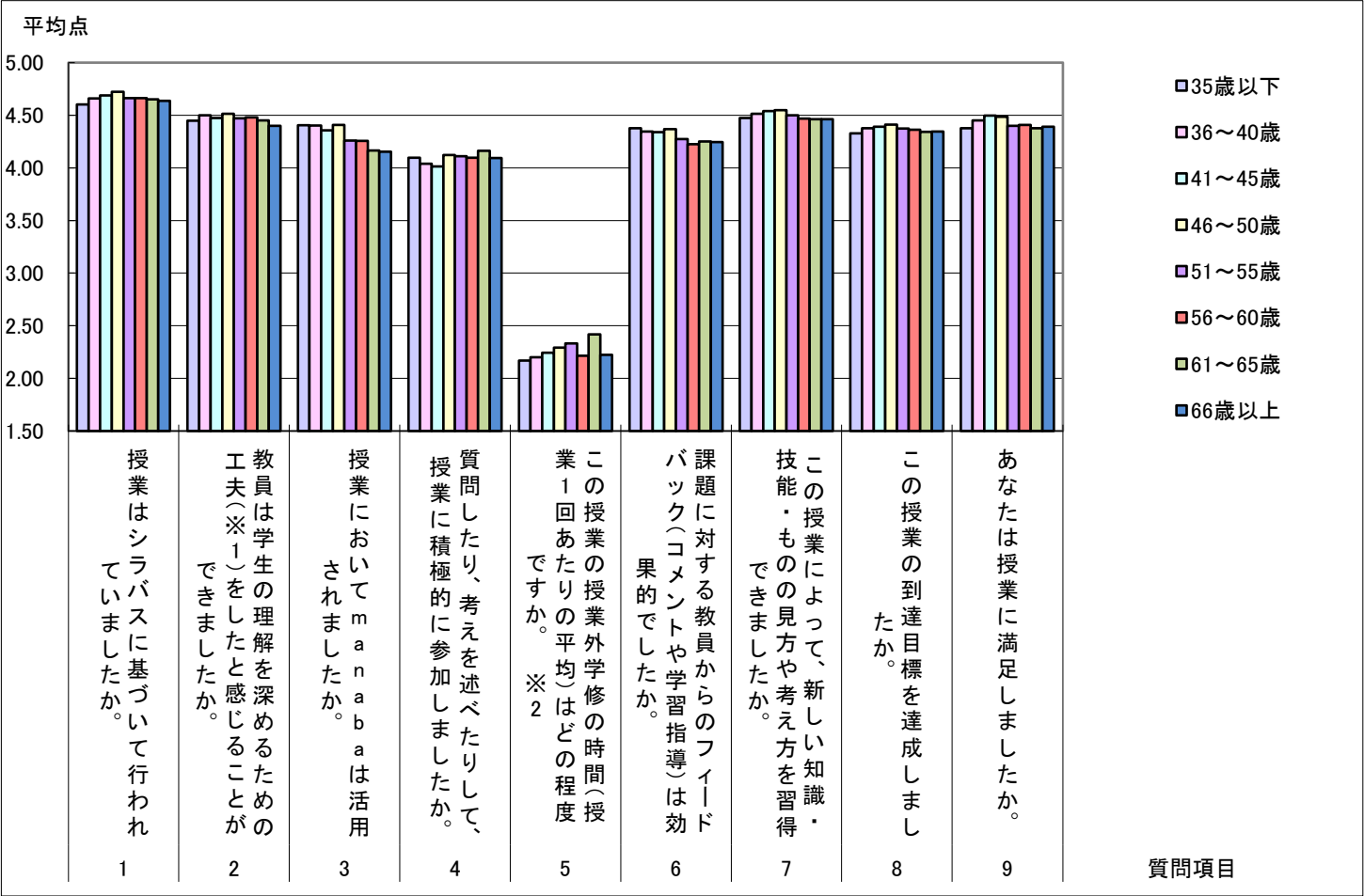


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(教員の年齢別)大学

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
履修者数	1,300	3,400	4,753	7,729	7,020	8,094	8,075	11,096
回答者数	710	1,529	2,034	3,285	3,232	3,758	4,097	5,344
回答率(%)	54.62	44.97	42.79	42.50	46.04	46.43	50.74	48.16

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.60	4.66	4.69	4.72	4.66	4.66	4.65	4.64
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.45	4.50	4.47	4.51	4.47	4.48	4.45	4.40
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.41	4.40	4.36	4.41	4.26	4.26	4.16	4.15
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.10	4.04	4.01	4.12	4.11	4.10	4.16	4.09
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	2.17	2.20	2.24	2.29	2.33	2.21	2.42	2.22
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.38	4.35	4.34	4.37	4.27	4.23	4.25	4.24
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.47	4.51	4.54	4.55	4.50	4.47	4.46	4.46
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.33	4.38	4.39	4.41	4.37	4.36	4.34	4.35
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.38	4.45	4.50	4.49	4.40	4.41	4.38	4.39

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

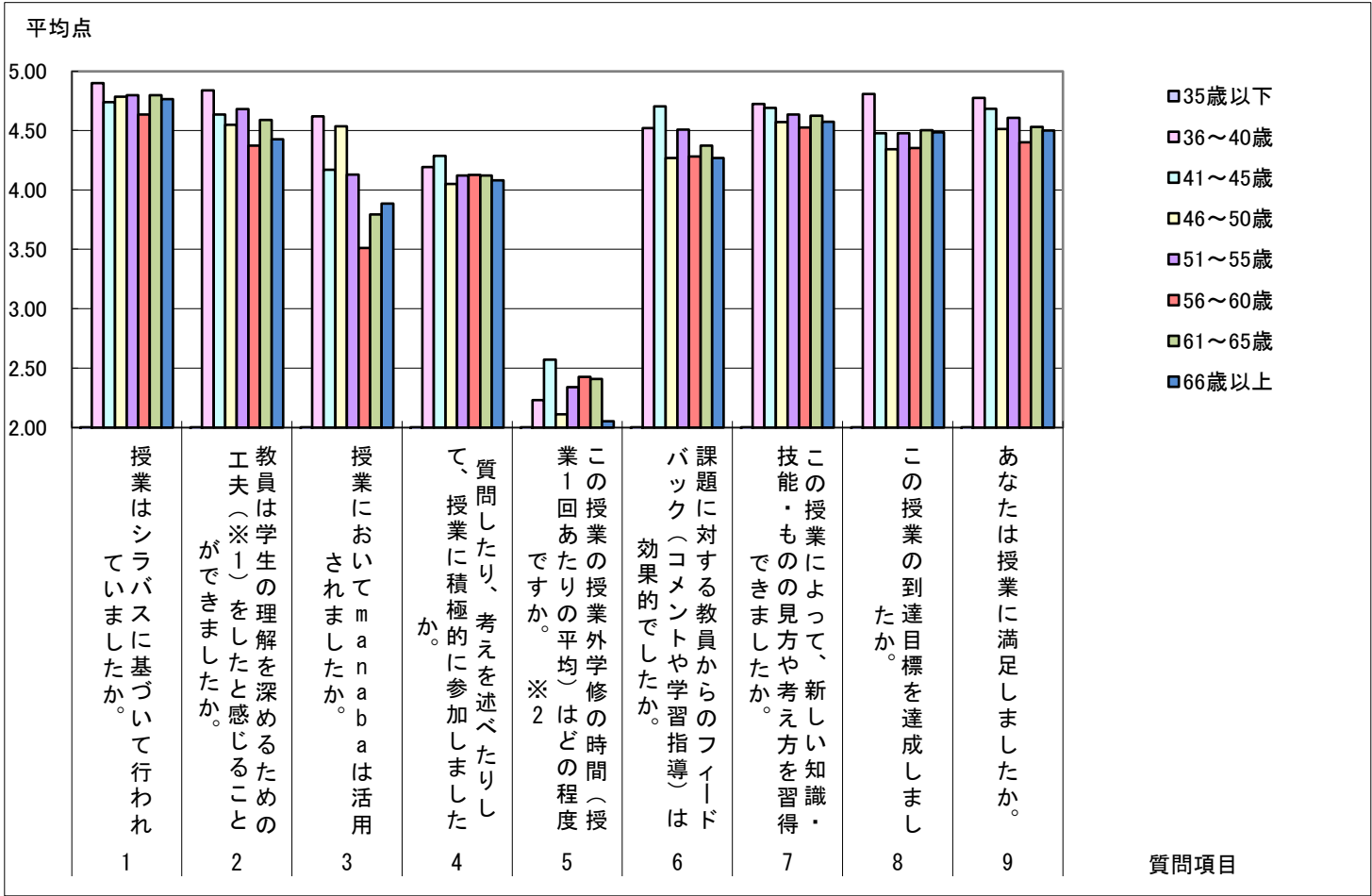


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(教員の年齢別)短大

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
履修者数	-	145	71	78	216	374	501	794
回答者数	-	80	42	43	155	255	343	484
回答率(%)	-	55.17	59.15	55.13	71.76	68.18	68.46	60.96

		35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
1	授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	-	4.90	4.74	4.79	4.80	4.64	4.80	4.76
2	教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	-	4.84	4.63	4.55	4.68	4.37	4.59	4.43
3	授業においてmanabaは活用されましたか。	-	4.62	4.17	4.53	4.13	3.51	3.79	3.88
4	質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	-	4.19	4.29	4.05	4.12	4.13	4.12	4.08
5	この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	-	2.23	2.57	2.11	2.34	2.43	2.41	2.05
6	課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	-	4.52	4.70	4.27	4.51	4.28	4.37	4.27
7	この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	-	4.73	4.69	4.57	4.63	4.53	4.62	4.58
8	この授業の到達目標を達成しましたか。	-	4.81	4.48	4.34	4.48	4.35	4.50	4.49
9	あなたは授業に満足しましたか。	-	4.78	4.68	4.51	4.61	4.40	4.53	4.50

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

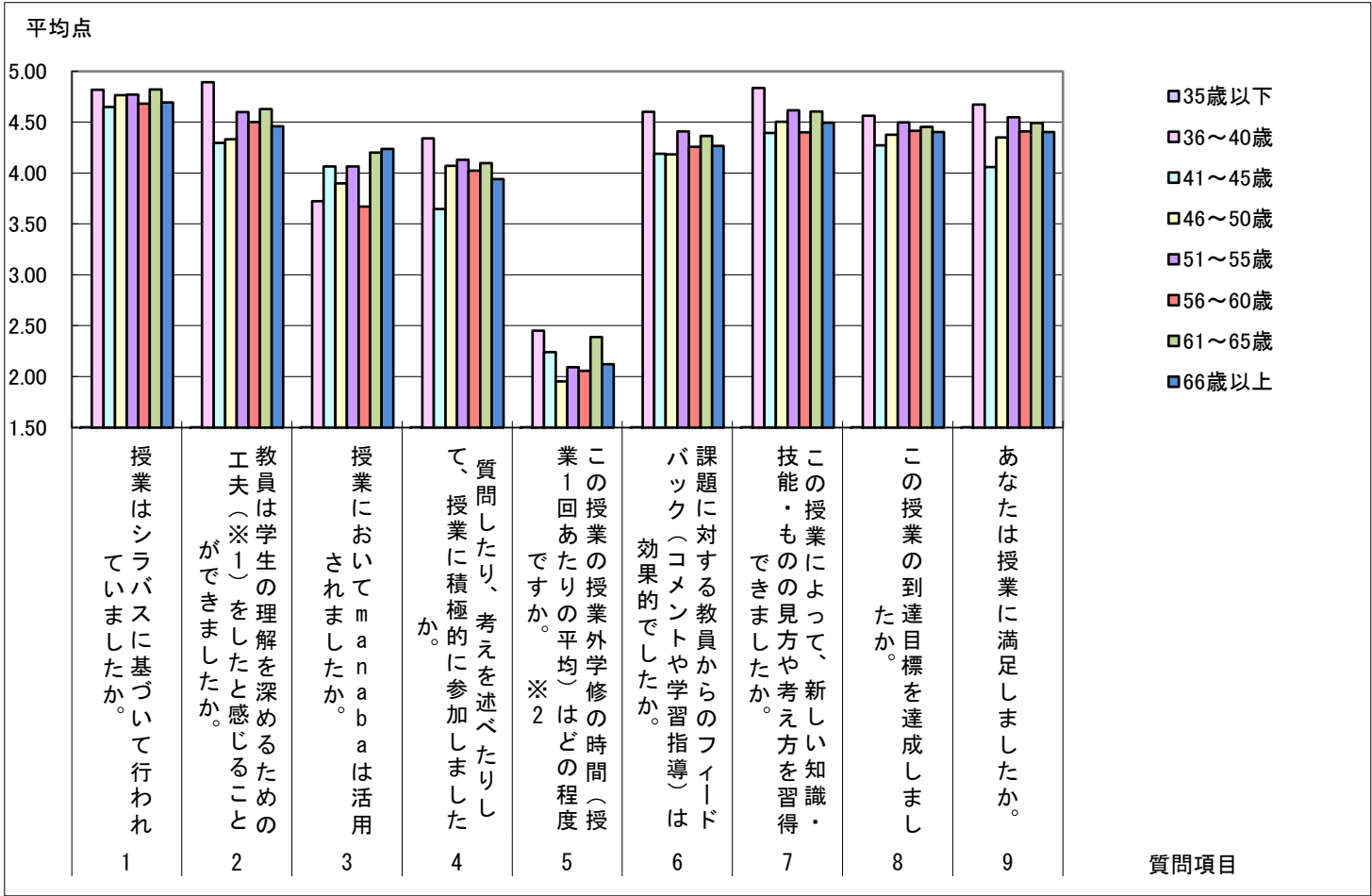


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(教員の年齢別)短大

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
履修者数	-	73	59	202	381	171	507	682
回答者数	-	55	34	121	246	94	310	319
回答率(%)	-	75.34	57.63	59.90	64.57	54.97	61.14	46.77

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	-	4.82	4.65	4.76	4.77	4.68	4.82	4.69
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	-	4.89	4.29	4.33	4.60	4.50	4.63	4.46
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	-	3.72	4.06	3.90	4.06	3.67	4.20	4.24
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	-	4.34	3.65	4.07	4.13	4.02	4.10	3.94
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	-	2.45	2.24	1.95	2.09	2.06	2.39	2.12
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	-	4.60	4.19	4.18	4.41	4.26	4.36	4.26
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	-	4.84	4.39	4.50	4.62	4.40	4.60	4.50
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	-	4.56	4.27	4.38	4.50	4.41	4.45	4.40
9 あなたは授業に満足しましたか。	-	4.67	4.06	4.35	4.55	4.41	4.49	4.40

※1: 小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2: 授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

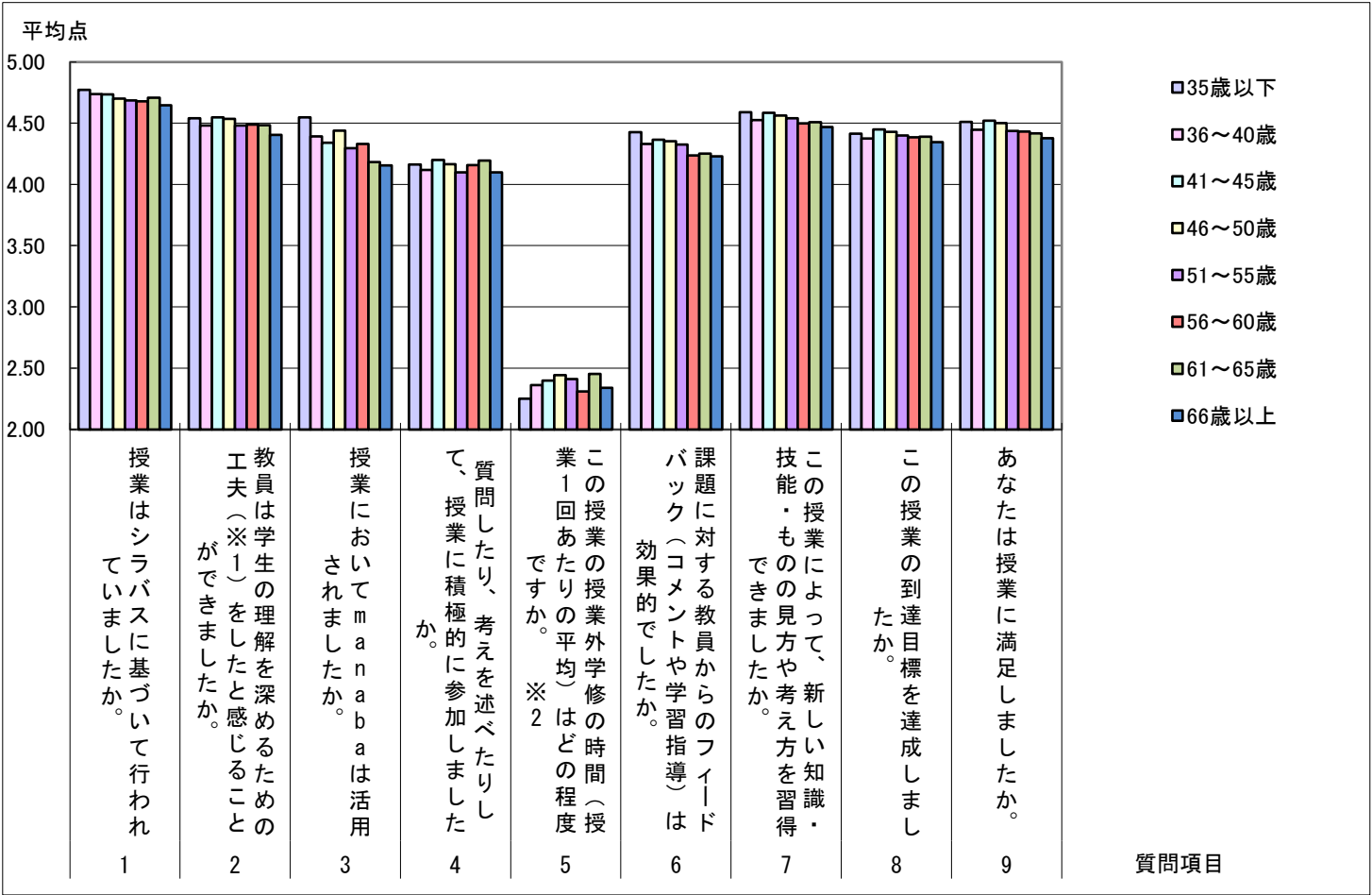


2025年度前期 授業改善のためのアンケート集計結果(教員の年齢別)大学・短大合計

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
履修者数	2,094	3,288	4,704	9,025	8,022	9,281	9,434	12,917
回答者数	1,170	1,783	2,377	4,760	4,564	4,957	5,561	7,091
回答率(%)	55.87	54.23	50.53	52.74	56.89	53.41	58.95	54.90

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.77	4.74	4.74	4.70	4.69	4.68	4.71	4.65
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.54	4.48	4.55	4.54	4.48	4.49	4.48	4.41
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.55	4.39	4.34	4.44	4.30	4.33	4.18	4.16
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.16	4.12	4.20	4.16	4.10	4.16	4.19	4.10
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	2.25	2.36	2.40	2.44	2.41	2.31	2.45	2.34
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.43	4.33	4.36	4.35	4.33	4.24	4.25	4.23
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.59	4.53	4.59	4.56	4.54	4.50	4.51	4.47
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.41	4.38	4.45	4.43	4.40	4.39	4.39	4.35
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.51	4.45	4.52	4.50	4.44	4.43	4.42	4.38

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。

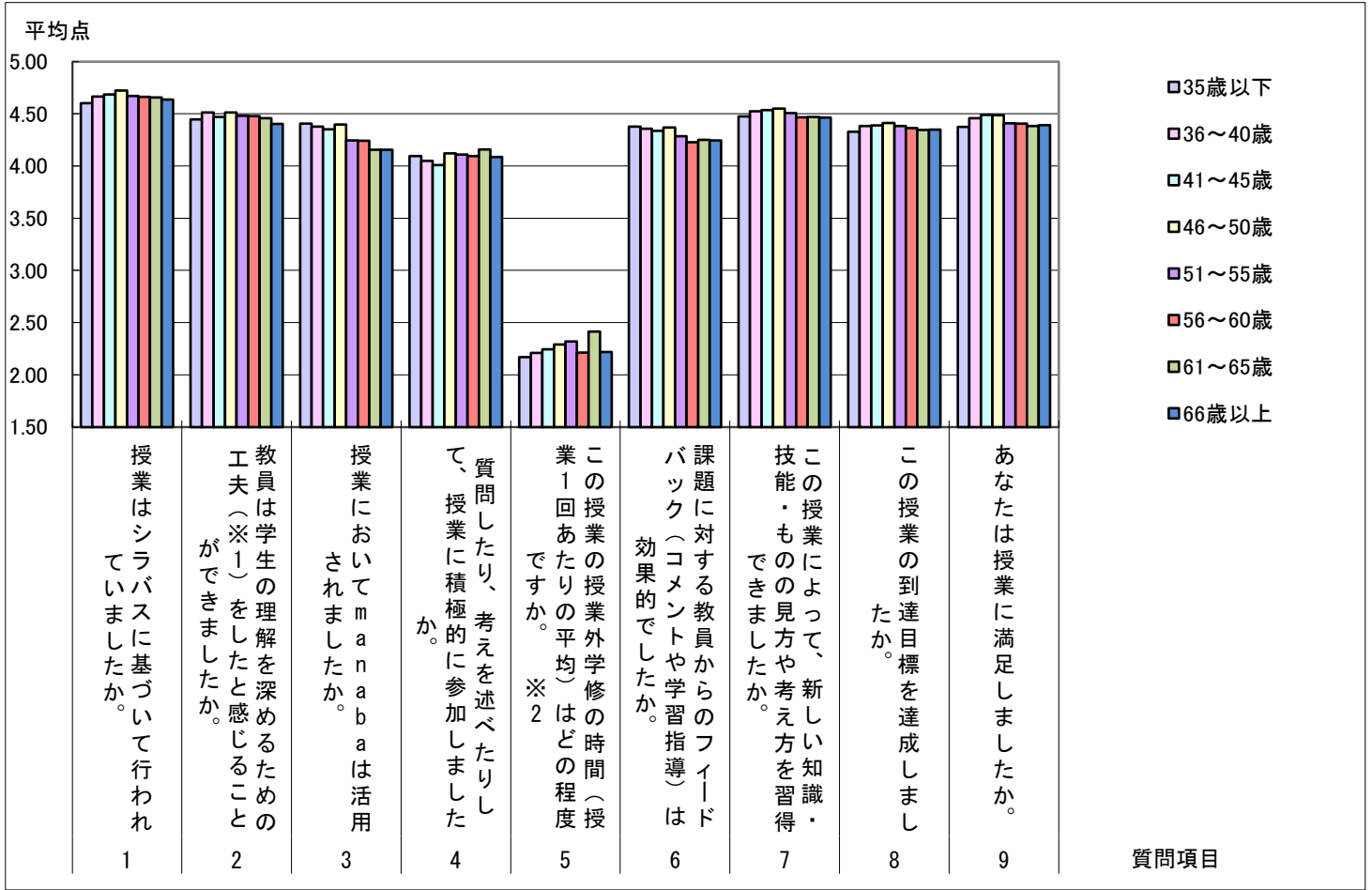


2025年度後期 授業改善のためのアンケート集計結果(教員の年齢別)大学・短大合計

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
履修者数	1,300	3,473	4,812	7,835	7,401	8,265	8,402	11,739
回答者数	710	1,584	2,068	3,345	3,478	3,852	4,304	5,646
回答率(%)	54.62	45.61	42.98	42.69	46.99	46.61	51.23	48.10

	35歳以下	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	66歳以上
1 授業はシラバスに基づいて行われていましたか。	4.60	4.67	4.69	4.72	4.67	4.66	4.66	4.64
2 教員は学生の理解を深めるための工夫(※1)をしたと感じることができましたか。	4.45	4.51	4.47	4.51	4.48	4.48	4.46	4.40
3 授業においてmanabaは活用されましたか。	4.41	4.38	4.35	4.40	4.25	4.24	4.16	4.16
4 質問したり、考えを述べたりして、授業に積極的に参加しましたか。	4.10	4.05	4.01	4.12	4.11	4.09	4.16	4.09
5 この授業の授業外学修の時間(授業1回あたりの平均)はどの程度ですか。 ※2	2.17	2.21	2.24	2.29	2.32	2.21	2.41	2.22
6 課題に対する教員からのフィードバック(コメントや学習指導)は効果的でしたか。	4.38	4.36	4.34	4.37	4.28	4.23	4.25	4.25
7 この授業によって、新しい知識・技能・ものの見方や考え方を習得できましたか。	4.47	4.53	4.54	4.55	4.51	4.47	4.47	4.46
8 この授業の到達目標を達成しましたか。	4.33	4.38	4.39	4.41	4.38	4.36	4.34	4.35
9 あなたは授業に満足しましたか。	4.38	4.46	4.49	4.49	4.41	4.41	4.38	4.39

※1:小テスト、小レポート、グループワーク、クリッカー、予習・復習の説明など
※2:授業外学修には、予習・復習、課題・レポートの作成、作品の製作、プレゼンテーションの準備、友人等との議論、PCやスマホ等で関連事項を検索した時間を含みます。



2 各学部の令和7年度FD活動の概要報告

(1) 家政学部

1. 令和7年度家政学部 FD 委員会構成

委員長：水谷千代美（被服学科）

委員：原木英一（被服学科） 小清水孝子、小林実夏（食物学科） 大谷洋貴（児童学科） 中川まり、
宮田安彦（ライフデザイン学科）

大妻女子大学ファカルティディベロップメント委員会：中島永晶（家政学部長）

2. 授業改善のためのアンケート

令和7年度「授業改善のためのアンケート」はUNIPAを利用したWEB方式での実施とし、昨年同様に、専任教員・非常勤教員が担当する原則全科目の実施対象とした。

前期（実施時期：学期末）・後期（同、学期末）とも同じ設問構成とし、設問数全9問（選択式は6段階）により執り行った。回答依頼は、教員の任意とし、昨年同様、専任教員・非常勤教員ともに原則全科目の実施対象で行った。実施期間は、前期は令和7年7月7日（月）～7月19日（土）までで実施し、後期は7年12月8日（月）～12月20日（土）までで実施した。

以下、「授業改善のためのアンケート」調査の実施とその集計結果等、概況を記す。

①前後期実施状況

家政学部 回答者数／履修者数 前期：17,073名／30,691名 （回答率55.6% *昨年43.7%）

後期：12,830名／27,840名 （回答率46.1% *昨年36.1%）

②総評：家政学部全体として

「満足度」(Q9)の平均点は、前期4.44、後期4.40であった。前年度は前期4.43、後期4.40だったので、前後期ともにほぼ昨年同様の結果となった。他の設問についても、ほぼ昨年同様の結果となった。

③家政学部全体とアンケート区分別を比較して

「外国語科目」では、多くの設問で全体の平均点を下回り、「管理栄養士専攻専門科目」・「ライフデザイン学科専攻科目」後期では全体の平均点を上回る設問が多い。Q5（授業外学修時間）をみると、専門科目では0.1ポイント以上高い結果が多くみられた。

④家政学部全体と授業形態別を比較して

「実技」「実験」「実習」が全体の平均点を上回る項目が多い結果であった。「実技」ではQ5（授業外学修時間）は全体の平均点を下回っている。Q6（教員からのフィードバック）をみると、全体を大きく上回る授業形態が多いが、「講義」では前後期ともに下回っている。なお、回答者数が100名未満の区分は考察から除外した。

⑤家政学部全体とクラスサイズ別を比較して

例年同様に、「1～15名」が全体の平均点を上回る項目が多く、クラスサイズが大きい程、低くなる傾向である。Q4（授業への参加）をみると、「1～15名」と「16～30名」は前後期ともに0.1ポイント以上高く、「76～100名」後期、「101名以上」前後期で0.1ポイント以上低くなっている。Q6（教員からのフィードバック）をみると、「1～15名」は前後期ともに0.1ポイント以上高く、「101名以上」後期では0.1ポイント以上低くなっている。

⑥家政学部全体と5学部所属学科専攻別を比較して

「食物学」、「児童教育」が全体の平均点を上回る項目が多く、「情報デザイン」、「アジア文化」が下回る項目が多い結果であった。Q5（授業外学修時間）をみると、「被服」の前期、「食物学」・「ライフデザイン」の後期、「管理栄養士」・「児童教育」の前後期で0.1ポイント以上高くなっている。

なお、回答者数が100名未満の区分は考察から除外した。

3. 学部専任教員によるFD報告

今年度も昨年度と同様に、後期授業アンケート結果も示された後、令和8年2月27日に、以下の要領で家政学部4学科のFD委員を通じて、学部教員にFD報告書の作成を依頼した。各教員からFD報告文を回収することとした。

質問項目については、昨年度のものを参考に、令和7年度の状況をふまえ、FD委員会にて検討した結果、以下A～Cの3項目について、自由選択の任意回答とし、一人当たりの総記述量が15～20行（最大800字相当）に収まるよう報告文の作成を依頼した。回収はメールによるものとし、2026年3月16日受取までを期日として実施した。以下A～Cの3項目の中から自由選択式で、記名入り報告文を各教員からメールにて回収した。

-
- 項目 A：今年度の授業アンケート実施科目のうち1科目を選択し、その結果を踏まえた次年度以降の取り組みについて記して下さい。
 - 項目 B：アクティブ・ラーニング（チュートリアル型または実践体験型）を実施した授業について、その効果や問題点を挙げてください。実施しなかった授業については、それを検討する際に感じた障壁・問題点を記してください。
 - 項目 C：学生がレポートや卒業論文においてAIを使用したと思われるケースはありましたか。その対処について悩まれた点を記してください。
-

4. 本年度の家政学部FD委員会による主な報告・審議事項

令和7年4月19日に、令和6年度「家政学部FD活動報告書」提出と学部教員への頒布（PDF方式）第1回家政学部FD委員会連絡及び文書協議（5月21日：①「授業改善のためのアンケート」実施科目（案）の検討）

なお、令和7年度の活動報告の詳細については「2025年度家政学部FD報告書」を参照されたい。「家政学部FD報告書のアンケート分析については過年度同様、株式会社教育ソフトウェアに外部委託し、令和8年2月13日に発注、3月31日に納品された。

5. 次年度への課題と引き継ぎ事項

- ・家政学部としての学部内FD活動の検討と実施（今後のFD活動の在り方の模索と研修企画の立案）
- ・令和8年度の「授業改善のためのアンケート」の適切な実施のための委員会としての留意事項の確認、ならびに、アンケート結果からのフィードバック等活用についての学部内検討

以上

（２）文学部

１．令和７年度文学部 FD 委員会構成

委員長：石川千暁（英語英文学科）

委員：木戸雄一（日本文学科）、倉住薫（日本文学科）、大島範子（英語英文学科）、榎本恵子（コミュニケーション文化学科）、上村博昭（コミュニケーション文化学科）

２．授業に関する意見交換

各学科において、授業の進め方や指導法、学生への対応と情報共有、授業資料の共有や共通テキストの検証等、授業に関する意見交換を随時行い、授業の改善に努めた。

３．授業担当者懇談会

例年実施されている授業担当者懇談会は、今年度も予定通り 5 月 10 日（土）に各学科で実施された〔日本文学科・英語英文学科：対面、コミュニケーション文化学科：オンライン（Zoom）〕。学生の学力や意欲の傾向の共有をはじめとして、授業の進め方や学生対応、manaba や UNIVERSAL PASSPORT といった教育支援システム、大学の施設・設備等について、非常勤講師と専任教員との間で具体的な情報提供や意見交換がなされた。

４．学科の FD 活動（学生懇談会）

文学部では専任教員と学生との懇談会「文学部学生懇談会」を 2021 年度より開催している。本懇談会の目的は、文学部をめぐる教育・学習環境、授業、学生生活全般に関して、授業改善のためのアンケート等では届かない多様な意見や要望を、学生との懇談を通じて集約することにある。昨年度は学科ごとの開催としたところ、学生が意見を述べやすく、各学科の特性に応じた意見を集約しやすいという効果が認められたため、今年度も同様に学科ごとに実施した。以下、各学科の実施状況について述べる。

日本文学科では、2025 年 12 月 18 日（木）の昼休みに対面で開催した。学部 FD 委員 2 名および日本文学科長が出席し、参加した学生数は 9 名であった。

英語英文学科では、2025 年 11 月 27 日（木）の昼休みに対面で開催した。学部 FD 委員 2 名および英語英文学科長が出席し、参加した学生数は 5 名であった。

コミュニケーション文化学科では、2025 年 12 月 15 日（月）の昼休みに対面で開催した。学部 FD 委員 2 名およびコミュニケーション文化学科長が出席し、参加した学生数は 5 名であった。

事前広報として、学科ごとに manaba のコースニュース配信やポスターの作成・掲示、授業時の案内等を通じて学生への周知に努めた。また昼休みに設定し、事前の申し込みは不要として気軽な参加を促した。

学生との懇談は例年同様に自由討議形式とした。参加した学生からは、授業およびカリキュラム、教室や図書館等の学習環境・設備、学食やロッカー・事務手続きなど学生生活に関わること等、具体的で多様な意見・要望が提示され、充実した懇談会となった。対面で直接、学生の視点からの声を集約するという点で、教員にとっても気づきの得られる、大きな意義のある活動であった。懇談会を通じて学生から得られた意見・要望等は「2025 年度大妻女子大学文学部 FD 活動報告書」において学科ごとにまとめている。

5. 学会活動

各学科の学会活動も活発に行われた。以下に列挙する。

日本文学科：2025 年 7 月 3 日（木）国文学会総会、同年 9 月 25 日（木）卒業論文中間発表会、同年 12 月 16 日（火）国文学会例会。

英語英文学科：2025 年 6 月 3 日（火）総会（紙面）、同年 11 月 19 日（水）秋季例会、同年 12 月 23 日（火）レシテーションコンテスト、2026 年 1 月 29 日（木）卒業論文発表会。

コミュニケーション文化学科：2025 年 4 月 4 日（金）新入生オリエンテーション・歓迎会、同年 6 月 9 日（月）総会・講演会、同年 11 月 11 日（火）例会（プレゼンテーション大会）、2026 年 1 月 27 日（火）例会（卒業論文発表会）。

6. 授業改善のためのアンケート

例年実施されている「授業改善のためのアンケート」は、今年度も前期と後期の 2 回、前期は 7 月 7 日（月）から 19 日（土）、後期は 12 月 8 日（月）から 20 日（土）の期間に学内ポータルサイト UNIVERSAL PASSPORT にてオンラインで実施された。アンケートの実施対象としては、これまでの方針に従い、特殊な実施形態の科目（卒業論文・ゼミ・オムニバス等）や少人数履修者科目のような例外を除いて、原則として全ての授業を対象として実施された。

資料「授業改善のためのアンケート集計結果（文学部全体）」に示されたアンケート回答者数および回答率は次の通りである。アンケート回答者数は、前期 13,772 名、後期 11,245 名、前後期合算で 25,017 名であった。受講者数は前期 24,227 名、後期 22,853 名であり、回答率は前期 56.85%、後期 49.21%となっている。前期はいずれも過半数を超える回答率を示しており、学生の関心や協力姿勢が一定程度確保されている状況がうかがえる。

前期と後期を比較すると、回答者数・回答率ともに後期で低下する傾向が見られる。これは例年見られる傾向と同様であり、後期アンケート実施時期が学期末にあたり、定期試験や年末行事等が重なることによる影響も考えられる。特に後期においては、授業内での周知や回答時間の確保など、より具体的な働きかけを行うことが回答率維持・向上の鍵となるだろう。アンケートは授業改善の基礎資料であることから、学生にその意義を共有しつつ、主体的な回答を促す取り組みを継続していく必要がある。

なお、具体的な設問に対する回答結果として、設問 3、4、6～9 の文学部全体平均値は、前期 4.35、後期 4.30 であった。いずれも 4 点台を維持しており、全体として高い評価水準が安定している。とりわけ新しい知識等の習得を問う設問 7 は前期 4.50、後期 4.46 と、全設問中でも上位に位置する高評価を示している。わずかな数値の変動はあるものの、前後期を通じて 4.4 点台後半を維持していることから、学生に強く支持されている項目であると考えられる。また、授業の進め方、教員の工夫やフィードバック、学生自身の積極的な参加や学修成果等を問う設問 3、4、6、8 も概ね 4 点台前半から中盤で推移しており、授業運営や学修支援の取り組みが一定の成果を上げていることが確認できる。設問 9 の授業に対する満足度も前期 4.43、後期 4.41 と高水準を示しており、全体として安定した満足度が維持されている。詳細な分析については、2025 年度文学部 FD 活動報告書において学科別に検討する予定である。

以上

(3) 社会情報学部

1. 令和7年度社会情報学部FD委員会の構成

委員長 市村哲（情報デザイン専攻）

委員 山田幸三（社会生活情報学専攻主任）、大橋寿美子（環境情報学専攻主任）、木村ひとみ（環境情報学専攻）、田中清（情報デザイン専攻主任）、杉山昂平（社会生活情報学専攻）

オブザーバー 関えいこ（学務助手：庶務・記録）

2. 令和7年度のFD活動の概要

今年度は社会情報学部が組織的なFD活動を開始してから24年目に当たる。これまでの活動の成果を継承しつつ、社会情報学部FD委員会を計10回（4月9日、5月7日、6月11日、7月9日、10月8日、11月5日、12月3日、（文章協議）1月7日、2月5日、3月3日）開催し、多彩なFD活動に取り組んだ。また、Google Drive上の共有フォルダも活用し、より緊密な情報共有・意見交換に努めた。

なお、活動の詳細については、『令和7年度社会情報学部FD活動報告書』にて報告する。

以下、箇条書きにて各活動について概要を記す。

①入学時の学生生活調査

令和7年4月1日～4月30日実施。

新入生に対し、アンケート調査を行った。

②特定枠プロジェクト研究への助成

令和7年4月16日～6月6日募集。応募なし。

③より良い授業評価アンケートのための教育活動

令和7年4～7月実施。

新入生に対し、基礎演習（「社会生活情報基礎演習」「環境情報学基礎演習」「情報デザイン基礎演習」）において、「授業評価アンケート」の目的や意義などについて解説を行った。

④教員相互の授業公開および参観

令和7年9月29日（月）～11月8日（土）に実施。

⑤FD研修会

令和7年9月17日（水）にZoomを用いたリアルタイムオンライン形式にて実施した。

講師 大野江奈（障害学生修学支援室）、中野希大（情報デザイン専攻）：

「障害学生、要配慮学生への対応について」

⑥FD研究会

令和7年9月17日（水）、FD研修会終了後にZoomにて実施した。

報告：磯山直也（情報デザイン専攻）「スクリーンタイムからグリーンタイムへの情報デザインPBLプログラムの試行」

⑦卒業時の学生生活調査

卒業予定者に対し、アンケート調査を行った。

⑧教員と学生の意見交換会

令和7年11月26日（水）にZoomにて実施した。テーマは「インターンシップとキャリア形成プログラム」とし、専攻別の3グループに分かれて「3年生のうちに何をしておくべきか」等について議論を行った。

⑨休講の状況の把握

令和7年度における休講およびそれに伴う補講の状況について把握した。

⑩「授業改善アンケートに関する教員のご意見」集の作成

各専任教員から令和8年2月～3月に受け取った「授業評価アンケートに関する意見」をまとめた。

⑪履修登録の抽選（受講者調整）に関する状況の把握

⑫他大学の学生参画型FD活動に関する資料収集

⑬オフィスアワーの設定

昨年同様、対面形式とオンライン形式を併用したオフィスアワーを設定した。いずれの場合でも90分の教員のアクセスを確保することとした。

⑭『令和7年度社会情報学部FD活動報告書』の作成

令和8年5月に完成予定である。

3. 来年度に向けての課題

Google フォームを用いて調査を行うようになってから、入学時の学生生活調査および卒業時の学生生活調査の回収率が低下している。この改善が喫緊の課題と考えられる。そのほか、履修登録の抽選をめぐって生じている問題への対策が挙げられる。

以上

(4) 人間関係学部

1. 令和7年度人間関係学部FD委員会構成

齊藤豊（人間関係学部学部長） 福島哲夫（人間関係学科長） 上野優子（人間福祉学科長）
牛山美穂（人間関係学科社会学専攻） 三好真（人間関係学科社会・臨床心理学専攻：人間関係学部FD
委員長）原野かおり（人間福祉学科）

2. 令和7年度人間関係学部FD活動一覧

- ・ オフィスアワー 原則、対面で実施
- ・ 授業担当者懇談会
（社会学専攻）令和7年5月24日
（社会・臨床心理学専攻）令和7年5月24日
（人間福祉学科）令和7年5月24日
- ・ 人間関係学部FD研修会（人間関係学部FD委員会主催） 令和7年12月12日
- ・ 保護者懇談会 令和7年10月25日
- ・ 学友会代表とFD委員会・教職員との懇談会 令和7年12月12日

3. 各FD活動の内容

① オフィスアワーの実施

学生が事前の予約なしに気軽に教員の研究室を訪ねることができる時間帯という趣旨で、本学部では全ての専任教員がオフィスアワーを設定し、大学のUNIPAでこれを公開している。本年度は基本対面で一部オンラインの組み合わせにより実施した。

② 授業担当者懇談会の実施

例年前期に実施している非常勤講師の先生との授業担当者懇談会を今年度も5月24日に実施した。教育懇談会の内容については、令和7年度人間関係学部FD報告書の中で詳しく紹介されている。

③ 人間関係学部FD研修会の実施

12月12日に「研究と教育への新たな展開 ～多様な技術を活かす方法 part2～」という全体のテーマのもと、3つの分科会にわかれ、それぞれの対面の座談会形式で話し合われた。3つのテーマは「授業の展開の方法～AIツールの活用など～」 「教員の研究と大学教育、ワークライフバランスの両立や展開の方法」 「ゼミの指導方法～授業の展開の方法、活動内容、キャリア教育など～」である。研修会の内容と参加者の意見については、令和7年度人間関係学部FD報告書の中で詳しく紹介されている。

④ 授業改善のためのアンケートの実施

令和7年度においても、前期・後期の年2回、学生による授業アンケートを実施した。授業改善のためのアンケートも実施しており、令和7年度人間関係学部FD報告書の中で詳しく紹介されている。

⑤ 学友会代表とFD委員会・教職員との懇談会の実施

教育の質の更なる向上に向けて、令和7年度においても、12月12日に学友会代表と学友会委員の学生との意見交換を行った。意見交換の内容については、令和7年度人間関係学部FD報告書の中で詳しく紹介されている。

⑥各種委員会との連携

学生の教育内容・教育環境の向上のためにはFD 委員会による取り組みだけでは不十分であるため、教学面の管理を担当する教務委員会、英語教育運営委員会、就学環境全般の改善を目指す学生委員会、健康面をサポートする保健管理委員会等の各種委員会が教授会・学科会議等の場で報告する事項を参考にしながら、FD 活動の一層の充実を図っている。

その他、より良い授業を目指すための環境やメディアに関する設備等に関して各事務部署と連携を取っている。

⑦各学科・専攻におけるFD 活動の内容の共有

教育方法に関する配慮・工夫に関しては、基本的にそれぞれの学科・専攻の専門的な判断にゆだねられるべき領域であるが、同時にある教員・ある専攻が行っている取り組みが、専門性の垣根を超えた普遍性を持つ場合もあり、そのような参考にすべきノウハウについては、学内の様々な機会を利用して全教員が共有できるようにしている。昨年に引き続き、対面で行われた人間関係学部FD 委員会主催の研修会では、他学科・他専攻の教員がそれぞれの研究や授業に対する内容を積極的に共有しており、引き続き今後の教育内容の向上につなげることを期待している。上記にある通り、研修会の詳細は令和7年度人間関係学部FD 報告書の中で詳しく紹介されている。

⑧クラス担任制度

本学部においては、ほとんどの専任教員がいずれかのクラス担任として学生の指導にあたっており、このシステムが学生の教育効果を高めるうえにおいても大きな効果を発揮している。令和7年度人間関係学部FD 報告書の中でも各教員が1年間のクラス担任としての活動を振り返って、今後の取り組みにつながるような提言や意見交換を行っている。

以上

(5) 比較文化学部

1. 令和7年度比較文化学部 FD 委員会構成

委員長：安藤恭子、委員：城殿智行、貫井一美、米塚真治

2. 本年度のFD活動の報告

I. 「授業改善のためのアンケート」実施

① アンケート実施時期と実施方式：本年度は以下のように実施した。

【前期】期間：令和7年7月7日(月)～7月19日(土)

方法：全ての対象科目において、学生はUNIPAから回答する。回答率の課題から、本年度は授業内で回答する方法を徹底した。

【後期】期間：令和7年12月8日(月)～12月20日(土)

方法：前期と同様の方法によって実施した。

②実施対象：

基本的にすべての科目を対象にアンケートをおこなうが、比較文化学部では、演習授業（3年次必修の比較文化演習ならびに4年次必修の比較文化セミナー）を対象科目から除外した。また、学生の匿名性を担保するため、受講者数が10名以下の科目も除外した。

③実施科目の受講者数と有効回答数

アンケート実施科目の累計受講者数は、前期 20,654 名、うち有効回答者数 12,439 名（回答率 60.2%）であった。後期アンケート実施科目の累計受講者数は 19,425 名、うち有効回答者数 10,142 名（回答率 52.2%）であった。昨年度前期 44.9%、後期 38.5%からは大幅に上昇した。

④集計

回答の集計処理は大学が委託した外部業者がおこなった。全体および各授業別の集計結果のほか、所属学科・学年・授業方法（演習・講義等）・職名（専任・兼任）・クラスサイズ・担当教員年齢・授業形式（対面／オンデマンド等）・授業区分（教養・専門）・言語（スペイン語・ドイツ語・フランス語・英語・韓国語・中国語）別の集計結果を得た。

⑤アンケート結果の伝達

授業ごとの集計結果は、学生の回答期間終了後に担当教員がUNIPAで直接確認することができる。授業担当教員にその旨を告知し、FD委員会からもリマインドをおこない周知した。

⑥教員からのフィードバック

教員からのフィードバックの集計には、Google フォームを使用した。その結果、前期は専任教員 15 名、非常勤教員 10 名の計 25 名から、後期は専任教員 15 名、非常勤教員 5 名から回答があった。初年度教育の難しさなど、コメントからは今後の課題が示された。

⑦公開するアンケート集計結果について

アンケートの詳細は、『比較文化学部 FD 委員会報告書』として学内教職員サイトに掲載する。

II. 授業担当者懇談会

本年度は、5月10日（土）に授業担当者懇談会・懇親会が対面で開催され26名が参加した。その際、FD委員から昨年度までの状況と課題について説明した。非常勤の先生方から出された問題点（学生の教科書購入、語学の習熟度など）について対応が検討された。

Ⅲ. 保証人と教員との懇談会

本年度は、11月8日（土）に対面で開催した。69名という多数の参加者があった。学生の修学・海外での学びについて情報を提供した。クラス担任・ゼミ担当者の個別相談もおこなった。

Ⅳ. カリキュラム改定に対応するための教員懇談会

カリキュラム改定によって新設される「体験で学ぶ比較文化」について、担当教員の共通認識を得ることを目的として、1月7日（水）に懇談会をおこなった。

Ⅴ. 比較文化学部主催FD講演会（前後期1回ずつ、計2回）

講演会後、参加教員のアンケートをおこなった。「高校までの授業の実態と課題が大学の抱える課題と共通していることを知り、大学での教育にたいへん示唆的であった」「今後の高大連携への手がかりがつかめた」などの意見があり、有意義な講演会であったと言える。

【前期】期日：6月23日（月） 講師：押山均氏（東進ハイスクール）

テーマ：「2026年度入学前教育について」

【後期】期日：2026年2月10日（火） 講師：赤塚宏子氏（大妻中学・高校校長）

テーマ：「大妻中高における教育の現状と工夫」

Ⅵ. 学会活動

10月6日（月）、大妻講堂にて「比較文化学会」を開催した。その中で、「卒業論文中間発表」「留学報告会」をおこなった。学生自身の発表により、卒業論文の意義、海外で多様な文化を学ぶ意義が語られ、多くの学生に良い刺激が与えられた。発表の概要とその感想は、比較文化学部が刊行している学会誌「カリオペ」（比較文化学部HP内）に掲載した。

Ⅶ. 比較文化学部独自の「卒業アンケート」

ディプロマポリシー達成度を知ることを目的とし、比較文化学部の学びについて、学生がどのように考えたか、どの程度満足したかについて問うアンケートをおこなっている。

Ⅷ. オフィスアワーの実施

比較文化学部では、学部のホームページ上にオフィスアワーを掲示し（教員紹介ページ内）、学生の学業面、生活面などのサポートを行なっている。

以上

(6) データサイエンス学部

1. 令和7年度データサイエンス学部FD 委員会構成

委員長：永瀬伸子（データサイエンス学科）

委員：田島友祐（データサイエンス学科）

2. 授業改善のためのアンケート

● アンケート実施時期と実施方式

UNIPAを利用したWEB方式とし、学部設置初年度のため、複数教員によるオムニバス方式の講義以外の全科目に対して原則実施対象とした。前期（実施時期：学期末）ならびに後期（実施時期：学期末）とも同じ設問構成（原則6段階評価による全10問の選択式）により執り行った。アンケート実施期間の開始については、UNIPAから学生に通知されるが、専任教員には極力授業時間内に時間を設けることで自由な雰囲気での回答を促すとともに、回答時間の確保についても協力いただいた。初年度であることから前年比較はできないが、専任教員間で結果を共有している。

【前期】

期間：令和7年7月7日(月)～7月19日(土)

【後期】

期間：令和7年12月8日(月)～12月20日(土)

実施状況

データサイエンス学部

回答者数／履修者数 前期：10,797名／17,823名（回答率60.1%）

後期：8,807名／16,870名（回答率52.2%）

（なお一般教養・語学科目等を含めデータサイエンス学部生が受講できる授業全体の回答である）

データサイエンス専門科目（新設学部のため、1年生のみの回答となる）

回答者数／履修者数 前期：410名／475名（回答率86.3%）

後期：418名／596名（回答率70.1%）

3. 学部FD活動

3.1 前期、および後期の授業懇談会

前期ならびに後期終了後、専任教員による懇談会を実施した。具体的な内容としては、大妻女子大学の講義に関するシステムや設備、学生の学びの姿勢、類似した講義形態をとる教員への情報共有である。

【前期授業懇談会】令和7年8月1日（金）

内容：

- 入門演習Ⅰ（経営・経済系の専任教員が担当）からⅡ（統計・情報系の専任教員が担当）への情報共有、前期授業で培ったスキルの確認と共有
- manaba、UNIPA、respon、office、Google Drive の活用について

【後期授業懇談会】令和8年2月12日（木）

内容：

- 1年生が培ったスキルの確認と共有
- 一年間通して実施した工夫、令和8年度実施予定の工夫

3. 2 オフィス・アワーの実施

学部のホームページ上の教員紹介各ページにオフィス・アワーを掲示し、学生の学業面、生活面などのサポートを行なっている。時間は1講義分である90分を提示し、対面形式やオンライン、オフィス・アワー以外の時間調整などについては各専任教員へのアポイントによって柔軟な対応ができる体制となっている。

3. 3 学年担任制と学生の様子との共有

学年担任が6月に1年生全員に対して10分間の面接を実施した。前期の中盤ということで出席や講義内容の理解に加え、大学生活などで困っていることなどをくみ取るとともに、その内容を授業懇談会だけでなく、適宜該当教員間や委員会で共有することで、学生の教育効果を高める試みを実施している。

3. 4 授業担当者懇談会

令和7年度では非常勤講師がいなかったため懇談会は実施していないが、令和8年度では非常勤講師がいるため、令和8年度5月16日（土）実施予定の授業担当者懇談会にて対面実施する予定である。

4. 学生との懇談会

学生との懇談会は令和8年1月22日（木）に、新1年生歓迎準備会の話し合いの後に実施した（1年生7名が参加）。新1年生にどんなことをしてあげると入学後がスムーズかについて聞き取りを行い、大学に慣れる上で具体的に何に困ったか、授業の中で友人を増やすための工夫等について、学生からの提案を得た。

以上

(7) 短期大学部

1. はじめに

短期大学部 FD 委員会は家政科 3 専攻からそれぞれ 1 名の計 3 名の専任教員によって構成されている。令和 7 年度委員会では、前年度に引き続いて以下①から⑦の項目を中心に FD 活動の実施・検討を行った。

- ① 授業改善のためのアンケート ② オフィス・アワー ③ ホームページ ④ 保証人との懇談会
- ⑤ 授業公開 ⑥ 学習支援活動 ⑦ 全学 FD 委員会主催講演会への参加、FD 研修会の学科独自開催

2. 令和 7 年度の FD 活動の概要

活動の詳細は、令和 7 (2025) 年度 FD 活動報告書第 22 号Ⅱ章以降に掲載し、ここにはその概要を記す。

①「授業改善のためのアンケート」について

今年度も、FD 基幹活動として、短期大学部開講科目受講者を母集団とする「授業改善のためのアンケート」を実施した。昨年度に引き続き、設問数は全 10 問で、実施は学内ポータルサイト「ユニバーサルパスポート (以下 UNIPA)」を利用してオンラインで行うものであった。アンケートの実施期間は、前後期とも、2 週間とした。アンケート期間終了後、各教員及び各専攻で、結果を踏まえた工夫を行うこととした。

②オフィス・アワーについて

専任教員が各自オフィス・アワーを設定し、ホームページやシラバスに掲示して周知に努めた。こうすることによって、学生に対し、教員の研究室の敷居を低くする効果が期待される。もとより、人数の少ない女子大のメリットを学生に及ぼすには、学習支援や進路相談等に関し、学生の心理的なハードルが低くなるよう、きめ細かな対応が必要なことは言うまでもない。オフィス・アワーの設置に関しては、このような考え方の中での措置である。

③ホームページについて

本年度も短期大学部広報委員会を中心に、家政総合コース、食と栄養コースの協力を得て短期大学部ホームページの維持と管理を実施した。

今年度は短大将来構想委員会の活動と連動し、学生募集に焦点をあてたホームページの更新作業を中心に活動を行った。

ホームページに関しては閲覧のための入り口が学院ホームページからのリンクが主なものとなるため、より多くの閲覧を獲得するためには、多くのエントランスポイントが必要となることは従来から課題となっていたが、そのための方策として、今年度から教員による「暮らしのブログ」を開設し、より多くの検索に結び付くよう工夫を行った。

④保証人との懇談会について

家政専攻では、全体で教務関係、資格関係、編入・就職活動など専攻で実施しているサポート内容をスライド、資料配布で紹介した後、クラス指導主任・副担任と保護者との懇談を 1 年、2 年に分かれて実施し、活発な意見や質問が交わされた。

食物栄養専攻では、教員との懇談会、及び、学生主体の「校外実習報告会」の参観を実施した。保護者から学生に関する様々な情報を得ることができ、良い交流の機会となった。

生活総合ビジネス専攻では、2 年生のみということもあって、開催を予定し参加を募ったものの、参加希望が 1 名であった。従って、会合という形態では行わなかった。

⑤授業公開について

今年度も、各専攻で、例年同様に授業公開を実施した。全専任教員が公開した。公開については、他の教員からのフィードバックを受けるという直接的な効果のほか、公開に耐える授業を行うという意思を各教員に形成させるという間接的な効果もあるという理解で行っている。

⑥学習支援活動について

短大生の入学時点の学力の格差はかなり大きい。学生の中には、四大進学の学力は十分にあるものの、経済的な事情で短大を選択せざるを得なかった者もいれば、身近に短大を卒業して四大卒に何ら遜色ない職業人生を送っているロールモデルがいるなどのポジティブな理由で短大を選択した者もいる。これらの学生は学力の水準が十分に高いだけでなく、主体的な学習の自分なりのスタイルを身につけている事例が少なくない。こうした学生に対しては、高い目標を意識させることが何よりも重要であり、進路に関する指導を早い段階から行うなどして、将来に関する視野を広げるよう指導した。

他方、高校までの基礎学力の形成が不十分で、学習して成果を出したという成功体験の乏しい学生が一定数いることも、否定し難い事実である。

こうした状況下、短期大学部では、学生の状況や個性、進路に関する希望などをふまえ、柔軟かつ積極的な支援を行っている。専攻内で教員間の情報交換を密にしつつ、助手まで含めた支援を行うことも少なくない。

⑦短期大学部主催 FD 講演会・FD 研修会について

短大独自の FD 講演会についてはこれまで縮小してきており、昨年度は全学 FD 委員会主催の年 2 回の講演会に参加するのみとし、今年度も同様とした。短大ベースと全学ベースで、FD という共通の目的に資する講演会の内容に大きな差があるわけではないことから、全学ベースのものへの参加によって、様々な角度からの有用な気づきを得ることができている。

また、FD 研修会は、各専攻の現状に合わせてそれぞれ独自の方法で行った。

8 年度以降は、生活総合ビジネス専攻が廃止されることから、短期大学部が一段と縮小する。こうした大きな変化に応じた方法を、8 年度の委員会で検討することとする。

以上

3 人間文化研究科の令和7年度FD活動

大妻女子大学大学院人間文化研究科FD委員会は、令和7年度～9年度の3年計画で、大学院におけるFD活動の実施計画を策定した。この実施計画にもとづき、個々の具体的なFD活動を実施してきたので、その実情を以下の通り報告し、今後の活動に繋げたい。

I. 令和7年～9年度大妻女子大学大学院FD実施計画

1. 基本方針

大学院FD委員会の協議のもと、院生の入学から修士課程修了ならびに博士後期課程修了までの全学習・研究過程を視野におさめながら、より質の高い教育ならびに研究指導の実践を目指して、大学院における教育力を高める。よって、大妻女子大学全学の教育力向上に貢献する。

① FD活動の目標

大学院FD活動の目標を次のように定める。

- ① 学部・短大FDと大学院FDの連携のもとで、学部の入学・卒業から大学院入学・修了までを展望したFD活動を実施する。
- ② 教育活動に有益なFDを実施することに努め、教員が協力しやすい状況をつくり、全員の参加を目指す。
- ③ 教員対象のFDにとどまらず、職員や院生の協力・連携を基盤とした、全体的なFDに取り組む。
- ④ 個々のプログラム内容の充実に努め、その成果に関する情報を集積し、関係者の間での共有化を進める。

② FD活動の計画

大学院FD活動の計画は次の通りとする。

- ① 「大学院進学意識に関するアンケート」
- ② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」
- ③ 「大学院修了時アンケート」
- ④ 院生・教員懇談会の実施
開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとする。懇談会の結果、院生からもたらされた意見・要望については、その都度、取りまとめて、FD委員会に報告する。
- ⑤ 学会発表の奨励に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑥ 学内発表会の奨励・支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑦ 院生論文集発行の支援に関する活動
「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」を掲載誌とし、編集事務局の援助を受けながら発行していく。
- ⑧ 他大学との各種連携の活性化に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑨ 就職支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。また、大学院生の就職支援体制の充実に努める。
- ⑩ 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動
社会人院生に対して制度の充実や環境整備を具体的にどのように推進していくか検討する。
- ⑪ その他の活動
大学院生室の有効活用の検討などを行う

II. FD 活動の実施状況

以下、3つのアンケート調査を実施した。①から③は、Google フォームによる WEB アンケートを利用している。

① 「大学院進学意識に関するアンケート」

大学院修士課程入学者を対象に、10～11 月に実施した。その結果については、「Ⅲ. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」

全大学院生を対象に、昨年度とほぼ同じ内容で 10～11 月に実施した。その結果については、「Ⅳ. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

③ 「大学院修了時アンケート」

令和 8 年 3 月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に 2 月～3 月にかけて実施した。その結果については、「Ⅴ. 大学院修了時アンケート（結果の概要）」として、本報告書に掲載した。

III. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）

III-1 はじめに

大妻女子大学大学院人間文化研究科は平成 22 年 4 月（2010 年）に改組して以来、16 年目を迎えた。本年度も「大学院 FD 活動実施計画」に基づき、前年度とほぼ同様の内容で「大学院進学意識に関するアンケート」と「大学院の研究・教育に関する意見の収集」（Ⅳ. 参照）を実施した。前者は修士 1 年生を対象に、後者は大学院生全員を対象に実施した。以下に両調査の結果の概要を提示する。

III-2 進学意識に関する調査の目的と方法

「大学院進学意識に関するアンケート」の目的は、大学院進学にあたっての経緯や動機を把握し、いかにして多くの学生が集まる魅力的な大学院をつくるかの参考にすることにある。調査の方法は志望動機、志望決定にあたっての情報入手経路、他大学との併願状況、修了後のキャリア計画、大学院生活への抱負などを聞いた。

III-3 調査の対象・時期・回収の状況

「大学院進学意識に関するアンケート」は、次の要領に基づいて実施した。

- (1) 調査対象：令和 7 年度人間文化研究科各専攻修士 1 年生 23 名
- (2) 調査期間：令和 7 年 10 月 10 日（金）～10 月 31 日（金）→11 月 14 日（金）まで延長
- (3) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (4) 回収状況：回答数 11 件、回答率 47.8%

令和元年度から今年度までの1年生の回答者数と回答率を表1に示した。

表1 大学院進学意識に関するアンケート（新入学者）

対象者	令和元年度 (R1)	令和2年度 (R2)	令和3年度 (R3)	令和4年度 (R4)	令和5年度 (R5)	令和6年度 (R6)	令和7年度 (R7)
新入学者	18	18	12	27	16	22	23
回答者	17	15	10	16	11	18	11
回答率(%)	94.4	83.3	83.3	59.2	68.8	81.8	47.8

調査期間中、8度、回答催促を行った。その結果、今回の回収率は一昨年度の68.8%および昨年度の81.8%と比較すると減少した。

Ⅲ-4 大学院への進学の動機について

「本学大学院への進学を志望するに当たって、その動機に係る項目1～12に対してどの程度重視しましたか」との問いに対する結果を、表2に示した。「非常に重視した」5点、「かなり重視した」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまり重視しなかった」2点、「ほとんど重視しなかった」1点、「まったく考えたことがない」0点として平均点を算出した。

表2 大学院進学にあたって重視した動機項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)	R6 (n=18)	R7 (n=11)
1	将来、研究職・臨床職に就きたいこと	3.4	2.8	3.2	3.6	3.8	3.4	2.9
2	専門分野の学位が取れること	3.6	3.8	3.8	4.2	4.3	4.0	3.2
3	就職に有利になること	2.5	3.0	2.6	2.8	2.5	2.9	2.4
4	自宅・会社からの通学が便利なこと	2.6	3.3	2.9	2.5	2.5	3.8	3.2
5	指導を受けたい教員がいること	4.0	4.5	3.9	4.0	4.2	4.6	3.8
6	大学のネームバリューがあること	1.8	2.5	2.0	2.6	1.8	2.7	1.9
7	就職を先に延ばせること	1.3	1.3	1.2	1.4	1.4	1.3	1.6
8	希望する就職先がなかったこと	0.6	1.4	1.3	0.7	1.7	0.8	1.3
9	奨学金を受給できること	1.8	1.3	0.6	0.9	1.4	1.4	0.4
10	専門の資格が取れること	2.6	2.0	3.1	3.6	3.2	2.8	2.5
11	研究したいことがあること	4.1	4.2	3.6	4.0	4.2	4.5	3.8
12	在学中の学費の支払いのこと	2.9	3.4	2.8	2.9	2.4	3.9	2.7

※表中数値は平均値

大学院進学にあたって重視した項目の中で、「指導を受けたい教員がいること」「研究したいことがあること」といった項目が上位にある。また、「専門分野の学位が取れること」「自宅・会社からの通学が便利なこと」も比較的重要視されていることがわかる。

Ⅲ-5 大学院進学にあたって影響を与えた情報源について

表3 大学院進学にあたって影響源となった項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)	R6 (n=18)	R7 (n=11)
1	本学の先輩の研究成果を見たこと	2.4	2.0	1.6	2.2	2.3	2.4	2.6
2	大学院に行っている友人・知人からの情報	2.9	2.1	1.8	2.2	2.6	2.5	2.9
3	両親や兄弟姉妹から勧められたこと	1.9	1.3	0.9	1.5	1.5	1.4	2.0
4	自分の配偶者の意見	0.8	0.2	1.3	0.7	0.1	0.5	0.3
5	大学院紹介の受験雑誌などの記事	1.1	0.9	0.8	1.9	0.4	2.0	1.3

6	本学発行の大学院紹介パンフレット	2.6	2.3	1.4	3.4	3.1	2.5	3.1
7	学内の大学院進学説明会	1.8	2.6	2.1	3.3	2.8	2.6	2.6
8	学外の大学院進学説明会	0.8	0.2	1.4	1.8	1.3	1.6	0.5
9	本学のホームページの記事	2.9	2.5	1.3	2.9	2.5	2.6	3.4
10	指導教員になる教員との相談	4.2	4.5	3.6	3.6	3.6	4.6	3.5
11	学部時代お世話になった教員との相談	3.1	2.9	2.4	設問欄なし	設問欄なし	設問欄なし	設問欄なし
12	出身の大学の先生との相談	2.5	2.0	2.5	2.6	3.3	3.2	2.5
13	出身の高校の先生との相談	0.4	0.3	0.0	0.2	0.2	0.0	0.6
14	教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから	3.9	3.9	3.1	3.3	3.4	4.2	3.7
15	他の大学院にはない独創的な文化資源（蔵書、マニユスクリプト、物的資料など）があると考えたから	1.9	2.4	1.6	2.4	1.5	2.2	2.6

※表中数値は平均値

大学院進学にあたって影響を与えた情報源は、「教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから」の平均点数が 3.7 と高かった。また、「指導教員になる教員との相談」も 3.5 と高かった。

III-6 他大学の受験状況：

「他の大学院を受験しましたか」の質問に対しては、11 名中 8 名が「いいえ」と答えた。回答者の内、他大学大学院受験生は 3 名であった。

III-7 大学院修了後の進路及びどのような大学院生活を送りたいか

「大学院修了後の進路は、どのように考えていますか」については、令和元年度からの推移を表 4 にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 4 大学院修了後の進路について（複数回答）

	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
1 博士後期課程に進学したい	35	13	0	37	36	22	9
2 外国に留学したい	6	0	10	6	9	11	0
3 教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい	12	13	0	6	18	11	27
4 専門社会調査士として就職したい	6	0	0	0	0	0	0
5 臨床心理士として就職したい	24	13	40	44	27	16	45
6 研究機関で研究開発の仕事に就きたい	24	13	20	19	27	11	9
7 民間企業で一般職の業務に就きたい	24	20	0	19	18	33	9
8 民間企業で総合職の業務に就きたい	24	13	30	12	0	22	18
9 公務員として就職したい	12	20	0	25	18	0	18
10 大学教員として就職したい	29	13	0	12	27	27	18
11 まだ具体的に考えていない	18	27	60	19	27	27	45

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

大学院修了後の進路は回答率が高い順に、「臨床心理士として就職したい」と「まだ具体的に考えていない」が 45%、「教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい」が 27%、「民間企業で総合職の業務に就きたい」と「公務員として就職したい」と「大学教員として就職したい」が 18%という結果が得られた。

「どんな大学院生活を送りたいか」の質問に対しては、令和元年度からの推移を表 5 にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表5 どんな大学院生活を送りたいか（複数回答）

	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
1 専門分野についての研究中心の生活をしたい	59	53	30	37	54	50	45
2 研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をしたい	53	80	70	62	72	55	73
3 たくさん授業科目を履修して社会に出るための教養を深めたい	18	0	30	25	18	16	18
4 就職活動や資格を取るための時間を多くしたい	18	0	30	25	9	16	18
5 就職活動を早めに始めて、まずは就職を決めたい	12	20	20	12	0	16	18
6 狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい	18	47	30	56	27	16	54
7 アルバイトや遊びはできるだけ控えたい	12	7	10	12	9	5	9
8 アルバイトや遊びも大いにやりたい	12	13	20	19	27	27	36
9 自由な時間をできるだけ楽しみたい	18	33	20	25	36	11	18
10 どうするか、まだはつきり考えていない	9	7	0	0	0	5	27

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

どんな大学院生活を送りたいかについては回答率が高い順に、「研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をしたい」73%、「狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい」54%、「アルバイトや遊びも大いにやりたい」36%という結果が得られた。

Ⅲ-8 大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと

「大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと」の質問に対しては、以下の6件の記載があった。

- ・金銭的負担。大学院進学により就職がさらに不安になること。
- ・大学と現在の職の両立（自分の能力ではあまり厳しいと両立は不可能と思っていたから）
- ・先生方との相性、十分に研究を学べる環境にあるかどうか。
- ・先生から大妻の大学院の社会学専攻は基本的に1人くらいしか入学しないため、同期に刺激を受けたり、同期との交流がないことの孤独感や、研究についての相談をできない点は考えたほうがいいと言われていたので、1人で院生生活を送らなければならない点はかなり悩んだ。実際に、入学後ほかの学部の大学院生と関わる機会もなく、常に1人で授業を受け、生活しているが私はもともとかなり1人が好きな性格なため、さほど孤独感のようなものは感じずにいるものの、大抵の人は少し病んだりしてもおかしくはないと思う。もう少し大学院同士で研究を相談したりできるような機会があるといいなと思う。
- ・通学・授業参加方法（県外のため）、履修方法（長期履修とするかどうか）、生活習慣（仕事と大学院の両立）、学業（ついていけるか）
- ・仕事と学業の両立

IV. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）

「大学院の研究・教育に関する意見の収集」は、全大学院生を対象に授業内容、履修環境、事務体制に対して点数による客観的評価と自由記述による意見を集約し、授業方法の改善、カリキュラムの構成、設備の整備など、教育改革に反映させることを目的としている。

平成25年度から回答を、「非常にそう思う；5点」から「まったくそう思わない；1点」までの5段階評価としている。評価点は、回答者全員の平均点と最高点、最低点を算出している。

- (1) 調査対象：大学院人間文化研究科に在籍する大学院生 57 名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和 7 年 10 月 10 日（金）～10 月 31 日（金）→11 月 14 日（金）まで延長
- (4) 回収状況：回答数 37 件 回答率 64.9%

結果の概要は以下の通りである。

IV-1 各評価項目

大学院の授業全般についての評価は表 6 の通りである。問 1 から問 5 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 4.1 以上の高い評価が得られた。

表 6 大学院の授業全般についての評価

課程	回答数	問1	問2	問3	問4	問5
		シラバスに記載された到達目標に示された知識や能力を獲得できた	授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった	授業の内容は専門知識等を習得する上で十分な意義が感じられた	研究指導や論文指導のあり方について適切であった	学外研究・学外実習について希望通り実施することができた
修士課程	28	4.0	4.5	4.7	4.5	4.4
博士後期課程	9	4.3	4.3	4.4	4.3	4.6
全平均	37	4.1	4.4	4.6	4.4	4.4
最高点	37	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		3.0	2.0	3.0	2.0	3.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

大学院の履修および研究環境については表 7 の通りである。

問 6 から問 9 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 4.0 以上の高い評価が得られた。

表 7 大学院の履修および研究環境について

課程	回答数	問6	問7	問8	問9
		システム全般の手続き方法について分かりやすかった	ガイダンスの日程や実施方法について適切であった	図書館他学校の施設設備について満足している	院生自習室の利用方法について満足している
修士課程	28	4.0	4.1	4.2	4.2
博士後期課程	9	4.1	4.1	3.7	3.7
全平均	37	4.0	4.1	4.1	4.1
最高点	37	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		1.0	1.0	2.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

教育・研究支援については表 8 の通りである。

問 10 から問 12、問 15 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 3.6 以上と一定の評価が得られた。

表 8 教育・研究支援について

課程	回答数	問10	問11	問12	問15
		院生自習室の設備について満足している	事務職員の対応は適切であった	大学院の学費・奨学金は適切であった	授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた。
修士課程	28	3.6	4.2	3.8	4.4
博士後期課程	9	3.5	4.3	3.9	4.5
全平均	37	3.6	4.3	3.8	4.4
最高点	37	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		1.0	2.0	1.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

IV-2 大学院の授業全般（問 1～5）、履修・研究環境（問 6～9）、教育・研究支援（問 10～12）に関する自由記述欄への記述状況

自由記述欄に記載された意見については、そのままの意見を箇条書きで以下に記載する。

問1.「大学院の授業ではシラバスに記載された到達目標として示された知識や能力を獲得できた。」

- ・教授が講義をドタキャンするなど、まともに講義が実施されない授業がこれまでに一つあった。私はすべて出席したが、知識を得どころか、きょうは講義があるのかばかりに意識が向き、講義があったとしても、教授が遅刻、またはほぼ講義しないまま切り上げてしまうといった事態が続いた。いったい大妻の大学院はどうなっているんだろう？と、不信感が高まった。とくに提出物などがあるわけでもないし、私は出席しているのに成績が A の評価とったことも納得がいかない。時間とお金を無駄にしたとしか言いようがない。あまりに業務が忙しく、成績に異議申し立てができることもわからずとつくに期間がすぎた。何とかしてもらいたい。
- ・複数での受講は他の人からの情報や考えを聞くことができ学びになります。自身の知識や能力への評価は難しいです。
- ・論証に必要な資料を把握していく方法を得られたことは、特に大きな収穫である。
- ・シラバスに記載されている以上に、受講者のニーズに合わせて内容を決めてくださり新たな知見を得られたり、学びが深まりました。

問2.「授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった。」

- ・いい先生によりやく数名めぐりあうことができたものの、とにかく上記問 1 の先生などのこともあるので。
- ・博士論文執筆に有益な水準・範囲である。

問3.「授業の内容は専門知識等を習得する上で、十分な意義が感じられた。」

- ・専門的な事柄が、実際の生活にどう活かせるかをも学べる内容であった。

問4.「研究指導や論文指導のあり方について適切であった。」

- ・第一線の研究者から、研究方法や論文執筆方法を学べる、有難い機会である。
- ・先生方が、個々の研究内容に合わせて親身になってご指導くださり感謝の気持ちでいっぱいです。

問5.「学外研究・学外実習について希望通り実施することができた。」

- ・貴重な史料の調査に同行できたことは、本大学院に在籍していたから得られた機会であった。
- ・研究内容に合わせて、フィールドの開拓などに協力してくださり、充実した研究活動が行えています。

問 6.「システム全般（UNIPA での履修登録、研究助成）の手続き方法について分かりやすかった。」

- ・非常にわかりにくいし、メールで質問しても、回答がなかなか得られないなど、非常に苦勞した。10 年以上大学院生がいなかったため、まわりに相談したり、教えてくれる人もおらず（教授に相談したが詳細な内容把握までできていない）、先輩がいないというハンデを非常に感じた。サポート体制の充実を希望する。
- ・履修登録が便利である印象はかなり強かった。研究助成も、電子申請が便利であることのほか、申請書類作成の段階で論文の全体像が見渡すことが出来る点は意義が大きかった。
- ・UNIPA の使い方（教室や履修の見方）がよく分からず、今でもあまり使えていない。お知らせから「添付資料をご確認ください」とありながら、そのリンクに飛べず、資料を探すのに手間取ってしまった。
- ・時々、内容の区別ができずに提出を遅延してしまいました。こちらの確認不足です。

問7.「ガイダンスの日程や実施方法について適切であった。」

- ・今年度は早めに日程がわかり、良かった。
- ・仕事をしながらできるように、ゼミの先生が個別でガイダンスをしてくださったり、オンラインでガイダンスに参加できた。ありがとうございます。
- ・無駄の無い日程や実施方法だった。
- ・同じ専攻の同期がいないため院生同士でコミュニケーションをとったことが一度もない。ある程度は仕方がないが、院生同士の交流をもてる機会があると嬉しい。
- ・学内で仕事をしているため、仕事としてのガイダンスと学生としてのガイダンスがかぶってしまいすべて出ることは叶わなかったが致し方ないと思います。ただ、ガイダンスに出られなかった場合の資料配布などを得られたので特に問題なく学生生活を進められました。

問8.「図書館他の学校の設備について満足している。」

- ・（千代田校）映像資料の視聴のために、Blu-ray の持ち込みと再生機器の利用を許可してほしい。自宅にブルーレイ・ディスクの再生機器がなく、大学でも教室を予約しないと視聴できないため。
- ・（千代田校）いつも閉架図書の出納をしていただき感謝しております。1 階での収蔵図書の展示も楽しいです。
- ・就学期間を超えている学生は、年度を跨ぐ際に図書を全て返却する必要があり、新しい学生証が交付されるまで借りられなかった。長期期間こそ研究を進めたいのにと不甲斐なかった。学費は払っているのに。

問 10.「大学院生室・大学院生自習室の設備（PC・プリンタなどの設置機器、辞書・参考文献などの資料、室内レイアウト）について満足している。」

- ・（千代田校）ホチキスが置かれるようになり、持参忘れでも、対応できるようになって嬉しい。
- ・（千代田校）遠隔地に居住していることもあり、都内滞在中の研究拠点として極めて便利に感じる。
- ・（千代田校）利用していない

- ・(千代田校) 途中より移動があったが、使い勝手が良くなかった。また、院生が自由に使える部屋は数が減ったことに加えて、いつも誰かが一日中独占している状況が続いており、使えない日が多かった。
- ・(千代田校) 集中できる環境を整えていただいているので活用しています。
- ・(多摩校) 通常 21 時まで、守衛室に連絡をすれば 22 時まで残ることができるが、23 時まで残れるようにしてほしい。
- ・どちらの院生室においても、ウォーターサーバーがあると非常に嬉しい。

問 11. 「事務職員の対応は適切であった。」

- ・(千代田校) 対等に接して下さっているようで恐縮ですが、おかげさま用件が円滑に進みます。感謝しております。
- ・(千代田校) いつも丁寧にご対応くださり感謝しております。

問 12. 「大学院の学費・奨学金制度について」

- ・高い。
- ・高すぎず、助かった。
- ・学費が安価のためありがたいです。
- ・これほどの教育を受けられる学費としては安い。
- ・大学院生は大学院生で、学部とは別の枠を作してほしい。特に学部からストレートで進学している学生は生活が厳しい。

IV-3 ハラスメントについて

ハラスメントに関する令和元年度からの調査結果を図 1 に示した。令和 7 年度は「経験がある」が 5 名、「答えたくない」が 3 名であった。自由記述欄には 1 名が次のような意見を述べていた。なお、アンケートを取る際に回答結果は慎重に扱う旨、例年通り明記している。

- ・講義がまともに行われない。業務について馬鹿にするような発言をしているのを耳にした。

より個別的な指導が中心となる大学院教育においては、ハラスメントが生じやすい状況になる可能性は高く、本学では学生が副指導教員を含めた複数の教員から指導を受けられる体制を整え、学生の SOS 信号をできる限り早いうちに見つけ出す仕組みを確立している。さらに、このような案件に対しては指導教員の変更も可能にしている。

今後も、昨年度に引き続き、次に記すハラスメント防止対策を徹底する。

- ① FD アンケートの回答について、修了生も申し出ができる機会を確保する措置を講じる。
事案には FD 委員、ハラスメント委員、専攻教員が適宜対応する。
- ② ハラスメントに関する回答の FD 報告書への記載は、一部表現について個人を特定しづらい形に修正する。
- ③ 代議員会、専攻会議等で FD 報告書を説明する際、ハラスメントに関するアンケート結果を必ず報告し、注意喚起を行う。

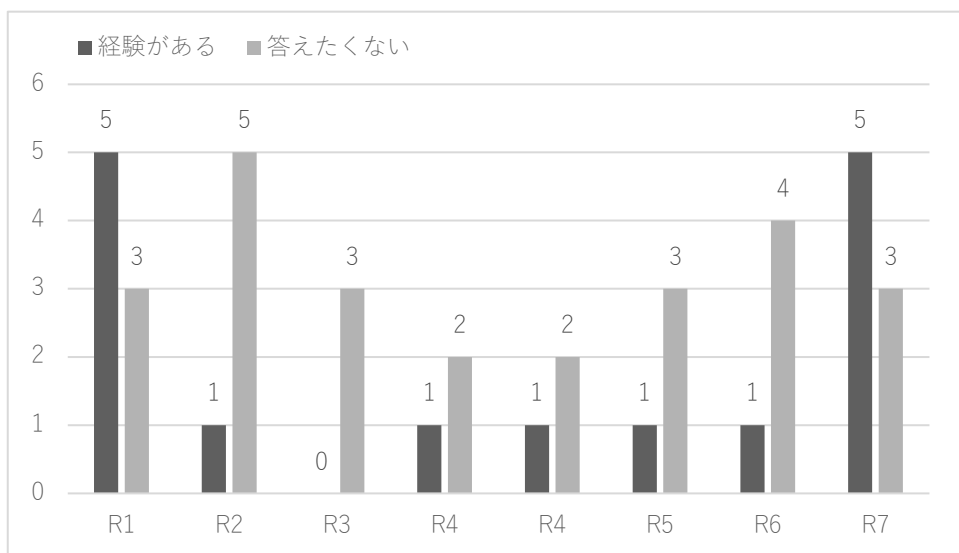


図1 ハラスメントについて

IV-4 社会人特別選抜の入学者への配慮について

社会人特別選抜の入学者を対象にした「授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた」かの問いでは14名から回答を得た。80%が「5 非常にそう思う」か「4 そう思う」のいずれかであった。

社会人入学者の自由記述は5件あった。

- ・社会人のため基本的にはオンラインで対応いただいています。教員や事務の方に柔軟に対応いただけるおかげで、学習を続けることができています。
- ・最初は「配慮する」と聞いて入学したものの、結局都合のいい時間に必要な授業が開かれるということではなく、内容に関わらず、とにかく日程的にとれる授業をとる、という本末転倒な状態になっている。
- ・なかなか授業日程が決まらず、仕事との調整が難しい。受講者が、決まった時点で講師との調整が開始するか、第一回目は対面などが決まっていると予定を立てやすい。オンラインや集中講義、土日など柔軟にしてもらえているのは他校にない配慮だと思う。
- ・オンラインや土日や長期休業中などに開催してくださるなど、柔軟に対応してくださった。ありがとうございます。
- ・授業の開講時間について、各先生方に大変融通を利かせていただきました。その節は大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

IV-5 その他意見・希望について

この質問に対する自由記述欄には以下のような記述があった。

- ・授業に院生以外の方が参加する時は、前もって連絡をして頂きたいです。教室に行くまで誰が居るか分からないというのは少し不安です。よろしくお願いいたします。(多摩校)
- ・今年度で卒業ができるのか不安なところありますが、これまで多くのご教示をしていただきましてありがとうございました。今後とも何卒よろしくお願いいたします。
- ・大変お世話になっております。自分の専攻科目について、学部時代より深く理解できていると実感できています。また、私は自分の専攻以外の授業を好んで履修しているのですが、大学時代よりも楽しく学べており、かつ自分の力になっていると実感でき、とても充実し

た日々を過ごしております。本当に大妻の大学院に入学できて心から良かったです。
今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

V. 大学院修了時アンケート（結果の概要）

V-1 大学院修了時アンケートの目的

このアンケートは、令和8年3月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に在学期間中の学修環境や体験・修得した能力について把握し、また自由記述による意見を集約することで、教育・研究環境改善につなげることを目的として、令和3年度より新たに実施した。

V-2 調査対象・方法・期間・回収状況

- (1) 調査対象：大学院修士課程及び博士後期課程修了予定者（満期退学含む）24名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和8年2月23日（月）～3月5日（木）→3月8日（日）まで延長
- (4) 回収状況：回答数 16 件 回答率 66.6%

※今年度、博士後期課程言語文化学専攻で修了者はいない。

	博士後期課程 人間生活科学 専攻	博士後期課程 言語文化学 専攻	修士課程 人間生活科学 専攻	修士課程 言語文化学 専攻	修士課程 現代社会研究 専攻	修士課程 臨床心理学 専攻
回答数	3	0	4	6	1	2

結果の概要は以下の通りである。

V-3 学修環境等についての評価

評価は表9の通りである。問1から問6までの各項目は4段階評価で「そう思う」4点、「ある程度そう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「そう思わない」1点として平均点を算出した。

表9 研究・授業、進路、学生生活についての評価

	回答数	問1	問2	問3	問4	問5	問6
		本学大学院在学中は研究・学業に意欲的に取り組みましたか	開講科目の数や種類は十分でしたか。	授業内容は、全体として満足していますか。	研究指導や論文指導について指導教員から十分な指導を受けることができましたか。	修了後の進路は希望に沿ったものになりましたか	大学院での学生生活に満足していますか。
全平均	16	3.9	3.6	3.7	3.8	3.9	3.5
最高点		4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
最低点		3.0	3.0	2.0	2.0	3.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

問1から問6までの各項目の全平均は4段階評価でいずれも3.5以上とかなり高い評価が得られた。

V-4 大学院在学中に体験・修得した能力

知識や能力の向上に大きく役立ったことを表10に、在学中に修得した能力について表11にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 1 0 知識や能力の向上に大きく役立ったことについて（複数回答）

	R3	R4	R5	R6	R7
1 大学院での授業全般	70.0	50.0	78.6	83.3	93.7
2 指導教員による指導	90.0	75.0	64.3	83.3	81.2
3 研究活動	90.0	50.0	75.0	83.3	81.2
4 論文執筆	70.0	25.0	78.6	66.7	68.7
5 論文発表、最終試験	50.0	25.0	57.1	66.7	62.5
6 資格取得	0.0	12.5	25.0	16.7	25.0
7 院生時代に築いた人脈	50.0	50.0	53.6	41.7	50.0
8 その他	0.0	12.5	7.1	25.0	12.5
9 特に役立っているものはない	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

知識や能力の向上に大きく役立ったこととしては、「大学院での授業全般」が 93.7%と高い回答率を示した。また「指導教員による指導」や「研究活動」も 81.2%と高かった。「特に役立っているものはない」の回答率が 0%であったことから大学院の授業と研究活動、それに対する教員による指導といった大学院生活の中核的な営みが院生の知識や能力の向上に確実に寄与していたと言えるだろう。

「資格取得」は 25.0%に留まっているが、カリキュラムが専門資格の取得に関連する専攻と、そうでない専攻があるため、全専攻の院生に回答してもらう必要があるのか疑問が残る設問ある。資格取得が重要な専攻にとって、回答率の結果があまり参考にならないため、今後、設問の見直しも必要であろう。

表 1 1 在学中に修得した能力について（複数回答）

	R3	R4	R5	R6	R7
1 教養	30.0	12.5	35.7	75.0	43.7
2 ものごとを分析する力	90.0	50.0	64.3	58.3	68.7
3 問題を論理的に考える力	80.0	50.0	57.1	50.0	93.7
4 特定の専門分野に関する理解力	70.0	75.0	75.0	66.7	68.7
5 肯定的な意味で批判的に考える力	30.0	37.5	17.9	58.3	62.5
6 自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	60.0	75.0	32.1	66.7	50.0
7 リーダーシップ	0.0	12.5	7.1	8.3	18.7
8 人間関係を築いたり調整する力	30.0	87.5	32.1	41.7	25.0
9 地域社会が抱える問題への関心や理解力	20.0	37.5	14.3	25.0	31.2
10 明快かつ簡潔に話す力	20.0	25.0	28.6	33.3	50.0
11 表現すべき内容の文章を書く力	50.0	62.5	46.4	41.7	62.5
12 英語以外の外国語の運用力	0.0	0.0	3.6	0.0	6.2
13 プレゼンテーションを準備し発表する力	60.0	50.0	53.6	58.3	50.0
14 学術的な文献の読解力	40.0	62.5	39.3	41.7	62.5
15 情報技術（ICT）の運用力	10.0	0.0	17.9	0.0	12.5
16 国際的な諸問題に対する関心や理解力	0.0	0.0	3.6	8.3	12.5
17 英語の運用力	0.0	0.0	3.6	8.3	0.0
18 ものごとの本質をみて判断しようとする力	50.0	37.5	28.6	41.7	62.5
19 自分を律して行動する力	40.0	37.5	25	33.3	43.7
20 得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	60.0	50.0	21.4	33.3	50.0
21 これらの項目については特に伸びていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

在学中に修得した能力については「問題を論理的に考える力」が93.7%、「ものごとを分析する力」と「特定の専門分野に関する理解力」が68.7%と回答率が高かった。また「肯定的な意味で批判的に考える力」、「表現すべき内容の文章を書く力」、「学術的な文献の読解力」「ものごとの本質をみて判断しようとする力」が62.5%となった。

これらの結果は、修了生の多くがカリキュラム・ポリシーに沿った教育を受け、ディプロマ・ポリシーに定められた専門知識や技能を修得したと評価しているものと考えられる。ただし、21世紀の社会において指導的な役割を担うための「リーダーシップ」についてはまだ課題が残っていると言えよう。

V-5 教育全般についての自由記述

教育全般について、以下のような自由記述があった。

- ・保育・教育学専攻は私を含め、現職教員が所属していることが多くある気がします。一方で、仕事をしながらでは実現ができないような時間帯に、ガイダンスや集まりが設定されていることがありました。もちろん、大学側の勤務時間のこともあるため、「絶対変えてほしい」という気持ちはありませんが、ガイダンスのオンライン配信や、土曜日の設定など選択肢が広がると、嬉しいなと感じました。とはいえ、メールでのやり取りなど、柔軟に対応してくださり、感謝しかありません。ありがとうございます。
- ・大学院生室にシュレッダーがあると便利だと思いました。修士論文を書く際に印刷した資料に、個人情報が含まれているため、処理するのに困った記憶があります。個人情報保護の観点から、シュレッダーがあると、非常に便利だと感じました。
- ・私は男性という立場にも関わらず、入学させていただき、研究活動のきっかけを与えてくださった大妻女子大学、1から全てを教えてくださった大学の先生方、倫理申請や事務処理など、何度もご迷惑をおかけしてしまいましたが、最後まで付き合ってくださいだった事務局の方々には、感謝しかありません。本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。
- ・2年間学ばせていただきました。先生のご指導のおかげでどうにか論文を書き終え、発表まで終わることができました。本当に感謝しています。また、大学院での科目は、教育、福祉、心理と幅広く、履修した科目すべてが自身の教員の職務に活かせることばかりでした。また、社会人ということもあり、柔軟に授業時間や授業形式を設定していただき、大変感謝しています。ここで学んだことを現場で活かし、また研究の世界に戻ってきたいなとも思います。ありがとうございました。
- ・5年間お世話になりました。指導教員、副指導教員の先生方には、大変お世話になりました。研究活動における協力者への関わり方や、方法論等、研究全般において、誠実な態度で研究を進めていくことの大切さを学びました。そして何よりも、常に私のリサーチクエストを尊重してくださり、共に試行錯誤してくださったり、的確なアドバイスをくださったりと、研究活動をいつも支えてくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。また、ここでの学びは、研究に関することだけにとどまらず、教員が学生の思いにどのように寄り添い、応答していくのかという教育者としての振る舞いのようなものもあり、今後も教育現場に従事しようと考えている私にとって、重要な学びであったと感じています。さらに、メンタルヘルスに関する動画を配信してくださったり、常に院生室を綺麗に保ってくださいたりなど、環境面でもバックアップしてくださったことに心より感謝申し上げます。本学を選んで本当に良かったです。ありがとうございました。
- ・熱心に指導してくださる先生方に恵まれていると改めて感じた2年間でした。社会人学生として、理解力が乏しく、困らせてしまう場面も多々あったかと思いますが、根気強く指導してくださった先生方には感謝しかありません。これまでのご指導、心より感謝申し上げます。また、社会人に対する授業時間の設定における融通さや開催方法の選択ができる授

業体制はとてもありがたく、その一方で先生方には大変労力をかけさせてしまったとも考えています。そちらも併せて、感謝申し上げます。

VI. 院生・教員懇談会の実施

開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとした。今年度の実施状況は以下の通りであった。

専攻	実施内容
人間生活科学専攻D	7月28日(月)に専修内で修士課程の学生と共に博士課程の学生の論文進捗状況発表会を対面で実施し、修士課程・博士課程の学生と教員との交流を促す意味で軽食を配布した(保育・教育学)。
人間生活科学専攻M (健康・栄養科学専修)	令和8年2月14日(土)に対面方式で専修内修士論文発表会を実施した。発表会終了後には、修士・博士課程の大学院生と教員による懇談会を開催した。
(生活環境学専修)	在籍学生が1名でしたので、実施していません。
(保育・教育学専修)	7月28日(月)に専修内修士論文進捗状況発表会、11月24日(月)に専修内修士論文計画発表会、令和8年2月11日(水)に専修内発表会をそれぞれ対面で実施した。7月の発表会のときには夕方の時間帯でもあり、院生と教員との交流を促す意味で軽食を配布した。
言語文化学専攻 (日本文学専修)	言語文化学専攻日本文学専修では、例年「日本文学専修院生研究発表会」終了後、日本文学専修の院生及び教員の懇談をおこなうが、今年度は教員側出席予定者が1名であり、その教員が院生からの意見や要望を普段から受け付け対応していたため、懇談会自体は中止した。
(英語文学・英語教育専修)	10月30日(木)に、大学院生研究発表会を開催した。発表会の後で院生・教員懇談会を開催し、院生、来年度院に進学する学生、そして大学院を担当する教員が懇談をした。そこで院生たちからの質問に答え、要望を聴取した。
(国際文化専修)	6月3日(火)昼休みに大学院生および指導教員が昼食会をおこない、院生・教員懇談会とした。
現代社会研究専攻 (情報コミュニケーション専修・臨床社会学専修)	本専攻は、2キャンパスにそれぞれ2専修の学生が在籍することになっており、さらに社会人院生が多いのも特徴であり、学生がオンラインを使っても一堂に会することが難しい状況にある。したがって、現時点では主査・副査を中心とした教員が、各学生から授業・研究環境に関して意見交換する機会を設けており、教員から専攻主任・代議員に学生からの要望等が集約されるようになっている。 今年度も、特に多摩キャンパスの現代社会研究専攻院生室への要望が具体的に上がり、研究環境整備を行うと共に、各教員に学生の様子が伝えられる関係が成立してきている。 来年度は、千代田キャンパスに情コミ専修1名、臨床専修1名、多摩キャンパスに情コミ専修1名、臨床専修4名の院生が在籍することから、キャンパスごと、また専修ごとの学生と教員の懇談や交流を企画していきたい。
臨床心理学専攻	5月に新入生歓迎会を開催し、大学院生と教職員が交流した。また7月に、講義、臨床心理実習、自習室の環境や学生生活等について、院生から意見や要望、質問等を出してもらうように依頼した。その後、提出された意見等(自習室のプリンターの不具合、キャリア形成に関連して修了生等の話を聞きたいなどの要望)に関し、院生と教員とでオンライン会議を開き、質疑応答と意見交換の時間を設けた。後期には院生の要望を受け、教育、福祉分野の修了生等による説明会を3回実施した。その他、令和8年2月には非常勤講師(スーパーヴァイザー)と院生の顔合わせと交流を目的とした懇談会を実施し、さらに3月にはFD委員が院生との面談を行うなど、昨年以上に定期的なFD活動を行い、その結果を大学院教育と院生生活の整備に還元している。

VII. 学会発表の奨励に関する活動

学会発表に備えて、院生の各種学会への参加を奨励してきた結果、今年度の参加状況は次表の通りであった。活動類型のうち、「学会参加」のカテゴリーには「各種シンポジウム」「全国フォーラム」等への参加も含むが、学会での「発表」は含まないものとし、別途、IXに記載する。

専攻	活動類型	件数	内容
人間生活科学専攻 博士後期課程	学会参加	2 件	【健康・栄養科学専修】 日本食物繊維学会第 30 回学術集会、第 78 回日本保育学会大会
言語文化学専攻 博士後期課程	学会参加	10 件	【国際文化専修】 キリシタン学研究会第 7 回例会、2025 年度中国文化学会大会、第 40 回漢文教育研究会、日本ギリシャ協会主催シンポジウム、全国かくれキリシタン研究会、比較文化学部主催特別講演会、白山中国学会、第 35 回 書学書道史学会大会、令和 7 年度共同研究プロジェクト 講演会、人間生活文化学会創設記念シンポジウム
人間生活科学専攻 修士課程	学会参加	18 件	【健康・栄養科学専修】 日本栄養・食糧学会関東支部シンポジウム、第 78 回日本保育学会大会、管理栄養士・栄養士スキルアップセミナー、第 72 回日本改善学会学術総会、2025 年度全国栄養士大会、第 21 回日本栄養改善学会北陸支部学術総会、第 79 回日本栄養・食糧学会大会、日本食物繊維学会第 30 回学術集会、日本薬学会 【生活環境学専修】 第四次住宅整備後期方針シンポジウム、coton シンポジウム 2026「まちに農のある風景を」 【保育・教育学専修】 日本学童保育学会第 15 回研究大会、第 60 回全国学童保育研究集会、第 8 回ホリスティック教育/ケア学会研究大会、日本保育学会第 78 回大会、第 16 回幼児教育実践学会、第 10 回日本保育者養成教育学会研究大会、日本理科教育学会
現代社会研究専攻 修士課程	学会参加	7 件	【情報コミュニケーション専修】 戦前研究会、行動生物学研究会、ソーシャルワーク研究所第 20 回シンポジウム 【臨床社会学専修】 思春期青年期精神療法学会、児童青年精神医学会、青年期精神療法学会、認定精神保健福祉士更新研修
臨床心理学専攻 修士課程	学会参加	7 件	思春期青年期精神療法学会、児童青年精神医学会、青年期精神療法学会、認定精神保健福祉士更新研修、日本心理臨床学会第 44 回大会、日本家族心理学会第 42 回大会、日本応用学会第 41 回大会

Ⅷ. 学内発表会の奨励・支援に関する活動

学内での論文発表会については、「令和 7 年度大学院要覧」11 頁に、「修士論文審査等に関する日程」のうち、第 8 番目の項目に「論文発表会の開催」として記載されている。その修士論文発表会を、令和 8 年 2 月 21 日に実施した。総勢 19 名の院生が発表した。当日のプログラムを以下に掲載しておく。

令和7年度 修士論文発表プログラム (オンラインによる開催)

日時 令和8年2月21日(土)9:00開始(ミーティングへの入室は8:40から可)

開会の挨拶 青江 誠一郎 人間文化研究科長

総合司会 蔵野 ともみ 教務委員長

開始予定時刻	発表順	発表者	
9:00		蔵野ともみ 教務委員長プログラム説明	
9:05		青江誠一郎 研究科長あいさつ	
9:10	1	臨床心理学専攻	
9:27	2	臨床心理学専攻	
9:44	3	臨床心理学専攻	
10:01	4	臨床心理学専攻	
10:18	5	現代社会研究専攻	
10:35～10:45 休憩・接続確認			
10:45	6	言語文化学専攻	日本文学専修
11:02	7	言語文化学専攻	日本文学専修
11:19	8	言語文化学専攻	英語文学・英語教育専修
11:36	9	言語文化学専攻	英語文学・英語教育専修
11:53～13:00 昼食休憩・接続確認			
13:00	10	言語文化学専攻	国際文化専修
13:17	11	言語文化学専攻	国際文化専修
13:34	12	言語文化学専攻	国際文化専修
13:51	13	言語文化学専攻	国際文化専修
14:08～14:20 休憩・接続確認			
14:20	14	人間生活科学専攻	健康・栄養科学専修
14:37	15	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
14:54	16	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
15:11	17	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
15:28	18	人間生活科学専攻	保育・教育学専修
15:45	19	人間生活科学専攻	保育・教育学専修

・持ち時間1人17分(発表12分、質疑応答・交代5分)です。発表開始から12分経過時、17分経過時が分かるよう、Zoom上でお知らせします。

・発表開始時間は進行状況により前後する場合があります。また、通信の不具合やその他の都合により発表が開始されない場合は、発表順を変更する場合があります。

【オンライン実施上の注意】

- ・Zoomを利用して開催します。ミーティングのURLは、別途送信するメール本文でご確認ください。
- ・Zoomの個人表示名は自身の氏名にしてください。発表者は氏名の前に「発表」の文字を入れてください。
(例: 発表 大妻花子)
- ・発表時、Zoomを接続している場所の周囲の環境音や、紙をめくる音などが雑音としてマイクに入ることがありますので、極力静かな環境で参加してください。
- ・入室時はマイクをミュートにし、発表順になったらミュートを解除してください。発表の2分前にはマイク・カメラを用意し、パワーポイント画面共有の準備をしておいてください。
- ・ご自身の発表時以外はマイクをミュートにしてください。カメラはオン・オフどちらでもかまいません。
なお、発表者への質疑時に発言する際は、マイク及びカメラを必ずオンにしてください。
- ・自分の発表以外は録音や録画をしないでください。

Ⅸ. 院生論文集発行の奨励・支援に関する活動

研究科の設置の趣旨に適合した院生論文集として、「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」に掲載している。令和 7 年度の修士論文概要は、オンラインジャーナルの”No.36 2026”に掲載される。各専攻での研究教育活動の状況は以下の通りであった。研究教育活動の内容を「論文発表」「口頭発表」「ポスター発表」に分けて以下に示す。

専攻	発表形式	題目
人間生活科学専攻 博士後期課程	論文発表	子どものくつくる>諸相-小学 2 年生 O 君の「いちご」
	論文発表	子どものくつくる>活動のエスノグラフィー(2) —素材・道具・人・時間の交錯から立ち現れた〈生成のリズム〉の試論—(査読付)
	論文発表	手を動かすことからひらかれる子どもの世界 (査読付)
	ポスター発表	意味が立ち上がる前にある造形の時間
	口頭発表	保育における遊び場面の「リスク」とは
	口頭発表	パネルシアターを媒介にしたストーリーメイキングのプロセスの質的検討:素材との出会いと「物語るからだ」の生成
	論文発表	子どもによるパネルシアター —ナラトロジー分析による表現メディアとしての特徴の分析—
	論文発表	幼児のコミュニケーション能力育成におけるパネルシアターの教育的意義
	論文発表	子どもによるパネルシアターの教材としての可能性
	口頭発表	ポジティブ感情調節不全に対する心理的介入の適用可能性 —混合研究法による予備的効果検討—
	口頭発表	幼児期における科学的探究の萌芽についての研究
	ポスター発表	Variety of food intake during pregnancy and its association with postpartum depression
	口頭発表	妊産婦のための食事バランスガイドの遵守と妊娠期間中の体重増加量との関連
	口頭発表	高食物繊維小麦粉摂取による腸内環境改善を介した免疫調節効果の検証
言語文化学専攻 博士後期課程	口頭発表	「スペイン統治領フィリピンにおける中国移民のカトリック化」
	口頭発表	「呉昌碩早期における文人交流から見る芸術観の考察」
	論文発表	史料紹介 青木家文書「先祖書写」

	論文発表	〈訳注〉『万国史記』序跋(1)
	論文発表	「呉昌碩早期における文人的思考の考察」
	口頭発表	「博物館による異文化コミュニケーション」
	論文発表	令和七年度共同研究プロジェクト シンポジウム記録 「博物館による異文化コミュニケーション」
	口頭発表	里見軍の東総侵攻と在地城郭(和田城の伝承と椿海)
	論文発表	和田城の伝承と椿海
人間生活科学専攻 修士課程	口頭発表	高アミロース小麦粉の摂取が食餌性肥満モデル マウスの腸内環境および糖・脂質代謝に及ぼす影響に関する研究
	口頭発表	小学生理科における複数単元を通じた批判的思考の表出と契機 ー考察場面と振り返り場面の記述分析を通してー
	口頭発表	理科の授業が連続的な学習活動になるために ー反証場面における仮説の根拠に着目してー
	口頭発表	幼児期の染色活動 ーこころとからだのつながりに着目してー
	口頭発表	小学校4年生の物質学習における粒子概念の転移についての研究 ー児童の不可視な現象の説明内容に着目してー
	口頭発表	黒大豆食育プログラム ～オンライン交流で深まる学び～
言語文化学専攻 修士課程	口頭発表	「時代を超えて行われる文学による再審」
	口頭発表	文学作品を通して見る戦争意識 金ヨロン『文学が裁く戦争ー東京裁判から現代へ
臨床心理学専攻 修士課程	論文発表	心理面接におけるクライアントの不満の表明に関わる主観的体験の質的研究
	論文発表	単科精神科病院での実習を通じて学んだこと
	口頭発表	大学院で学ぼう！～私たちの選択～

X. 他大学との各種連携の活性化に関する活動

現在、現代社会研究専攻では、相互の交流と発展を目指して、社会学分野ならびにその関連分野の授業科目に関して、特別聴講学生の単位互換制度を設けている。詳しくは、「令和 7 年度大学院要覧」27 頁を参照されたい。

XI. 就職支援に関する活動

今後、キャリア教育の充実の観点から就職支援を強化していくための具体的な方策を検討していく。

専攻	主な進学先・就職先	
人間生活科学	就職	・日本児童教育専門学校 ・株式会社YZコンサルティング ・昭和産業株式会社 ・学校法人成蹊学園成蹊小学校
	進学	・大妻女子大学 人間文化研究科 人間生活科学専攻 保育・教育学専修 博士後期課程
言語文化学	就職	・ソニーミュージックグループ ・鶴丸海運株式会社 ・さわかみ投信株式会社 ・株式会社オンデーズ ・株式会社SHIFT
現代社会研究	就職	・学校法人国際学園 星槎大学
臨床心理学	就職	・公益財団法人東京カリタスの家 子どもの家エラン ・医療法人社団翠生会 大森西メンタルクリニック ・相模原市教育委員会 ・風と森診療所

XII. 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動

社会人特別選抜の入学者に授業の開講時間など適切な配慮がなされたかについては、アンケートをとったところ、全体の評価は良く、社会人学生から一定の評価を受けているといえる。

また、「大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例」により勤務形態に配慮した教育研究体制を希望する学生の入学にあたり、入学先となる人間生活科学専攻教員への周知体制を強化した。

次年度も引き続き、千代田・多摩キャンパスの連携・充実を具体的にどのように推進していくか検討する。

XIII. 研究科設置の主旨に沿った教育方針具体化のための活動

研究科の設置の主旨のひとつである「学部横断的（専攻・専修横断的）な教育・研究体制のあり方」、ならびに、「学位取得に至るまでの組織的指導体制の具体化・実質化」を推進して行くために、平成23年度入学生より、「中間発表会（旧研究計画発表会）」を研究科全体で実施することとし、「修士論文審査等に関する日程」のプログラムの中に位置付けることを決めた。

XIV. その他の活動

「その他の活動」として、院生によるティーチング・アシスタントの実施状況一覧を次に掲載しておく。

ティーチング・アシスタント等について

所属・学年等	担当授業科目					
	開講学科等	授業科目名	授業担当教員名	開講時期	開講曜日・時限	開講校地
人間生活科学専攻 (修士課程) 1 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	生活環境実験	田中 直子	前期	木曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	人体構造機能論実験	高波 嘉一 森田 純仁	前期	金曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	食品学実験	堀内 啓史	後期	金曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	基礎調理学実習Ⅱ	玉木 有子	後期	月曜 3、4 限	千代田校
人間生活科学専攻 (修士課程) 2 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	実践統計学	清原 康介	前期	金曜 4 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻	化学基礎実験	鈴木 優志	後期	金曜 3、4 限	千代田校
言語文化学専攻 (修士課程) 2 年	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) A	BARR,B.	前期	水曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) A	IKEDA,KEN	前期	金曜 2 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) A	BARR,B.	前期	木曜 3 限	千代田校

	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) A	BERNINGER,G	前期	木曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) B	BARR,B.	後期	水曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) B	IKEDA,KEN	後期	金曜 2 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) B	BARR,B.	後期	木曜 3 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) B	BERNINGER,G	後期	木曜 4 限	千代田校
現代社会研究専攻 (修士課程) 1 年	社会情報学部 社会情報学科 社会生活情報学専攻	量の調査演習	池田 緑	前期	木曜 4 限	千代田校
臨床心理学専攻 (修士課程) 1 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学 I	西川 千登世	前期	火曜 3 限	多摩校
臨床心理学専攻 (修士課程) 1 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学 I	伊藤 尚枝	前期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学 II	西川 千登世	後期	火曜 5 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	キャリア心理学セミナー	八城 薫 三好 真 高丸 理香	前期	水曜 4 限	多摩校
	人間関係学部	情報基礎 DS(表計算活用・データリテラシー)	小幡 正子	後期	水曜 2 限	多摩校
	人間関係学部	コンピュータ応用	小幡 正子	前期	水曜 3 限	多摩校

臨床心理学専攻 (修士課程) 2 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会・臨床心理学基礎セミナー	八城 薫 三好 真 吉澤 良美	前期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	堀 洋元	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	田中 優	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	伊藤 尚枝	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅱ	伊藤 尚枝	後期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	堀 洋元	前期	金曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	八城 薫	前期	金曜 2 限	多摩校
臨床心理学専攻 (修士課程) 2 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会心理学調査研究法	田中 優 堀 洋元	前期	木曜 1、2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法応用	田中 優 大久保 暢俊 本田 周二 三好 真	後期	金曜 1、2 限	多摩校
	人間関係学部	情報基礎 DS(表計算活用・データリテラシー)	西川 徹	後期	月曜 3 限	多摩校
	人間関係学部	コンピュータ応用	小幡 正子	後期	水曜 3 限	多摩校

XV. おわりに

令和7年度の「大学院進学意識に関するアンケート」、「大学院の研究・教育に関するアンケート」「大学院修了時アンケート」の3種類の調査結果及び、自由記述の部分について総括しておく。

「新入学者に対しての大学院進学意識に関するアンケート」の回収率を見ると、何度も回答を催促したのにもかかわらず、一昨年度の68.8%、昨年度の81.8%と比較してみると、47.8%に大きく減少しており、令和元年度の同アンケートの回答率94.4%のほぼ半分の結果であった。このアンケートは院生を募集するうえでも重要であり、回収率改善への工夫が求められる。

大学院進学にあたって影響を与えた情報源についての結果を見ると、「教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから」と「指導教員になる教員との相談」という回答の平均点数が3.5以上と高く、研究目的が明確であり、その研究目的に関連した指導教員との相談を必要としているという学部とは異なる大学院教育の性格というものが浮かび上がっている。

新入学生の希望している大学院修了後の進路については、「臨床心理士として就職したい」と「教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい」という回答が27%と高く、終了後の資格取得を視野に入れていることがわかる。一方、博士後期課程に進学したいという回答が9%と例年に比べて少ないことがわかる。後期博士課程のない専攻もあり、専攻ごとの独自性はあるものの、研究科全体の充実、修士課程のみならず、博士後期課程の充実も含まれるものであり、修士課程と後期博士課程の連続性についての検討は今後の課題のひとつである。

次に、全大学院生を対象にした授業内容、履修環境、事務体制に関しての「大学院の研究・教育に関するアンケート」の結果についてであるが、大学院の授業全般についての各質問項目に関しての5段階評価の平均4.0以上であり、院生は授業について一定の評価をしていることが伺える。

自由記述をみると、教員に関しては授業に満足している記述もあるが、中には、講義が直前にキャンセルなど十分に実施されていないケースもあることが指摘されている。例外的なものであると考えられるが、決して許容できるものではなく、該当する教員の反省と改善が求められることはいまでもない。大学院担当の事務職員に関しては、丁寧な対応に満足しているという複数の記述がみられたが、大学院の授業の充実には事務職員のサポートは不可欠である。設備等に関して、院生室にウォーターサーバーや個人情報が含まれた研究資料の処理するためのシュレッダー設置の要望があった。また、多摩校の院生室に関して守衛室に連絡をすれば22時まで残ることができるが、23時まで残れるようにしてほしいという意見もあった。他にも図書館に関するものなどの要望もあったが、院生の要望をすべて受け入れるということではなく、そうしたニーズを把握し、教育・研究上必要なものは可能な限り実現していく必要がある。社会人に対するオンライン授業等、柔軟な対応を評価する記述もあり、多くの卒業生を含む社会人院生の増加する中、社会人院生への柔軟かつ充実した対応は今後も継続していくことが必要である。

「大学院修了時アンケート」の結果をみると、「大学院での授業全般」が知識や能力の向上に大きく役立ったと回答しているものが、93.7%と過去最高であった。このことは、大学院の授業が本来の目的を達成していると評価できる。また、「ものごとを分析する力」と「特定の専門分野に関する理解力」68.7%「肯定的な意味で批判的に考える力」、「表現すべき内容の文章を書く力」、「学術的な文献の読解力」「ものごとの本質をみて判断しようとする力」62.5%という高回答率も、本大学院のカリキュラム・ポリシーに基づく教育の結果としてディプロマ・ポリシーに示されたことが実現されていることがわかる。しかし、一方、情報技術（ICT）の運用力が12.5%に留まっている点は、論文執筆上での生成AIの活用が議論されるようになった昨今の課題といえるだろう。

修了時の自由記述を見ると、熱心な指導教員への感謝の意を表しているものが多く見られたが、大学院教育は担当教員の個別的な指導に拠るところも大きい反面、ハラスメントの生じることも少なくない。令和 7 年度のハラスメントに関する調査結果には「経験がある」が 5 名、「答えたくない」が 3 名あり、ハラスメントを推測させる自由記述もあった。ハラスメントはあってはならないものであり、今後もその防止について教員への注意喚起を継続していく必要がある。

以上のような今年度のアンケートの結果全体を踏まえ、本学大学院のさらなる充実を図ってきたい。

Ⅱ 全学FD講演会・研修会

1 講演会・研修会の内容及びアンケート結果

(1) FD 講演会:我が国の「知の総和」向上の未来像

～高等教育システムの再構築～の答申を受けて

講師:学長 市川 博 先生

日時:令和7年7月29日(火)16:30～18:00 Zoomによるオンライン開催

令和7年度 前期 FD講演会

我が国の「知の総和」向上の未来像
～高等教育システムの再構築～
の答申を受けて

講師 学長 市川 博

我が国の「知の総和」向上の未来像の答申を
本学に置き換えてお話しいたします。

日時 7月29日(火)
16:30～18:00

開催方法 Zoom
URLはUNIPA配信

主催:大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会

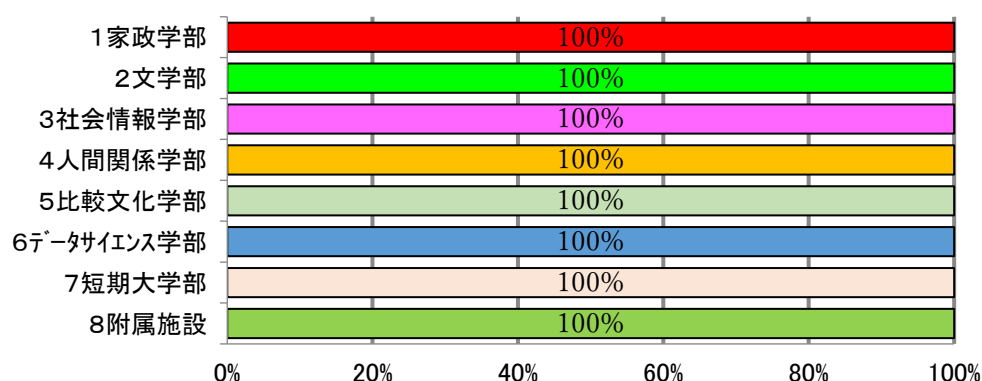
FD 講演会アンケート集計結果

< テーマ > 我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～の答申を受けて
 < 講師 > 学長 市川 博 先生
 < 開催方法 > Zoom によるオンライン開催 + 録画配信
 < 開催日時 > 令和7年7月29日（火）16:30～18:00
 < 録画配信 > 令和7年8月5日（火）～ 公開中
 < 回答期間 > ①令和7年7月29日（火）～9月11日（木）23:59
 ②令和7年9月12日（金）～9月24日（水）23:59（専任教員未回答者対象）
 < 未回答者 > 0人
 （研修等除く）

【参加者（アンケート回答者）の所属】

所属	出席者			所属教員数
	Zoom	録画	合計	専任教員数
1 家政学部	30 人	36 人	66 人	66 人
2 文学部	8 人	32 人	40 人	40 人
3 社会情報学部	18 人	13 人	31 人	31 人
4 人間関係学部	15 人	17 人	32 人	32 人
5 比較文化学部	10 人	9 人	19 人	19 人
6 データサイエンス学部	7 人	6 人	13 人	13 人
7 短期大学部	11 人	7 人	18 人	18 人
8 附属施設	3 人	14 人	17 人	17 人
9 非常勤講師	24 人	75 人	99 人	
10 助手	1 人	22 人	23 人	
11 事務職員	5 人	1 人	6 人	
合 計	132 人	232 人	364 人	

【所属別参加率】（専任教員）

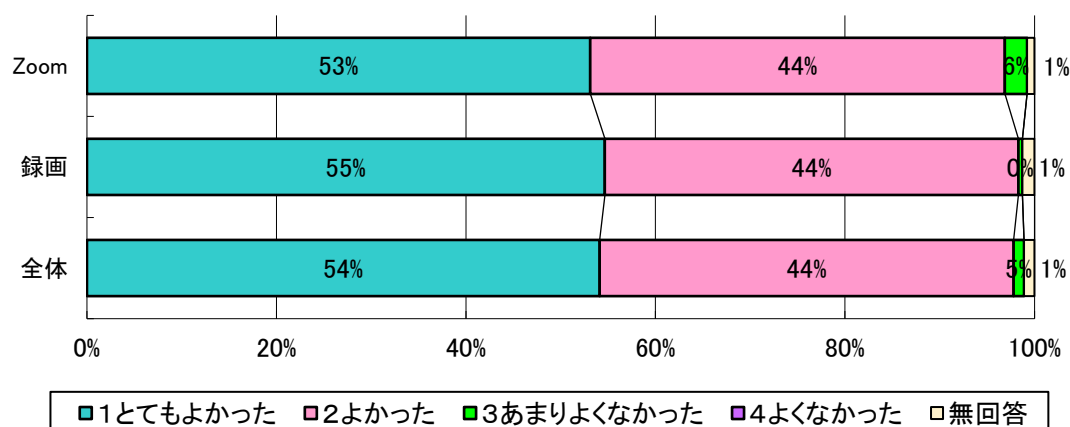


以下、提出されたアンケートの集計結果（アンケート回収総数 364 人分を対象）

問 1 講演会の内容、運営などについて当てはまるものを選択してください。

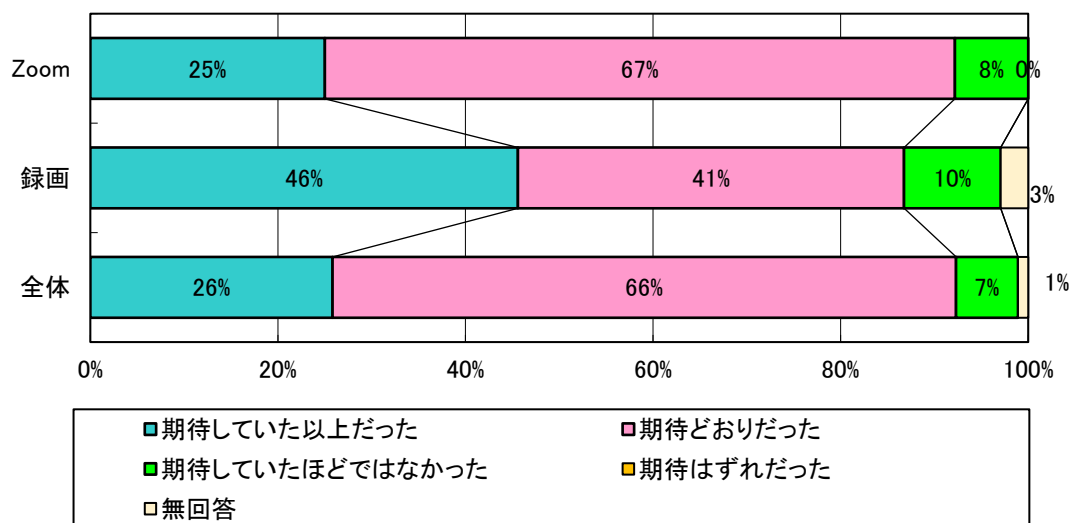
（１）講師について

選択肢	Zoom		録画		全体	
1 とてもよかった	68	(53%)	129	(55%)	197	(54%)
2 よかった	56	(44%)	103	(44%)	159	(44%)
3 あまりよくなかった	3	(6%)	1	(0%)	4	(5%)
4 よくなかった	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
無回答	1	(1%)	3	(1%)	4	(1%)



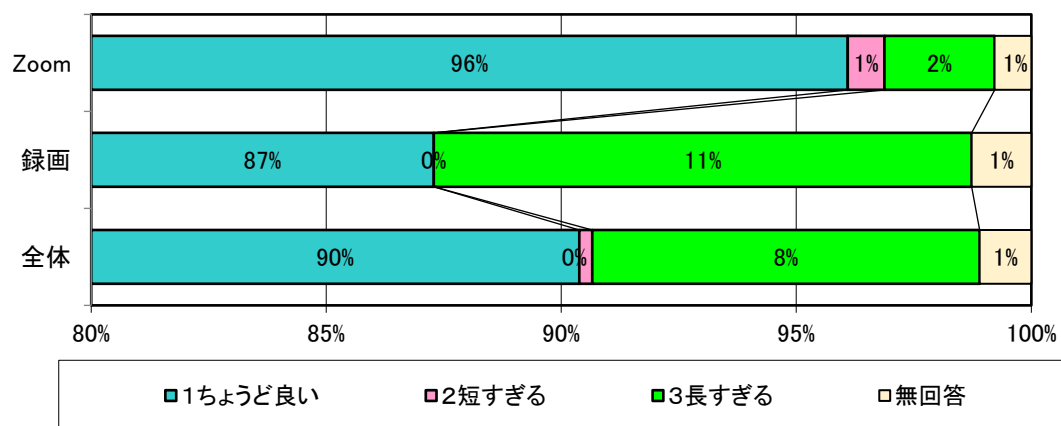
（２）内容について

選択肢	Zoom		録画		全体	
1 期待していた以上だった	32	(25%)	62	(46%)	94	(26%)
2 期待どおりだった	86	(67%)	156	(41%)	242	(66%)
3 期待していたほどではなかった	10	(8%)	14	(10%)	24	(7%)
4 期待はずれだった	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
無回答	0	(0%)	4	(3%)	4	(1%)



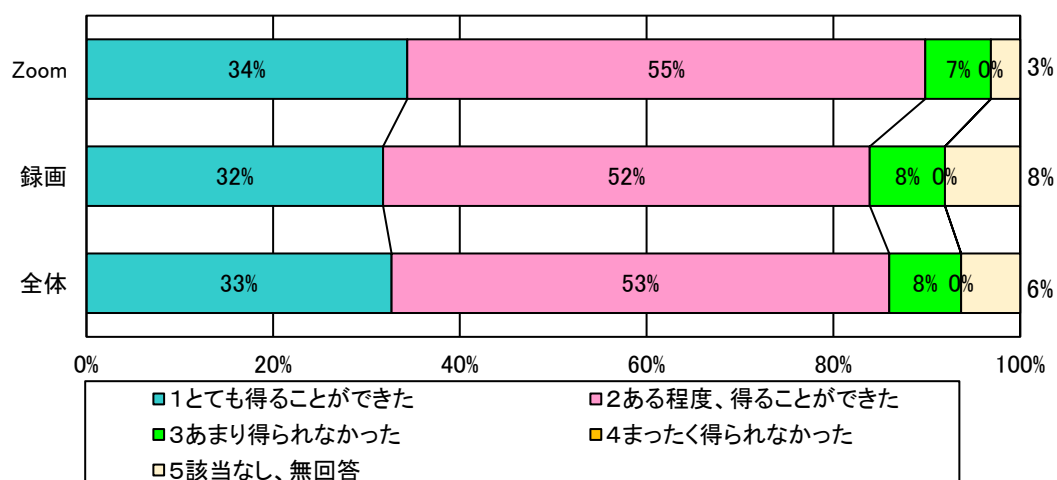
(3) 時間について

選択肢	Zoom	録画	全体
1 ちょうど良い	123 (96%)	206 (87%)	329 (90%)
2 短すぎる	1 (1%)	0 (0%)	1 (0%)
3 長すぎる	3 (2%)	27 (11%)	30 (8%)
無回答	1 (1%)	3 (1%)	4 (1%)



(4) 自身の授業内容および方法の参考となる情報・知見について

選択肢	Zoom	録画	全体
1 とても得ることができた	44 (34%)	75 (32%)	119 (33%)
2 ある程度、得ることができた	71 (55%)	123 (52%)	194 (53%)
3 あまり得られなかった	9 (7%)	19 (8%)	28 (8%)
4 まったく得られなかった	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
該当なし、無回答	4 (3%)	19 (8%)	23 (6%)



(5) 今後希望される講演テーマについて（複数選択可）

選択肢	全体
1 今回の講演テーマ関連	78 (11%)
2 国の高等教育・教育改革の動向	120 (17%)
3 本学の教育体制・教育改善の動向	191 (26%)
4 授業やゼミ・教材開発に関する事例紹介	110 (15%)
5 成績評価と効果的なフィードバック方法	76 (10%)
6 初年次学生の教育支援	77 (11%)
7 キャリア教育・進路指導	76 (10%)

[今回の講演テーマ関連]

- ・今回の講演テーマ関連として、「社会のニーズにあった教育の提供」について、各学部のカリキュラムや教育資源の具体的な内容を聞いてみたいと思いました。
- ・本学の現段階考えている改革の方向性 女子大学のあり方
- ・レイトスペシャライゼーション 学生の学びの質保証体制について
- ・地域や企業と連携した取り組みや、大学間（短大間）の研究以外の連携（協定など）について情報を知りたいです。
- ・配慮の必要な学生への支援活動、また本学の現状、事例に関するテーマを希望します。
- ・社会人や社会との一体的教育のあり方や方法について

[国の高等教育・教育改革の動向]

- ・「知の総和」が示されて以降の、中教審での議論等のフォローアップをいただきたい。
- ・日本の高等教育におけるAIの影響について、私たちは考察する必要があると考えます。

[本学の教育体制・教育改善の動向]

- ・教育改革に対する学生参画について以前もテーマとして取り上げていただいたかと思いますが、次の認識評価でも学生参画が重点となるので再度テーマとして希望します。
- ・AIを活用した教育改善について学びがたいです。
- ・各部門の職員と教員との間での意見交換会のような機会があったらいいなと感じます。生き残っていくことということは同じであっても、立場・職務上考えていることはお互いに異なると思います。お互いの考えについてざくばらんに意見交換・すり合わせができる場があればよいと思います。
- ・教育活動と研究の両立について
- ・教員と職員が懇談する機会が欲しいです。多摩キャンパス時代にはあったと思いますが、コロナ禍後にはお互いそうそう食事会にも誘いづらくなっている、特に若手の方はそうなのでないかと思います。非常勤教員との懇談会後の懇親会のように、ざくばらんな会食を通じて教育・経営をめぐってお互いの話を聞く（言うのではなく）機会があることは、より効率的なFDにつながるのかなと思います。
- ・全学をあげての広報戦略（各学部学科にボトムアップ型の対策を求めるのは限界が来ていると思います）
- ・FDに関する他大の先進事例や他の女子大の事例などを伺いたいです。
- ・改革の方向については、継続的にテーマとなると良いと思います。

[授業やゼミ・教材開発に関する事例紹介]

- ・レポートや卒論の票割について、現状、無視できない状況です。AI票割チェックツールの導入などについて、メリット、デメリット、他大学の導入状況など。
- ・高等教育における新しい授業形態の模索 学生のアウトプット能力を向上させるための取り組み例など
- ・AIによるレポート作成が課題になっています。正しい使い方、ルールなどについて教えていただきたい、ご検討いただければ幸いです。
- ・学生のチャットGPTなどの使用にたいする最新の対応、対応について聞いてみたいです。
- ・障がいのある学生への対応について。学生のAI使用に対する対応について。
- ・授業の特別配慮を要請した学生への対応

[キャリア教育・進路指導]

- ・社会情勢の動きをキャッチするのはとても苦手なので、学生の進路指導の際に今どきの就活事情についてお聞きしたいです。

[その他]

- ・高大連携、高校教育
- ・一度大学の広報戦略に資するような講演会を企画してはいいのでしょうか。大学教員は教育と研究の専門家ですが、広報の専門ではないので、各学科とも広報については手探りでやっているかと思います。よって、他大学のやり方や業者の受託業務の対応方法、さらには一般企業の場合などにも踏み込んで話を聞かせていただければ、大学全体としてはもちろんのこと、各学科としてどうしたらいいかについての参考になるかと思います。
- ・大学の効果的な募集広報について、「ブランド化」に成功した大学からの招へい（例）近畿大学
- ・効果的な大学広報活動について
- ・入試制度への対応について知りたいです。社会の求める人材を4年前（2年前）に獲得する、という発想が必要ではないでしょうか。
- ・令和に入って、学生の質がさらに変化したと考えられる。教員の大声などが耐えられないといった相談をよく受ける。専任教員のみならず、非常勤の先生にも、どういった行為がハラスメントに該当する可能性があるのか共有できるような全学的FD（ハラスメントアップデート）講習があったら良いと感じている。

問2 今回の講演会で、お気づきの点、記憶に残った点、ご意見などございましたらご入力ください。

- ・本学の現状、「知の総和」の概要についてとてもわかりやすく説明いただきありがとうございました。大学を取り巻く厳しい環境の中、中計とあわせ、自部署で本学存続(女子大学として)のために何ができるのかを今回の講演に照らし考えていこうと思いました。
- ・「知の総和答申」から最新報道までを含めた高等教育機関の動向、ねらいについて改めて整理できました。ありがとうございました。
- ・時間の都合もあったかと思いますが、1つくらい質問を受け付けてもよかったのではないかと思います。
- ・市川学長就任に合わせ、講演いただきありがとうございました。少子化により大学を取り巻く環境、とりわけ本学も厳しい状況にある中ですが、答申の内容と本学の状況と照らして説明くださり、興味深く聞かせていただきました。教学マネジメントの構築、学修者本位の教育、出口の質保証等、高等教育機関として大切なことではありますが、近年入学してくる学生の質の低下により、学修の意欲が感じられない、授業のレベルを下げざるを得ないような状況もあるのではないかと推察いたします。また規模適正化、設置認可厳格化の方向に向かっていく中で、本学が今後向かっていく方向について改めて指針を伺いたいと感じました。
- ・18歳人口の減少は予想を上回るスピードで進んでおり、女子大学の志願者離れも顕著です。こうした厳しい環境の中、大学改革はもはや待ったなしの課題であることを今回の研修を通じて強く実感しました。今後は、社会のニーズを的確に捉えた学部・学科の改組を進めつつ、規模の縮小も視野に入れた「縮小均衡」の戦略が不可欠です。例えば、跡見学園女子大学では、わずか2年間で入学者数が半減するという衝撃的な事例が起きています。その結果、入学定員を半減し、新座キャンパスを閉じて、文京キャンパスに統合することを発表しました。本学も他人事ではなく、危機感を持って現実に向き合う必要があります。多くの大学では、教職員がFD・SD研修を通じてこのような危機を認識してはいるものの、その認識が具体的な改革目標や実行可能なアクションプランにまで結びついていないのが実情です。生き残るのは、現状を直視し、改革を具体的に実行できる大学だけです。逆に、危機感を抱きながらも動けない大学は、確実に衰退の道をたどることになると感じました。
- ・学生の能力を最大限高めるための「教育の質の向上（学生ファースト）」をするためには、何が必要で大切なのかを自分なりに考えて行きたい。
- ・学長が話されていたように、様々なトレードオフ的な関係を持つ難問を解決して行かなければならない状況があらためて理解出来ました。
- ・今、どのようなことが問題になっており、どのように解決せねばならないのかがよくわかりました。ありがとうございました。
- ・受験生世代の減少の主たる要因は政治と行政にあると思います。現在、大企業、富裕層と一般層との乖離はかなり進み、一般層は子づくりを諦める割合が増えており、今の状態では今後共、減少が止まらないと思います。こうした根本の解決をしないまま、大学の現状の手当だけを考える様な施策では不十分と思われます。
- ・現在の女子大の状況及び、補助金を数パーセント獲得するための努力等、本学の厳しい状況がよく理解できました。
- ・今回、大学を取り巻く様々な問題点と展望についてお伺いしました。指摘された内容は当たり前のことではありますが、これを実際に行うことはなかなか困難を伴うものだと思います。大学は18歳人口（出生率）の減少を踏まえて、拡大路線から縮小にかじを切る時代になっております。国もそれを推進していて、様々な後押しをする施策を考えています。本学も同分野の学科専攻が少なからずありますが、統合し、縮小する必要があると思います。また、収支決済が著しく悪いものは、別なものに転換をする必要があります。そのためにニーズをいち早くキャッチすることが必須になります。このために専門の部署が必要になるかもしれません。
- ・女子大不利といわれる中において、大妻が健闘していることがわかった。厳しい現状の中、生半可な体制では生き残れないと思う反面、近年の大妻には「管理」優先の息苦しさを感ずる。
- ・ご講演のテーマであった「知の総和」とは何を意味するのか、良く理解できた。2040年までに20万人以上の18歳人口が激減し、また、大学の補助金の条件などが厳しさを増すなかで、大妻女子大学がどのような教育の質保証を社会的

に示していくべきなのか、教員として何ができるのか、考えさせられた。

- ・女子大、本学の置かれている立場を再認識することができた。
- ・定員増によりクラスが増えた際にはクウォーター制を考えていたので、推進されていると聞き安心しました。
- ・少子化に伴う大学の厳しい現実、収容定員未充足・超過のペナルティ、経常費補助金のしくみ etc. についていろいろと学べた講演会でした。「知の総和」(数×能力)向上のため、質の向上、規模の適正化、アクセスの確保が必要であり、教学マネジメントの確立の必要性や本学の様々な取り組みについて知ることが出来ました。ありがとうございました。
- ・教育の現状をめぐり広く一般的なことを紹介しながら、大妻の現在の立ち所と問題点、目指す方向を要領よくまとめ、説明できたところ、感心しました。一教員として、どう行動でこのような現状の要請に応えるかは、興味深くて、色々考えさせられた。
- ・本学の現状について、限られた時間ではあったが、分りやすく、理解できた。それを踏まえ、教員個人として、学部として、組織の一員として取り組むことについて、改めて考察できた。学長や理事長との対話を求めたいとも思いました。2 キャンパスの利点をどの様に捉えられているか、現時点ではデメリットが際立ち、保護者や学生への説明責任を現場のみが果たしているようにも感じるため、教員負担も格差を感じる。学部間の、学問としても豊富な資源の活用についても、恩恵を受けづらい事実をどの様に捉え、今後の経営に取り組まれるのか、方針を伺う機会を今後に期待している。
- ・豊富なデータや資料によって、現状と課題が理解できた。「適正化」という言葉とその意味するところが印象に残った。
- ・意見と質問を混ざって書きました。学長のご講演にもありましたが、急激な大学進学者の減少が予想されるなかで、本学への入学者の質の維持を図るためには、定員規模の適正化が避けられないと思います。そのためには教職員の人員削減も必要となってくると思いますが、定員規模の削減と、それに連動した教職員の削減の目標設定について、具体的な検討はどの程度進められているのでしょうか。この問題は、全学的な現状認識の共有や合意形成に時間がかかります。本日のお話でも、あまり時間が残されていない印象を持ちましたが、いかがでしょうか。
- ・国、および、本学の現状と問題の基本的な事柄について良く分かった。
- ・現状について系統立てて説明頂き、より理解を深めることが出来た。
- ・助成金6%増を目指すというのはよくわかりましたが、本学としてどのような理念で、どの点に重点を置くのかをもう少し明確化していただきたかったです。
- ・本学で取り組むべき課題を明確にした上で、それらの課題と関連がある文科省の方針に絞って簡潔にご講演をいただきました。
- ・高等教育システムの再構築への答申を受けての講演で、文科省令和7年5月12日の中教審教育答申第255号を分かり易く丁寧にご説明いただきながら、学長先生のお考えも踏まえての講演で全体的な流れや焦点となる案件などのお話を聞くことが出来、大変に感謝しております。
- ・国の動向を理解し、本学の取り組みを共有しながら連携を図っていくことが必要であると思いました。また、「教育研究の質の向上」「社会のニーズにあった教育の提供」を念頭に置き、カリキュラムや授業内容・方法について考えていきたいと思いました。
- ・少子化に向け大学が進むべき方向性が見えてきました。
- ・これから本学が取り組んでいかなければならない様々な改革課題について知ることができました。少子化の中で生き残ることは想像以上に困難なことであると感じました。
- ・まず、今回は中教審の示した指針と本学の体制とのすり合わせに関するお話でしたので、3、4、6、特に6の質問項目は適切ではないと思われます。感想としては、内部の体制は2018 答申の要請するものを一通りは整えたということですので、補助金獲得のためにさらなる努力が必要であるということで理解しました。他方で、中教審の答申はマクロレベルで大学の足並みを揃えさせるために発信されるものであり、個々の大学の生き残りの論理とはあまり一致しません。よって、これはこれとして受け止めつつ、別途大妻として生き残りのための経営戦略を立てていく必要があります。講演前半部分はこれについて刺激を与えるものでした。現在オープンキャンパス来場者に対しては各学科それぞれの、高校生を惹きつけるための努力が払われていますが、その前の段階、すなわち大妻のオープンキャンパスに来させること自体が勝負の大きな分かれ目なので、その求心力を全国的に増すためにどうしたらいいかという広報戦略が今後ますます大事になっていきます。全学的には、他大学の広報との差別化を図るべく、どのようなことを世に(高校生とその父母に)アピールすべきなのかを考え、各学部と各センターにある既存のリソースの再確認と見せ方の工夫が、加えて世の中が求めるものに対応するための学部横断的な新規リソースづくりのための体制構築が必要だろうと思います。そのためには、各学科の現行の教育コンテンツの特徴をアピールするだけでは不足するのであり(どの大学も同じような努力を払うでしょうから)、それを包含しつつ、他大学との違いを一目でわかるようにする、建学の精神に基づいた学院の理念をどういう言葉でアピールしていくかが問われます。どんなに教育コンテンツが似ていても最後まで同一にならないのは建学の精神という歴史的に変えられない「オーセンティシティ」だからです。そのためには、創立100周年の際に設定した、「次の100年」を見据えた超長期ビジョンの作成過程に立ち戻り、そこで行われた建学精神の掘り起こしをなぞりなおすことから始め、その後の十数年で変化した外部環境を勘案して、そこに何を加えるべきかを検討することが求められます。
- ・現状の大学をめぐり厳しい状況及び本学の方向性について総合的に理解しました。
- ・方針の具体的な施策が示されていなかった。総論で終わっていた。

- ・文科省の方針を改めて確認する機会となりました。喫緊に生き残りをかけた改革が求められています。第二弾の全学FDとして、5年後に本学がどのような状況に置かれているか、様々な推計値をもとに考えることも有効なのではないかと思います。
- ・かねてから、レイトスペシャライゼーションや同時履修科目の絞り込みは、日本の大学のカリキュラム履修において、必要なものだと考えていたが、近年の学生の質の変容に伴い、一層、検討すべき事柄になってきたと感じる。クォーター制を導入せずとも、セメスター制のままで、～概論Ⅰ、～概論Ⅱなど、実質的に通念になっている科目を、週に2コマ開講（必ずしも連続開講する必要はない）にし、半期化することは可能だと考える。また、カリキュラムツリーがしっかりしていれば、全ての学生が同じような科目を履修し卒業するのではなく、比較的平易な科目を多く履修するもの、難易度の高い科目まで履修するものなど、学生の能力に応じた多様な履修パターンを提示できると考えている。そして、初年度における全学的な「リテラシー教育」の開発と全学共通教育科目での必修化が必要であると思った。
- ・プレゼンテーションは近い将来の状況を明確にします。個人的にも学部も改善に向けて努力を続けます。
- ・文科省の推進する『我が国の「知の総和」向上の未来像』について、全体的によく理解することができた。
- ・規模の縮小＝無計画な人員削減であった場合は、学生支援の質の低下につながると思われる。「職員の高度化」とあるが、定期試験監督業務に対し、教育支援グループの課員は、監督に当たる我々が真剣に読み、おこなおうとしているマニュアルに書かれていることすらあいまいで良いと言う。例年おこなう定期試験ですら職員の能力低下が伺える。このような状況下で具体的に何ををもって「職員の高度化」をするのだろうと感じた。
- ・大学が置かれている現状と課題について理解することができました。
- ・少子化に伴う大学の定員充足率や今後の統廃合リスクについて、具体的なデータを交えて説明があり、大変現実的な課題だと感じました。特に女子大学の充足率の推移には衝撃を受けました。レイトスペシャライゼーションやクォーター制の導入など、他大学の取組事例にも触れていただき、自学での可能性を考えるきっかけになりました。
- ・大学淘汰の時代が急加速で迫ってきていることを実感します。トレードオフという単語を多く使用されておりましたが、まさに生き残りをかけるには、本来の学生教育充実を図りつつも文科省等への膨大な書類の作成をしていかなければならないのだと痛感しました。余裕やムダから生まれる知的好奇心が狭まりそうで残念な気がします。規模の適正化をどのように進めていくとお考えなのかが気になりました。
- ・授業の質の向上 学生のニーズにあった、学生の求める社会に出てからのニーズに合った教育の質の向上、そのためのカリキュラムの見直しが必要である。また、弾力的な対応ができるカリキュラムづくりが求められる。大学の適切な規模の検討は今後強く求められることがわかった。学科、専攻レベルで何ができるかを考えたい。地方創世につながる大学の取り組みを検討して、本学でできることを考えたい。
- ・高等教育の現状と課題を答申をもとに解説していただき、説得力のあるご講演でした。ありがとうございました。
- ・今後の大学入学者と女子大学をとりまく現状について
- ・現在の大妻女子大学をめぐる状況について知ることができました。
- ・今後の急速な少子化を見据えて大学としてどのような課題があり、そのようなお考えがあるのかがよく理解できました。
- ・日本の現状から本学の状況までエビデンスをもって再確認することが出来ました。
- ・ICU でレイト・スペシャライゼーションを検討し、導入された先生のお話を伺った時に、何でも見てやろう、何でもやろうとできている学生には、いい方法だと思いました。大妻の学生は意欲的に「何でもみたい」と思うような人は少ないという印象で、親や高校の先生に進められてなんとなく来たという人も割に多く、周りから見られる自分を創れていれば、学問はそこそこの出来でよいと思っているような人が多いように思います。しかし、そういう学生でも、授業のコメントの中で気づいたことを面白がってもっとやってみたいと言う人もいるので、いろいろやってみて、自分が何に最もひかれたかという観点から、自分で自分の学びを決めていくようなスタイルで自律的な学習を意識することによって、もっと意欲的になっていく伸びしろもあるようにも思います。大妻にも導入するのは、実はよい方法なのかもしれないと、本日、大妻の状況に関するお話を伺っていて思いました。
- ・大学が置かれた現状については理解できましたが、今後、どのような取り組みを計画しているのか、もう少し具体的にお話いただければ、と思いました。 女子大の将来を考える際に、資料18頁「多様な学生の受け入れ促進」にある留学生の受け入れや「社会人の学びの場」は必要と感じますが、非常勤講師としてどのように対応していくべきかをお示しいただきたいと感じました。
- ・大学の置かれている状況と認可の在り方について詳細なご説明に感銘を受けた。
- ・市川学長がご提案されていた通りなのですが、かねてから STEAM 教育の充実を図るためには、特にレイトスペシャライゼーションという考え方が重要であり、時流にも合致しており、学生たちの卒業後の人生にとっても有益なアプローチのひとつであろうと認識してきました。ただし、もしこれを本学で実際に運用するとすると、果たしてこれを前面に出してこれまで通り志願者は集まるのか…、4年間で専門領域の学びを習得することが可能なのか…、これまで以上に専門領域内での能力差が顕著になるのではないのか…、卒業後進路との整合性を上手く図ることが出来るのか… などといった懸念の包を強く抱いてしまいます。是非、今後も学長のお考えを実行するための具体的な方向性をお示し下さいますよう宜しくお願いします。
- ・予想以上に少子化のスピードが早く、文部科学省もようやく「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築」という答申を出すに至ったことがよく分かった。18歳人口だけに頼らない、多様な層の受け入れ（例）市民講座やリカレント教育など）にも積極的に取り組み始める必要性を改めて痛感しました。それによって大学のブランド力の向上が図れるのではないのでしょうか。

- ・大学学長が学生が主体的かつ自律的に学べる環境を構築するために行った講演に感謝しています。私は、本学が文科省との関係をより良くし、引き続き補助金を受けられるようになることを願っています。また、本学が信頼できるインスティテューショナル・リサーチ (IR) の基準を確立できることも望んでいます。さらに、学習者中心の教育という考え方を支持しています。私は長い間、ヨーロッパ大学協会 (EUA) が提唱するアクティブ・ラーニングの考え方を支持しており、その中では教員は情報を一方的に伝えるのではなく、学習を支援するファシリテーターとして、学生と継続的にコミュニケーションを取ることが重視されています。学長が大妻でクォーター制の導入を望んでいることも理解しています。私自身、大学時代にクォーター制で学びました。1 クォーターは 10 週間で構成されており、各クォーターでは少数の科目に集中することができ、1 科目につき週 2〜3 回の授業がありました。しかし、その授業の進度は非常に速く、学生は常に授業についていくことに不安を感じていました。大妻の学生たちが、クォーター制では授業についていくのが難しいと感じるのではないかと心配しています。
- ・学長先生の講演は分かりやすく、オンラインでしたが聞きやすいペースでお話くださったと思いました。貴重なお話しをありがとうございました。一番記憶に残ったのは、首都圏の女子大学の定員充足率の一覧表です。専門の心理学の領域しか知らなかったのも、〇〇大学の心理は学生確保に苦労しているらしいなど、業界内で噂にはなっていました。改めて一覧表で見ると噂以上に大変なことが分かりました。今のところ社会・臨床心理学専攻は定員確保を何とか出来ていますが、多摩キャンパスの立地でどれくらい現状を維持できるか、と考えると今まで以上に努力しなくてはならないと感じました。教育の質の向上に向けて何ができるのか、今後、10 年、20 年の先を見越した不断の改革が可能なのか、など考える機会になりました。資格が絡むためカリキュラムの改編はなかなか難しいのですが、心理学を学んだ学生のキャリア支援に繋がるような教育を目指したいと思いました。加えて大学院の臨床心理学専攻をさらに充実させることも高校生の志願者増に繋がると思いますので、大学院の良さをもっとアピールできれば良いだろうと考えました。いずれにしても、今我々が置かれている現状を認識する機会となり、今後の学部、大学院の教育の質向上を検討する時間となりました。
- ・今回の答申が「高等教育機関の経営規模縮小」を基調としてまとめられていることがよく理解できました。答申の内容には、随所に「両立不可能」と思えるような相反する要請が散見されると感じます。学長が指摘された「規模の適性化」と「アクセスの確保」のトレードオフの問題の他に、今後「認証制度の精緻化」が進められて受審前の事務作業が膨大になっていくことと、「研究環境の低下要因を除去するための業務負担の軽減」とは明らかに矛盾すると思います。このような一見して両立不可能と思える要求をあえて提示しているのは、これらの要求を満たせる大学だけに存続して欲しいという国のメッセージとも解釈できます。
- ・規模の縮小について、その動きをどの時点でどのくらいの規模の縮小をするのか、学部のこれからを考えるととても重要になってくると感じました。
- ・定員未充足の場合のペナルティーについて詳しく知ることが出来、今後広報と連携して学生募集をしていく必要性をより感じました。
- ・学長の市川先生が自ら数字データを示しつつ、教員全員と危機感を共有して下さり、本当にありがとうございました。授業を担当する者として、一層の工夫と改善を重ねる決意を固めた次第です。一つ、提案があります。本学の校訓は「恥を知れ」です。何が「恥ずかしい」と感じ、「恥」と思うかは、個々人によります。社会が多様化する中で、今後、学生と教員の価値観がズレる局面もあると思います。そこで「挑戦して思い通りの結果が出なかった」ことは、決して恥ずかしい事ではないと周知してみるのはいいかでしょうか？ 学ぶ意欲と何かを感じ取る感性は分野を問わず重要だと思います。長々失礼しました。
- ・高等教育機関をめぐる社会的状況や政策要請、本学でのこれまでの取組や今後の改善課題についてわかりやすくご説明いただき、ありがとうございました。
- ・大学の財務状況と首都圏女子大学の定員充足の比率、文科省の意向について、よくわかった。
- ・他学の定員充足率の低下状況が深刻であることが印象的だった。また定員未充足のペナルティーが大きいものであることを知ることができた。少子化の社会状況であっても、大学の質を高めることの重要性について理解できた。
- ・学生が 1 度に多くの科目を取りすぎていることは従来から懸念していた。これは制度的には仕方のないことであり、クォーター制を導入することでその解決策の一つになりうるということが分かった。しかし、学生の集中力の問題もあるので、2 コマ続きよりは 1 週間のうちの別日に 1 コマずつ(火曜 1 限と木曜 1 限など、時限を同じくして分かりやすくするなどの工夫は必要)の方が良いのではないと思う。レイトスペシャライゼーションは、やりたいことが明確でないことが多い近年の学生にとってはいいことだと思う。例えば、学部内にある学科の壁を取り払い、学部が提供する学問分野を何でも学べるようにするのも良いかもしれない。1, 2 年次は幅広く学び、3 年次からコース制で学ぶ分野を絞っていく。ただ、結果的に学生が専攻する分野に偏りが生じると恐れ、それによって教育スタッフのワークロードに不均衡が生じるという、運営上の懸念もある。
- ・大妻女子大学の置かれた状況と知の総和答申について、市川学長の考え方が理解できました。とても有意義な講演であり、今後、各学部各学科・専攻が入学定員を満たすために各教員が共有すべき基礎的な内容であったと感じています。ひとつ、残念だったのは、日本社会における女子大学および大妻女子大学の必要性についての言及がなかったことです。日常業務を実施していると、教職員が女子大学の今後について不安を抱いていることがわかります。この不安を払拭する発言があれば良かったと感じました。例えば、日本社会が男女平等社会となっていない現状では、男子学生がいない環境によって性別による役割分担意識が薄れ、女子学生が自由に自己表現をしたり、リーダーシップを発揮したりする機会が増え、ジェンダー平等の実現に貢献できる女子大学が必要である、などの言及があっても良かったのではない

いか、と考えています。女子大学は、大学入学希望者の約半数しかいないマーケットで戦わなくてはなりません。入学希望者を集めるために大妻女子大学の必要性を受験生や保護者に訴えることが入試施策においても重要ではないか、と考えています。教職員のモチベーションを向上させる意味でも、ぜひ、学長もその先頭に立っていただきたい、と考えています。今後ともよろしくお願いします。

- ・レイトスペシャライゼーションのお話が印象的でした。比較文化学部も、広く色々なことを学んでからコースにわかれていく。そういった学部の特徴をうまく広報していくとともに、よりそれが分かりやすいカリキュラムや学科行事を検討していきたいと思いました。
- ・目の前の授業、学生にばかり気を取られ、大所高所から授業を見直す良い機会となりました。
- ・18歳人口減の大きな影響を受ける時期を眼前にし、女子大の生き残りが厳しいなかで、今すべきことのさまざまな可能性をうかがったように思います。
- ・大学における研究力の強化という話題がありましたが、その中に質の高い研究環境づくりのために「形式的な会議などの見直し」という記載がありました。講師の学長先生がこのようにポイントアウトして下さったことは大変意義深いと思いました。見直せるところは多分にあると思います。
大妻では検討していないとのことでしたが、クォータ制についてご説明があり新しい知見に繋がりました。また言及がありませんでしたが、授業時間を100分間にし、授業回数を14回にするという展望はないでしょうか。他大学ではそうしている大学があるそうですね。先日偶然エレベーターで居合わせた学生たちがこの件を話題にしており、その学生たちは100分間授業に前向きの姿勢のようでした。今年のように猛暑と夏の長期化は今後も続くと言われているので、前学期を1週繰り上げて終了するだけでも相当の光熱費削減に繋がるのではないかと思いますし、また学生の様々な夏季活動参加を可能にするといい、個人的には賛成です。
- ・昨今、様々にささやかれている少子化の現状や大学運営の厳しさについて、具体的な数字を根拠にわかりやすく解説いただけたのでとてもよかったです。またこれまでの文科省の方針との違いについても市川先生のほうで率直にコメントいただいたことで理解が追いつきました。ありがとうございました。認証評価制度の改正にともなう負担増についてはやや心配しております。過去10年において、書類仕事が増えたことで教育そのものにかかる時間が削られているのを実感しており、質の高い教育の実現をしなくても、なかなか厳しいのが現状です。重要度が低くなった書類仕事は学内で順次廃止するなど、整理が必要な段階なのではと考えておりました。他大学には見られない大妻ならではの良さを大切にしながら、学生たちにとって魅力的な大学・大学院で在り続けるための努力を続けたいと思います。本日はありがとうございました。
- ・新学長の所信表明というか経営課題認識表明という点で、とてもいいインプット・勉強になりました。
組織の長が示した方針をぐっと進める推進力をもつためには、理事長はともかく学長については選挙で選んでその際に所信表明をした方がよいのかなと感じました。
日本が直面している課題を全部本学で取り組んでいたのでは、対応や戦略ではなくて反応になってしまうので、示されている課題のうちいずれを選び取って行くのかという路線の共有は必要かと思いました。
それにあたってはやはりトップを選挙で選ぶことは必要だろうと思いました（国公立でしか選挙はやっていないのでやらない、組合がないのでやらないというなら、他のことについても国公立や組合を持つ機関と同様の対応を追い求めるのは筋違いかなと思います。ガバナンスが違うので。）。
- ・依然として、女子大は危機的状況にあることが改めて認識できた。そのような中生き残りをかけ、最善の授業を学生に提供し、補助金の獲得に協力したいと思う。
- ・大学を取り巻く状況の厳しさがよく理解できた。
- ・あと10年と思いながらも急速に進む18歳人口の減少を大変詳しく理解することができたと思います。わかりやすいお話をありがとうございました。
- ・通りいっぺんの解説ではなく、市川学長の視点でのお話に好感がもてました。学長の考えを示すことは重要だと思います。
- ・レイトスペシャライゼーションは教学だけでなく入試施策としても有効な方法だと感じました。
- ・同時履修授業数の絞り込みとして、クォーター性の導入が挙げられていたが、現在2コマ続きの実習系授業担当者より、2コマ続きの授業だと学生の集中力が続かなくなっているという話も聞いている。本学の学生にとっての適正も考慮しながら、導入を検討していく必要があるように思う。今回の講話を聴いて、改めて、本学では必要とされている取り組みを実践してきているからこそ、入学定員の充足要件を満たしているのだということがわかった。今後、ますます大学への進学者数が減少していくことから、答申に示されていること以外の新しい視点での取り組みも行っていくことで、他の大学との差別化を図り学生を確保することにつながるのではないかと感じた。
- ・答申においてオンライン授業の推進が挙げられていましたが、ここ数年の本学の取り組みはこの流れに逆行していると思います。都心の大学では朝のラッシュ時の通学は学生にとって大きな負担となっていると思います。学生ファーストの立場から学生の満足度向上のためにも、20%程度のオンライン授業を推進するべきだと思います。
- ・市川先生のお考えを知ることができ、大変勉強になりました。どうもありがとうございました。
- ・新しく学長になられた先生の誠実なお人柄の伝わるご講演でした。答申の内容を詳細に知ることができました。クォーター制やレイトスペシャライゼーションは制度（働き方）的にも大きな改革になりますので、メリットだけでなくデメリットも、もっと具体的に知りたいと思いました。なお、配信で拝聴できるのはありがたいことですが、YouTubeでしばしば広告が入るのは集中をそがれます。

- ・文科省の答申を受けて、本学でどのような対策を取っていくのか、という視点がほぼなかったのが残念だと思いました。このような場では、文科省の答申の紹介よりも、将来構想に関するビジョン共有に力を入れるべきだと思います。
- ・今回の講演会で、国や本学を取り巻く状況を丁寧に説明いただき、いろいろな視点、気づきを得られる機会となりました。ご講演いただきありがとうございました。
- ・女子大を巡る状況の厳しさのみならず、急速に進む少子化問題についても良く理解できた。こうしたなかで、どう工夫して魅力ある大学にしていけるのか考えさせられた。近年の傾向として、女子大が人気がないというよりも、学ぶ内容によって大学を選ぶ傾向が強いらしいので、より各学部の魅力を「見える化」していく努力が大事であると実感した。
- ・海外から留学生の積極的な誘致、社会人教育の幅広い参与、特に社会人教育における遠隔通信・オンラインの展開を是非実施していただきたい。しかも「営利」目的を明確にして、展開していただきたい。
- ・大学の現状、問題点について整理してお話ししてくださりよく理解できました。具体的な対策を考えなければならないと痛感しました。
- ・非常勤講師のため、大学の経営や方針について知る機会がないので、興味深かったです。シラバスの書き方やアクティブラーニングの取り組みなどがなぜ変わったのか、理解できました。今後の授業の参考にさせていただきます。
- ・これまでわかっているようで、わからなかった施策などを上手くまとめて頂きました。本学の位置づけがわかり、今後の歩むべき方向性などが見えた気が致します。
- ・中央教育審議会「知の総和」答申の概要を知ることができ、今後の大学における教育・研究のあるべき姿を考えるよい機会となりました。今回のお話は多岐にわたっていたので、今後、さらに具体的なテーマに絞り学ぶ機会があると幸いです。
- ・本学の位置づけ
- ・学長の講演にもあったとおり、教育の「質」「規模」「アクセス」の間には、トレードオフが存在し、すべてを最大化することはできないと考えます。本学として、どのような大学を目指し、各項目の間でどのようにバランスを取り、他の大学との差別化を図るのかという点において明確なビジョンをもつことが重要だと思われます。過去 8 年間を振り返ると、カリキュラムツリーづくりや 3 ポリシー見直し、DS 学部設置後の教室不足問題への対応など、全学的な方針が示されないまま、半ば場当たりに学部学科に作業指示が降りてきた印象があります。あらたな体制のもとでは、各学部学科が目指すべき大学像を共有したうえで個別の課題に対応できるよう、大きなビジョンや方向性をわかりやすくお示しただけですと大変ありがたいです。
- ・定員充足率や大学を取り巻く状況はある程度理解できた。一方で多様化を進める将来の大学像という部分について特にイメージはできなかった。
- ・ご講演ありがとうございます。専門養成課程の非常勤（実務者）です。「学修者本位」の教育について専任教員とのディスカッションもしてみたいと感じました。
- ・日本の雇用形態がジョブ型に移行する中で、学生が主体的・自律的に学習するための環境構築は、たいへん重要であると感じました。特に女性は家庭環境や状況により離職しなければならないこともあるかと思いますが、そうした時にいつでも職場復帰できるよう、自らスキルアップに取り組む姿勢が重要であると思います。社会のニーズを分析し、それに合った教育の提供がこれからますます必要になると感じました。
- ・大学教育の現状と、今後の課題がとてもよくわかりました。お話にあった中で、他大学において①クォータ制、②通信教育（オンライン・オンデマンド授業）の経験がありますが、それぞれメリット・デメリットがあります。これらについては未検討（または一部実施？）とのことですが、今後の方向が気になります。
- ・授業期間の実施であり、今回もリアルタイムの参加が難しかった。教授会終了後の時間など、多くの教職員が参加できる時間帯での実施を希望します。内容については参考になることも多かった。いろいろな考え方を知ると、学科や学部問わず、全学的に進めていこうとすると難しいこともあるように思いました。免許や資格を出す学部はどうしても、専門科目を 1 年次から行わなければならない傾向があり、教養科目をじっくり学ぶというところとのせめぎあいがあるように思います。それでも、学生たちが卒業時に満足して卒業していけるような幅広い学びを保障していくことはとても重要だと思います。学長が言われているように、すでに多くの資源がある大学だと思っていますので、他の大学に学ぶことも多いですが、いまある資源を有効に機能させ、実質的な効果を図る必要を感じました。
- ・急速な少子化の中、最後のスライドにあった大学規模の縮小は迅速、且つ計画的に考えていくべきだと思います。また、広報活動の充実に関しても、重要だと思います。在学生に聞いてみると、大学に入った後に食物学科の良さを感じることがあり、入学前の高校生にも、もっと伝えるべきと言ってくれます。広報活動に関しては、最重要事項として学院全体で取り組むべきだと思います。
- ・今回の講演を通じて、大学院の学修者数が減少していく中で、質の高い教育をどう維持、向上させるかという課題を改めて意識しました。「同時履修科目の絞り込み」や「レイトスペシャライゼーション」の促進は、学びの進め方を見直す試みとして印象に残りました。かつての一般教養とは異なる視点からの制度設計であり、今後の動向に注目したいと思います。
- ・政府の考え方、大学の考え方、現場の立場、学生の求める大学の姿が合致していい方向に進めたらいいなと思いつつ、難しいだろうなと思いました。また学生の主体性を向上させるのが目的でありながら、管理することも求められていてそれをうまくまとめるのは難しいなど、課題がたくさんあることを実感しました。（個人的な感想ですが、..）話題となっていた「レイトスペシャライゼーション」はコミュニケーション文化学科ですでに実施されその結果が出ていることであると感じ、今日のお話を伺えて、未来を見据えたときに安心できる点だなと思いました。

- ・少子化による今後の大学運営に関して改めて考えることができた。研究の質の向上は目指すけれど、定員充足を目指すということが非常に難しいと感じた。年々学生の学力の差も感じるようになり、「研究」という視点で捉えられる学生とそうではない学生に二分しているように感じる。レイトスペシャライゼーションは魅力は大きい資格取得などがあると単位数の関係で難しい場合もあるだろう。成績優秀者の表彰よりも、学費免除などのほうが良いという学生からの声もあるので、学費免除なども考えていっていただきたい。また募集広報などは教員が行う部分が所属によっても偏りがあると思う。研究者としての役割もあるので、研究時間の確保などもできるように役割や所属の偏りが無いようにしてもらいたい。
- ・国からの補助金についての具体的な説明（大妻の立ち位置）をいただきましてありがとうございました
- ・学生たちのキャリア意識に関するお話があったのが、日頃の授業内容と結びついて「価値ある授業」を実践できていると感じました。
- ・今後の18歳人口推移から予測される大学をとりまく社会の変化と影響について、また、中央教育審議会の答申の内容についてわかりやすく解説して頂き、現状と今後の課題について知ることが出来ました。
- ・社会情報学部では、多摩から千代田に移ったことで、定員割れの危機感が薄れてしまっているように感じられる。カリキュラム改革をしても効果が出ないとか、失敗するリスクを恐れて、何もやらないうちに改革のタイミングを失ってしまうことを恐れます。本日の講演で、ハッキリとダウンサイジングに向けた準備が語られる一方で、補助金獲得に向けた高い目標を設定したことは、学長の決意が伝わって大変よかったと思います。クォーター制は、教員の研究時間確保のためにも有効化と思います。
- ・大変充実した内容で勉強になりました。ありがとうございました。
- ・今回の全学FD講演会を通じ、本学を取り巻く環境と課題について、あらためて認識をいたしました。中でも、学生ファーストの教育の提供、社会のニーズに合った教育の提供の重要性をあらためて認識しました。今後の教育活動に励みたく思います。
- ・全体の動向については、ある程度承知していましたが、改めて情報を得ることができて有り難かったです。ただ、大妻女子大学全体としての今後の方向性についても、何かご示唆いただけると、全員の課題意識が明確になったのではと思うところもあります。
- ・大学の定員割れには、厳しいペナリティーがあり、定員充足率に応じて補助金の減額や修学支援制度機関からの除外などがあることが分かりました。また、特に女子大が、首都圏の女子大であっても、11位以下では定員割れを起こしている状況であることも知ることができました。そのような厳しい状況の中でも、大妻女子大は、定員を満し、補助金も交付され、多分野にわたる学部を有して、経営上も安定していることが分かりましたところも、今回の講演会の録画を視聴して良かったと思いました。
- ・大学をめぐる状況について、女子大の視点から具体的に理解することができ、参考になりました。
- ・初等中等教育における、通学困難な児童・生徒さん達に対応する通信教育の拡充を、高等教育に対しても要求している現実が明らかになった感があります。言っても仕方ないことですが、今までの高等教育機関認可拡充の責任を、ある意味、現状の高等教育機関に担わせていくような政策にも違和感を覚えています。とはいえ、本学の教育・研究の質と量の維持を進めるには、質と量のトレードオフ関係があるにしろ、全体的な底上げしか方策が無いとも考えます。どのように効率よく進めるかは、戦略的なアプローチが必須と考えますが、高等教育界における本学の位置が明確になったことと、底上げに必要な目標が定められたことでは、とても有意義な講演会でした。私に関与している日本図書館協会の改革においては、本学の今後のアプローチよりさらに困難な道がありますが、その経験も糧に、貢献できるように努力いたします。ご講演、本当にありがとうございました。
- ・国の方針についてきちんと理解はしておらず、他の誰かが話している断片的な情報をなんとなく摂取しているような状況でしたが、今回のように全体をかみ砕いて説明して下さったことで、その内容がわかり、良かったです。
- ・大学が現在置かれている状況について数字やグラフも交え具体的に説明していただき、良かった。わかりやすかった。改めて現状を認識することができた。女子大学なので、女性のスタッフも参加するともっと良かったのではないだろうか。
- ・社会における大学の現状、本学のポジション、目指すべき所がよく理解できました。体験を含めた授業内容を実施しているつもりですが、さらに、主体的・自立的な学修に繋がる授業や内容になるよう工夫を凝らしていきたいと思いました。対面で参加出来なかったのが残念でした。このような場を設けて、教員の認識をより高めていくことの重要性を一層感じました。
- ・大学に対して、ここまで文科省の支配が進んでいるとは知らなかった。実際、今日市川学長のお話を聞いて意義深かった。大学の独立性などもはや存在しないのか、と愕然としてしまった。「質」という曖昧な名称で大学の存在意義を文科省に測られてしまうというのは、統制教育としかいいようがない。もちろん、文科省の圧力に抗しながら、大学の独立性は守らねばならないと考えるが、具体的な案がすぐに浮かぶわけではない。ただ、女子大学であることを維持する方針であるならば、なぜ入学者を女子に限定するのか、女子とはトランスジェンダーも含むのか、含む場合はどういう問題が起こるかを前もって対策せねばならない。入学後に2年教養課程があつて、2年を終えて専攻を決めるという東大式の体制は学生にとって親切だと思われる。たいした目的を持たず入学するケースは少なくないからである。ただ、教養課程が2年もあるのは長すぎるのではないかという危惧や、一部の専攻に人気が集まった場合、選抜試験などを行うことになると、そこで落第した学生のモチベーションをいかに維持するかなどの問題が発生するように思う。
- ・学修者本位の教育の推進という点において、所属する短大教育の在り方（カリキュラム編成）を見直し、改善している

ところ。社会的な動向として短大の存在価値が問われている現状を鑑みると学内のみで解決できる課題は限定的であり、むしろ短大の存在価値を社会で見直すための方策が必要かと思います。一方で、短大は社会的に一定数のニーズがあることも実感しており、これまでの本学の短大運営の在り方を見直し、できるだけコンパクトな人的配置で効率的な運営ができるような経営戦略を考えていく必要性を感じているところです。学短が協働できる場所は協働し合理的な運営を行いつつ大妻学院としての将来を構想していくことが重要ではないかと考えます。

- ・女子大学としての厳しさ、現状がよく分かった。その中で、児童学科が小学校・中学校の理科免許を取れるコースをつくったことは、先見の明があったと思われます。学生や社会のニーズに合った教育を、これからも目指していこうと思いました。
- ・今後の組織改変について私見を述べたいと思います。全学的には定員を充足しているとはいえ、本学の経営状況と今後の少子化を考えると経営は一層厳しくなっていくと考えられます。中央教育審議会の答申には「規模の適正化」がありましたが、単なる縮小では負のスパイラルに入ってしまう可能性があります。一方で、本学の教育体制にはいくつか重複傾向の領域があります。例えば家政学部食物学科、ライフデザイン学科の自然科学系、及び社会情報学部環境情報学専攻の自然科学系は「食・健康・環境」をキーワードとしていながら複数の学部には跨っています。これを「食環境科学部（仮称）」のような形に改変することでスリム化が図れると思います。また、家政学部ライフデザイン学科の建築系と社会情報学部環境情報学専攻の建築系は「建築インテリアデザイン学部（仮称）」のような形に再編することが可能ではないかと思っています。本学には純粋な理科系の学部がなく、理科系の女子高校生の進学先候補としてそもそも本学が選択肢に入っていない可能性があります。「食環境科学部」や「建築インテリアデザイン学部」の創設は、従来本学を進学先候補として考えていなかった理科系の女子高校生の興味関心を惹く強力な学部となると思います。ただし、組織名称だけ変更してもあまり意味はなく、理科系学部を創設するなら実験室、培養室、分析室、製図室、分析機器、顕微鏡、製図用具などは勿論、それらを使いこなす教員も揃える必要があるため設備投資が必要になります。予算の確保のためには食や環境（グリーン）分野における文科省の大学・高専機能強化支援事業の利用は重要だと思います。また、収入アップのためには寄付金をより多く集めることや、大学施設を学外の学会等に貸し出して賃貸料を得ることに積極的にする必要があります。生涯教育の重要性から社会人のリカレント教育を充実させることも、教育的だけでなく経営的にも有効だと思います。上記の再編学部では栄養士・管理栄養士、中高教員免許（理科）、二級建築士受験資格などの資格取得をPRし、資格・就職に強い大妻女子大学をアピールすることも重要でしょう。将来的には、資格に強いという意味で看護系や薬学系の学部もあると良いと思いますが、これらは母体となりうる学部学科が本学にはありません。看護系や薬学系の単科大学との合併も検討の可能性はあるのではないかと考えています。
- ・中央教育審議会の答申について今回の講演で知り、文科省のページから資料やビデオを見て確認しました。国としては今後、いろいろな改革を進める上での指針となるようですが、本学との関連性を講演でご説明いただき、最後には本学の課題と絡めた直近の方針も示されていたので、よかったと思います。一方で、本題の「知の総和」に対する本学の役割についても課題として挙げていただくとよかったかなと思いました。
- ・大学の普遍的な使命は、社会の変化に対応できる有為な人材の育成に他なりません。人それぞれが持つ知識やスキルの質を高めながら、より多くの人が学びや成長にアクセスできる環境を作ることで、社会全体の活力を引き出せると確信します。「知の総和」に向けて、大学は学生一人ひとりの資質や能力を最大限に高め、教育研究の質を向上させる必要があります。本講演を通して、とくに教育研究（文理横断・融合教育、デジタル、国際競争）及び学生へ支援（学生の多様性・流動性の向上）の観点に注目しました。学びの質を高めるための教育内容・方法としては、学生が主体的・自律的に学修するための環境構築が重要であり、地理的・社会経済的な観点からのアクセス確保によって高等教育の機会均等の実現を図ること、具体的にはオンライン教育の推進が挙げられます。また加速するグローバル化と国際競争力を背景に、ダイバーシティ&インクルージョンの推進も欠かせません。ヒューマンキャピタルが多様であれば、企業はより創造的で生産的になるように、大学においても然りです。留学生や社会人など多様な属性を持つ学生の確保は、キャンパス内に新たな価値観やイノベーションをもたらす、大学のパフォーマンス向上につながると思われます。
- ・大学という機関が置かれた状況が理解できた。
- ・少子社会、学生数の減少に向けて、国および大学の基本的な方針や考え方を理解することができた。高等教育を取り巻く厳しい環境をふまえ、一非常勤講師としての立場ではあるものの、授業改善や学生の質の向上のための努力を続けていきたいと思いました。貴重なお話を有り難うございました。
- ・少子化により入学者の減少が本格化するであろうことはわかっていますが、国の補助金に対する規定が非常に細かくて厳格であることを今回初めて知りました。学生ファーストとおっしゃっていましたが、学生に対しては、大人として接するというよりは、優しく、とにかく優しく、学生を指導することが求められているのかなと思いました。
- ・大学がおかれている経営環境について、学長からわかりやすくご説明があり、現在の女子大における本学のポジションについて確認ができました。自分の立場、役割において何をすべきかを考え、本日の課題に資するように今後の教育活動・校務に取り組みたいと思います。また、研究活動の一般の方々への発信も大学の広報活において、重要であると再認識できました。できるところから、学内の教職員の皆様と協力しながら取り組みたいと思います。長い時間のご講演をありがとうございました。
- ・18歳人口の急激な減少について、データに基づいてのご講演、大変興味深く拝聴しました。切実に考えるべきテーマだと感じました。
- ・OCの展開、広報用の模擬授業などで、各学部・学科の特色をより活かした形の内容にし、大学の魅力を上げる事などきめ細やかな自由度の広さが、学修予定者への大きな魅力となるように感じます。また、レイト・スペシャライゼーシ

ョンと資格認定カリキュラムにおいては、その整合性を十分に吟味しながら、柔軟な対応が求められるように思います。これらの組織的な柔軟性が有機的に作用することによって、学修予定者の興味関心を引く良い風が吹くように感じました。論理的な話でいうと、一般システム理論の応用により、大学の組織体と入学志願者へのシンクロ・同位体としての波及により、厳しい状況下での生き残りに対して、ポジティブに弾力的に立ち向かえる効果が見込める事がその根拠です。そういった心構えで、今後もFD活動、多摩キャンパスの活性化を下支えしていきたいと思います。ご講演、ありがとうございました。

- ・「知の総和」向上に関する政策目的と重視すべき観点について整理できた点が良かった。
- ・答申の内容について、学長のお立場からのお考えを知る機会となり有意義でした。「知の総和」という切り口で、高等教育機関の整理統合が進められる状況について理解が深まり、取り組むべき課題もみえたように思いました。
- ・データと事例を根拠にとってもわかりやすい講演会でした。
- ・教育研究の質の更なる高度化が求められていることが理解でき、教員としての責任を再認識した。
- ・学長先生自らが求められていることと貴学の状況とを合わせてご説明された点が非常に興味深く、理解が深まりました。
- ・特に最近の大学事情や高等教育が目指すべき姿について、改めて考えさせられる機会になった。多様な学生が入学してくる中で、その学生が社会人になることを踏まえてどんな教育が求められるのか、また教員としてもどんな教育をしていきたいのかということを考えていくことが必要な時期であるように感じている。今後の教育活動や研究活動について再度見直しをしていきたい。
- ・高等教育への「アクセス」確保の中で地域にとって真に必要な一定の質が担保された教育機関への支援というのは、非常に重要な視点に思えた。東京にあると地域性を意識しづらいが、少子高齢化がさらに進むと「身近さ」が物事を決める大きな要因になると思われる。それは教育にも当てはまるのではないだろうか。
- ・少子化の問題により、毎年90校消滅していることには驚きました。「知の総和」の向上が大事というのも、今回、話を聞き、関心致しました。
- ・現在日本が経験している劇的な人口構造の変化を考慮すると、大学への広範な影響を考察することは極めて重要である。そこには危険性と同様に機会も存在することが明らかとなった。教育者は多様な観点からこれらの問題を把握し、今後の政策を検討する必要がある。今回の講演は、関連する多くの重要な課題を提示する点で、非常に有意義なものであった。
- ・女子大が厳しい状況であるという話がここ数年でいくつかの報道機関から流れてきて、不安に感じていました。具体的なお話を伺うことが出来て良かったです。
- ・講演のなかでもあった入学者・在学生の量だけではなく、入学者・在学生の質（の確保）という言葉が印象的でした。年々学力の低下がみられるなかで教育の質の向上という点でも、授業コマ数の見直し等も含めた、教員の研究時間の確保がなにより必要不可欠だと思いました。
- ・学院の経営収支が赤字であることについて、その詳細を知りたい。伊藤学長の時代に赤字になってしまったことの原因を、より詳細に知りたい。
- ・答申の概要説明をいただき、参考になった。
- ・大変丁寧でわかりやすく説明していただき、本学のおかれている現状と今後の展望がよく理解できました。ともすれば定員未充足をつぶそうとする動きのなか、定員を充足していくためにより努力していかなければならないと感じた（大学内、学部内の温度差はあるが）。レイトスペシャライゼーションのお話も興味深かった。現状の学生の育成だけでなく、大人の学び直し（リスキリング）についても検討いただけたといいのではと思う。
- ・学生の自律的な学習環境の構築について、大学図書館の活用が不足しているように感じています。授業やゼミで活用を推進していますが、全学的に取り組みを広げても良いように思います。
- ・学長より、中央教育審議会の答申の概要について分かりやすい説明がございましたので大卒、理解することができました。少子化による18歳人口の減少に起因する私立大学が課せられている課題は多いことが分かりました。また、大妻女子大学のこれまでの取り組みと今後の方向性、具体的な対策と6つの検討課題についても理解することができました。
- ・高等教育の少子化への対応が10年しか猶予のない中、より学生にとって満足のいく授業の必要性を改めて認識しました。1つの授業での受講者の減少も見込める中、より学生に評価され、かつ社会のニーズに応える授業とは何かを模索する必要性も認識しました。学生の学修時間確保のために、授業内容と社会とのつながりを自分から調べるように呼びかけましたが、それをもっと実効性のある取り組みにしたいと考えております。
- ・今後の大学運営や経営に関して示唆に富む内容で満足しています。
- ・文科省の答申の必要な部分を要約して、わかりやすく示していただいたこと、本学の実施済みとこれから取り組まないといけないことの明確化、女子大の中での本学のポジショニング、他大学の改革内容なども俯瞰して見られたので良かったです。ありがとうございました。
- ・さまざまな視点（学生数、コストなど）から現状と課題を知ることができました。レイトスペシャライゼーションの是非、メリットやデメリットなどについてさらに深く、意見交換する場があればいいと感じました。
- ・レイトスペシャライゼーションについて、初めて知りました。入学後に一定期間将来について考える時間ができ、とてもよい仕組みだとおもいました。オープンキャンパスでいかにして、学部学科の魅力を伝えるか改めて大切であると思いました。長時間にわたるご講演ありがとうございました。

- ・私大特に女子大を取り巻く環境や、厳しい環境の中での本学の取り組みについて理解を深めることができました。今後高等教育に期待されることや支援のあり方・方向性について大きな示唆が得られ、これからの教育活動に従事する際に活かしていきたいと思います。
- ・現状を把握するとともに、知の総和について理解を深めることができました。ありがとうございました。今後の課題として挙げられていましたクォータ制度について意見を述べさせていただきます。クォータ制は、数年前に多く導入されたと認識しておりますが、セメスタ制に戻した大学が多いため導入率が低いと思われます。前任校においても、クォータ制が導入されましたが、数年でセメスタ制に戻しました。資格取得学科でも時間割作成は可能でしたが、2コマ続き、または週に2回の時間割になることによって、科目によっては効果がありましたが、課題が集中することによる学生の疲弊や集中力の低下が見受けられました。また教員の授業準備の負担も増大しました。以上のことから、クォータ制度の導入には反対いたします。
- ・本学をどのようにしていくのか基本的な考えを聞くことができてよかったです。補助金のしくみなども有意義でした。
- ・日々の授業をどのように変えていくかというよりも、中長期的な視点での大学（・学部・学科）運営をどのように考えるのかについてのご講演だったと思う。やるべきことは明確であるわけで、引き続き、学科の魅力や個性を強調し発信していくことに力を入れたい。
- ・今回は大学の経営に関するお話が多かったので、授業に関して参考となる情報がそれほどあったわけではありませんが、今後の大学教育の役割やあり方などを考えるよい機会になりました。
- ・女子大学が置かれる厳しい状況が、他大学との比較だけでなく文部科学省との関係でも理解できました。同程度の定員充足率の大学でも共学化を決めているところに、各大学の切迫感が伝わってきます。また大学での学びやすさの確保が重要だと感じました。自治体などと連携しながら、電車が遅延した場合の情報共有や代わりになる交通手段の確保は、学生の学びという観点でも重要だと感じます。
- ・本務校の期末試験の関係で当日参加ができなかったのが、とても残念である。このような大学教員の意識を高めるを通して、今後も知見を深めていきたい。
- ・少子化により、大学が大変厳しい状況にあることを再認識致しました。データサイエンス学部や人間共生学部等、社会のニーズに対応した学部の新設や学修体系の改善等により、大妻女子大学がより社会に必要とされる教育機関となるべく取り組まれていることに、改めて共感致しました。
- ・答申の内容がよく分かった。
- ・知の総和＝人数×能力 という数式には、笑ってしまった。能力は、どのように計量化するのか。そもそも、知は、数量化可能な概念なのか。総人口に対する進学率の割合が、年々増大する以上、その全体的能力が低下するのは、必然ではないか。知の向上を掲げるのは結構だが、それは、統計的に矛盾する目標ではないか。
- ・特に印象に残ったのは、「少子化により毎年大学90校が消滅」のスライドでした。大学の存在の意義を伝える重要性を改めて感じました。
- ・女子の高等教育の意義、私立大学の建学の精神の時代に合わせた解釈など、考えなければいけないことは多々あると感じた。
- ・変革することが必要であることがよくわかりました。補助金獲得には、大学の運営への協力が必要であることも理解しました。
- ・学生ファーストの教育は言うまでもなく、レイトスペシャライゼーションの促進及びそのための定員管理制度の弾力化について、今後の課題であると理解しました。
- ・とても参考になりました
- ・冒頭では首都圏における主要な女子大の定員充足率等の概要を知ることができ、有意義でした。ありがとうございました。
- ・「知の総和」答申について全体像を把握することができ、大変勉強になりました。答申の内容について「数×能力」という視点が出てきましたが、その具体的な内容の検討が重要であるように感じました。「数」を確保する上では、入学者数に直結する18歳以下の学生はもちろんのこと、大学教育に対する関心が薄い層を含めた地域の人々に対しても、大学での学び＝得られる「能力」がどのようなものであるか継続して発信し、大学の存在意義を示し続けることが重要かと思います。
- ・入試倍率も含めて厳しい経営環境であることが分かりました。
- ・大妻を取り巻く現場や、大学に求められている運営方針などを知ることができ良かったです。ありがとうございました。
- ・本学も含め大学の置かれている現状についてとその対策について、知の総和答申の内容をご説明いただいた上で本学の今後の取り組みや方向性のお話をいただき、自身もしっかりとその施策に貢献できるように日々過ごしていかなければならないと感じました。自身は授業の準備、学生への対応、その中での研究活動など日々の業務に追われていますが、その積み重ねが本学の発展の推進となるように、全体のことも意識しながら過ごしていきたいと思いました。わかりやすいご説明をありがとうございました。
- ・教育系の研究もしているのである程度は知った内容でしたが、本学の事情に合わせた解釈の助けになりました。一般的な内容よりも本学に特化した内容になればなるほどFD講演会としての価値が上がりそうに感じました。
- ・18歳人口の減少についての具体的な数値や、教学マネジメントの点数や目標値などを再確認できたことが良かったと感じた。また、安易な公立化や規模の適正化ではなく、独自の教育方針や大学運営を行っていくことの大切さがうかがえて良かった。

- ・私学での勤務は初年度であるため、現状ならびにこれからの方針について詳細に知ることができ、今後、どのように学内教育を充実させていくのか、また興味関心を持ってもらい入学してもらえるのかを検討していきたいと感じました。
- ・文科省の高等教育に関する改革方針を丁寧に解説してくださり、内容を知る良い機会となった。研究の質を改善するために、形式的な会議の削減に言及されていたが是非進めていただきたい。文科省が補助金を使ってチェックリストの対応を要請しているわけであるが、形式的な対応に終わらないように、社会や学生の要望を踏まえた検討実施が必要と思った。
- ・現在、大学が直面する問題についてわかりやすく説明していただき、大学改革について待ったなしの状況について自覚を持つ機会となりました。ありがとうございました。
- ・私学、特に本学の置かれた状況と課題、文部科学省の方針について、具体的に知ることができました。
- ・我が校が置かれている危機的状況について、理解してはいたが、あらためて具体的な情報をインプットいただいたことでしっかりと認識することができました。また、これから何を取り組んでいくのか具体的な方針を示していただいたおかげで、自らも具体的な行動に移せると感じております。
- ・18歳人口が減少し学部定員を減らさざるを得なくなる時代、大学院の充実が急務と考えます。学部からの進学率を上げることによって大学の収容人員の確保ができます。また、リカレント教育として社会人の再教育もできる研究科であれば、教育の質向上にもつながります。データサイエンス学部は、どの学部を卒業しても社会で役に立つ実学なので、上記の要件を満たす大学院かと考えます。
- ・「知の総和」について具体的にご説明をいただいた点が良かった。具体的に、人口減少と結び付けて今後、大学が進むべき方向を文科省として示していることと それに加えて本学が何をしようとしているのか、どうするのが具体的に理解できた。
- ・授業内容・方法を改善し向上させるための勉強になりました。
- ・答申の内容を紹介しつつ、学長先生のご見解についてもうかがうことができ、本学の今後の方向性について示唆があったように思いました。クォーター制の導入など、具体的な課題についてもご教示があり、考えることの多いご講演だったと受けとめます。
- ・日本における少子化の進行が大学に与える影響の予測と、それに対する政府の対応方針をふまえて、大妻女子大学としての対応の方向性を説明して頂き、概略を知ることができた。
- ・講演会「知の総和」を通じて特に印象に残ったのは、多様な背景を持つ学生たちの受け入れが、単なる国際化ではなく、知の多様性を高めることにもつながるという点です。外国人留学生の受け入れは、大学の定員確保という現実的な課題の解決にも貢献しますが、それ以上に、異なる視点が交わることで学びの質が深まるという意義があると思います。
- ・大学の学生募集定員が、高校卒業次生の大学進学希望者数を上回る時代が到来しました。一層魅力ある教育や研究を実践し、広く支持が得られるよう邁進しなければならないと改めて感じました。
- ・同一科目2時限続きは、かなり難しい学生がいるように思います。
- ・文科省などの外部の公開情報をベースにお話をされていたので、事前にそれらの公開情報を周知し、それに対する質問をあらかじめ集約し、それにたいして講師がコメントする、という形式にすればより講師のオリジナリティが発揮できると思います。
- ・大変な時期に学長となられ、ご苦勞絶えないことと思います。お身体に気を付けながらも、本学を良い方向へ導いてくださるよう、よろしく願いいたします。
- ・学長ご就任矢先のFD講演会ありがとうございました。ボリュームのある冊子を要約くださり、内容が少し理解できたと感じています。私は、学生募集広報に教員ももっと高校に向いて汗をかく方が良いと考えています。大妻は良い大学なのに、その中身が広く知られていない気がします。
- ・本学をめぐる現状が大変よく分かりました。参考になりました。
- ・いつもお世話になっております。なかなか詳しくは計り知れない部分の詳細を理解することができました。よい学びの機会となり感謝しております。今後ともよろしくお願いいたします。
- ・当日参加はできませんでしたが、動画で受講することができてたいへんありがたく存じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

以 上

(2) FD 講演会:生成 AI を授業にどう活かすか

講師:短期大学部 教授 豊田 雄彦 先生

データサイエンス学部 教授 広瀬 啓雄 先生

日時:令和7年12月18日(木)16:30~18:00 Zoomによるオンライン開催

令和7年度後期 全学FD講演会

生成AIを授業に どう活かすか

昨今の生成AIの急速な進化は大学教育にも大きな変革をもたらそうとしています。本講演では、その本質から、教育の質向上に向けた具体的な活用までを深く掘り下げます。大学教育での成功事例（レポート課題、AI支援と非AI支援の学習効果の比較等）、教育への生成AI活用（教材開発、学習支援、学生のAI活用等）、AIが知を広げ深める使い方等について考えていきます。

12/18

木曜日

16:30~18:00

Zoom開催

<主催>

大妻女子大学

ファカルティ・ディベロップメント委員会

<講師>

豊田 雄彦 先生
(短期大学部 教授)

広瀬 啓雄 先生
(データサイエンス学部
教授)

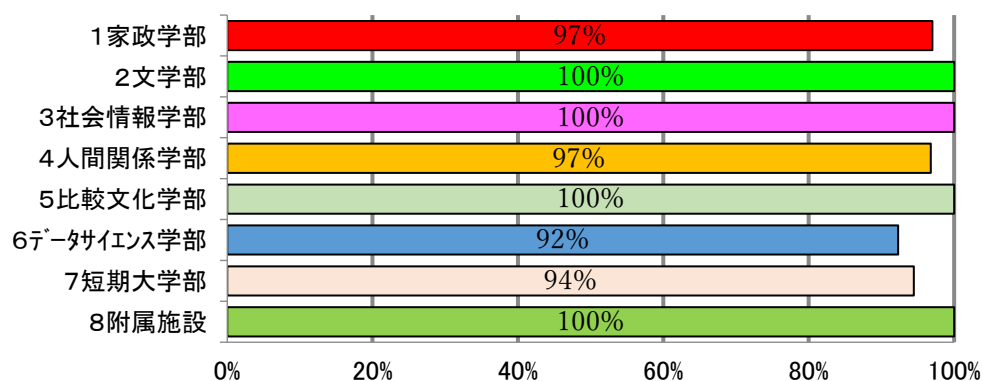
FD 講演会アンケート集計結果

- < テー マ > 生成 AI を授業にどう活かすか
 < 講 師 > 短期大学部 教授 豊田雄彦先生、データサイエンス学部 教授 広瀬啓雄先生
 < 開催方法 > Zoom によるオンライン開催 + 録画配信
 < 開催日時 > 令和 7 年 12 月 18 日 (木) 16:30~18:00
 < 録画配信 > 令和 7 年 12 月 23 日 (火) ~ 公開中
 < 回答期間 > ①令和 7 年 12 月 18 日 (木) ~ 令和 8 年 1 月 30 日 (金) 23:59
 ②令和 8 年 2 月 2 日 (月) ~ 2 月 13 日 (金) 23:59 (専任教員未回答者対象)
 ③令和 8 年 2 月 14 日 (土) ~ 2 月 19 日 (木) 23:59 (専任教員未回答者対象)
 < 未回答者 > 5 人
 (研 修 等 除 く)

【参加者(アンケート回答者)の所属】

所属	出席者			所属教員数
	Zoom	録画	合計	専任教員数
1 家政学部	23 人	42 人	65 人	67 人
2 文学部	8 人	31 人	39 人	39 人
3 社会情報学部	11 人	21 人	32 人	32 人
4 人間関係学部	9 人	21 人	30 人	31 人
5 比較文化学部	7 人	13 人	20 人	20 人
6 データサイエンス学部	6 人	6 人	12 人	13 人
7 短期大学部	11 人	6 人	17 人	18 人
8 附属施設	4 人	13 人	17 人	17 人
9 非常勤講師	26 人	0 人	26 人	
10 助手	0 人	15 人	15 人	
11 事務職員	1 人	0 人	1 人	
合 計	106 人	168 人	274 人	

【所属別参加率】(専任教員)

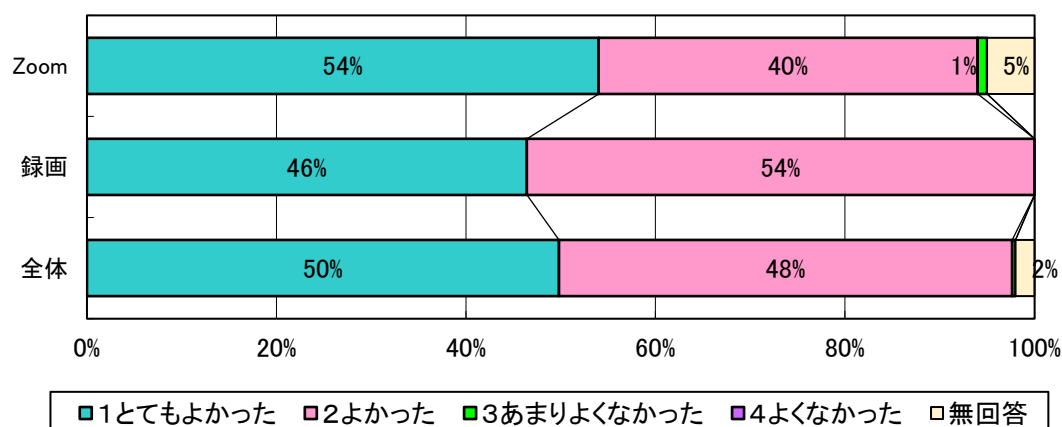


以下、提出されたアンケートの集計結果（アンケート回収総数 274 人分を対象）

問 1 講演会の内容、運営などについて当てはまるものを選択してください。

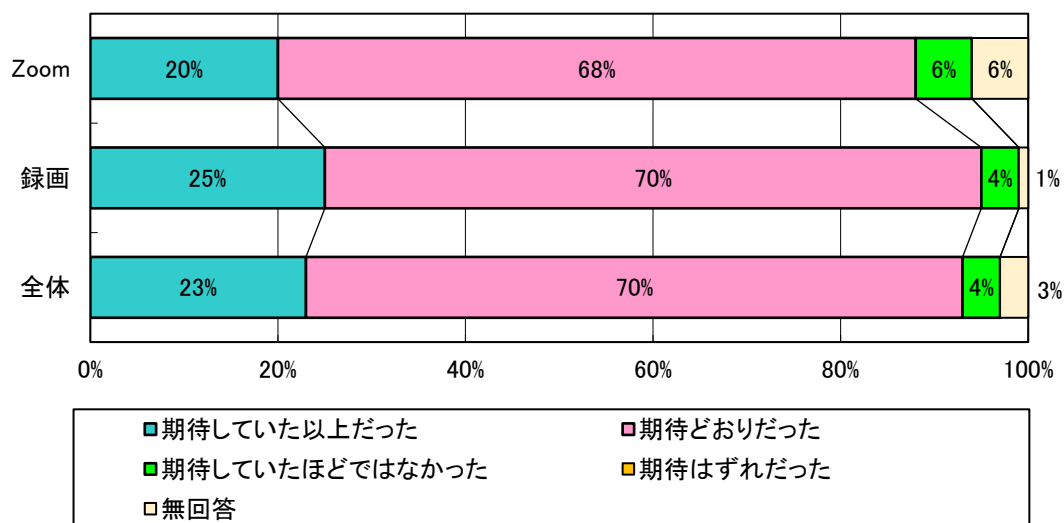
（１）講師について

選択肢	Zoom		録画		全体	
1 とてもよかった	57	(54%)	78	(46%)	135	(50%)
2 よかった	42	(40%)	90	(54%)	132	(48%)
3 あまりよくなかった	1	(1%)	0	(0%)	1	(0%)
4 よくなかった	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
無回答	6	(5%)	0	(0%)	6	(2%)



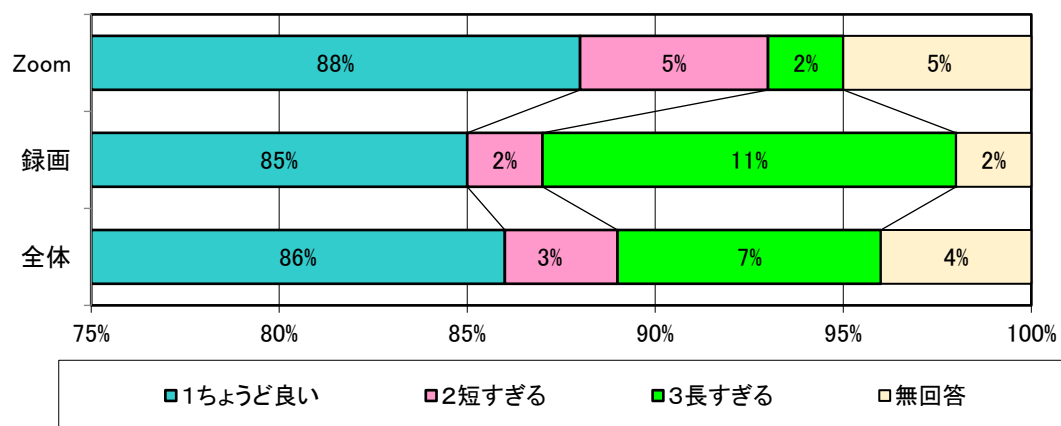
（２）内容について

選択肢	Zoom		録画		全体	
1 期待していた以上だった	21	(20%)	42	(25%)	63	(23%)
2 期待どおりだった	73	(68%)	118	(70%)	191	(70%)
3 期待していたほどではなかった	6	(6%)	6	(4%)	12	(4%)
4 期待はずれだった	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
無回答	6	(6%)	2	(1%)	8	(3%)



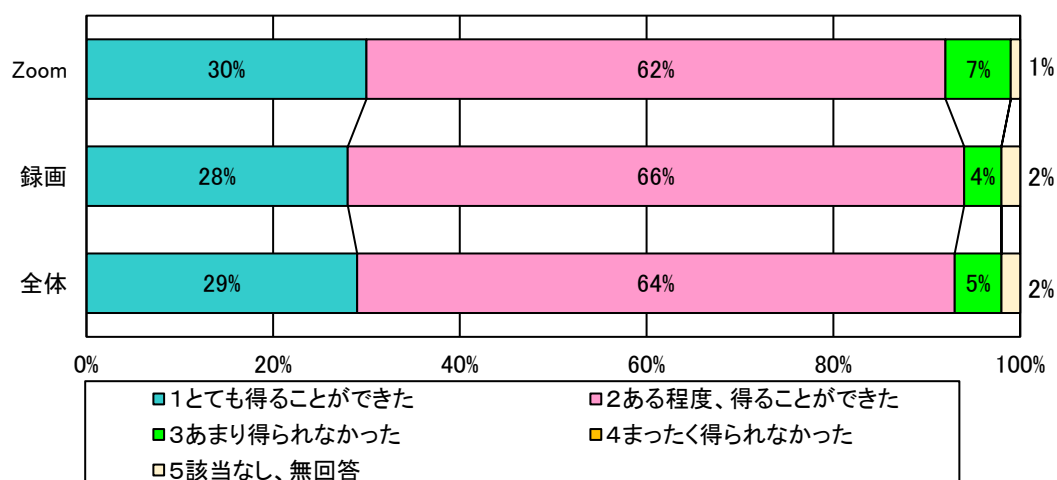
(3) 時間について

選択肢	Zoom	録画	全体
1 ちょうど良い	93 (88%)	143 (85%)	236 (86%)
2 短すぎる	5 (5%)	4 (2%)	9 (3%)
3 長すぎる	2 (2%)	17 (11%)	19 (7%)
無回答	6 (5%)	4 (2%)	10 (4%)



(4) 自身の授業内容および方法の参考となる情報・知見について

選択肢	Zoom	録画	全体
1 とても得ることができた	30 (30%)	48 (28%)	78 (29%)
2 ある程度、得ることができた	61 (62%)	111 (66%)	172 (64%)
3 あまり得られなかった	7 (7%)	6 (4%)	13 (5%)
4 まったく得られなかった	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
該当なし、無回答	1 (1%)	3 (2%)	4 (2%)



(5) 今後希望される講演テーマについて（複数選択可）

選択肢	全体
1 今回の講演テーマ関連	147 (28%)
2 国の高等教育・教育改革の動向	71 (13%)
3 本学の教育体制・教育改善の動向	69 (13%)
4 授業やゼミ・教材開発に関する事例紹介	77 (14%)
5 成績評価と効果的なフィードバック方法	65 (12%)
6 初年次学生の教育支援	70 (13%)
7 キャリア教育・進路指導	38 (7%)

[今回の講演テーマ関連]

- ・AI をうまく使いこなせない教員にとっての当面の課題は、学生による AI の不正使用をどのように防ぐのかということです。それに関する実践的な方法を教えていただく機会があると助かります。
- ・今回の講演内容を具体的な事例に落としたいものを知りたい。また、以前のテーマとのかけ合わせ（AI 活用×学習障害者対応）の講演も期待したい。
- ・今回の講演テーマについて、もっと深堀していただきたい。
- ・生成 AI で作成したパワーポイント、動画などを授業で使った事例があれば知りたいです。伝統的な授業よりも学生の理解がより早く進むこともあると思うので。
- ・実際に AI を活用した授業例を具体的に学び、その中で、何を学生の学びと考えるのか等の議論できるような機会があると良いように思います。
- ・スマホ世代（学生）とパソコン世代（教員）のギャップを感じています。レポート（論文）指導における学生指導に苦慮しています。
- ・今後、研究論文作成における AI の使用について踏み込んだ内容のお話をお聞きしたいと思います。
- ・AI の授業への利用や、AI 対策は切実な問題だと感じています。また同様の内容の講演を聴きたいです。
- ・生成 AI を「レポート作成」において活用する手法については、今回、かなりのことがわかった。次回以降では、「グループワーク」において活用する手法を知りたい。
- ・生成 AI の授業活用方法（教員側の注意点）や成績評価時に気をつけたいところなど、今回のテーマの第 2 弾を強く希望いたします。
- ・学生が生成 AI を使用する際の注意点を大学全体としてなるべく早く策定して頂きたいが、各教員も考慮しておくべき点について、より詳しく知りたい。
- ・AI と授業は今後も、沢山の事例を紹介してもらおうとよいと思います。

[国の高等教育・教育改革の動向]

- ・FD に当たるかどうか分かりませんが、全国の大学改組の事例を紹介してもらおうのもよいと思います。

[本学の教育体制・教育改善の動向]

- ・障害学生学習支援について、非常勤講師の先生方を含め、その実施において大学の方針が徹底されていない印象をもっています。制度があっても、実態がともなっていないと、どこかで大きな問題に直面してしまう可能性もあります。こうした問題について、あらためて現時点でのもっとも進んだ社会の実例などをご講演いただき、教員全体に周知・徹底した方がよいように思っています。

[キャリア教育・進路指導]

- ・学生が進路を決めていく過程でどのようにかわっていくことが可能か、どのようなコンテンツが大学にあると良いのか、また、卒業後の転職や人生の転機でのキャリア支援等、大学がどのようにかわっていったら良いか。事例などあれば。

[その他]

- ・高校の教育、高校の進学指導
- ・学生の新御さん（いわゆるモンスターペアレント）からの執拗なクレームに対する対応方法と大学側の体制（バックアップ）、公的な相談先などについて。
- ・高大連携の成功事例についてもお聞きしたいです。

問 2 今回の講演会で、お気づきの点、記憶に残った点、ご意見などございましたらご入力ください。

- ・生成 AI の授業導入について、どのようにすればよいのか具体的に分かったように思う。また、学生の能力向上させるためにも、教員が生成 AI と向き合い、教員自身が学ぶ必要があると感じた。

- ・AI を自身が利用する上で、大変勉強になりました。ただ、最近このような講演会が多く、しかも長時間なので通常業務に支障をきたしております。できればテキストでの配布をお考えいただけると助かります。
- ・生成AI についてあらためて認識を考えさせられました。学生は結構使用しているように見えます。これからレポートや卒論等の作成にますます利用をされると考えられますが、要は使用方法が大切であることをこの講演会をお聞きして再認識いたしました。
- ・授業に関わらない立場としては、今回のアンケートに答えるのは難しく、設問3と4については、正直「わからない」というのが答えです。生成AI の現状と課題について知ることができたのはよかったです。
- ・自分の知らない情報が多くあったので、資料を配布していただけると助かります。
- ・AI に関する基本的な知識から、現代的な問題まで、幅広いお話を伺うことができ、たいへん参考になりました。これを具体的な授業・研究にどのように生かしていけるのかが、今後の課題です。今回お話を伺って、さらに具体例など多くのことを伺いたくなりました。
- ・論文やレポートは、完成物よりもプロセスに対する評価が重要になるとの指摘が参考になった。生成AI に丸投げする学生は、論文指導に応じない学生と一致する傾向があるように感じる。つまりプロセス自体が存在しないが、現在の卒論の成績評価基準では、プロセスを評価対象にすることが難しい。今回はほぼ扱われなかったが、語学の授業も、対応が急務であると感じる。リーディング、ライティング、リスニングを、スマホの機能（翻訳、解答の生成、文字起こし）で乗り切ろうとする学生が増えている。数十人を相手に一斉に回答させるような授業は意味がなくなりつつある。
- ・まさに、現在授業で悩んでいるテーマでした。わたしも中間での小テストなどを入れています。小テストでは、マナバ上で授業中学習した大切なキーワードの選択、単語を書かせるなどをしていますが、選択はできますが、単語はほとんど書けません。手で文字を書かせることが必要だと感じています。
- ・専門的な「説明」の精度はていねいで、とても高かったと思いますが、受講者の担当部署・御専門・関心領域などによって、ほとんど意味のわからなかったかたも一定割合いたと容易に察せられます。難解語、「素人」には不要な説明の構成、構文がちよっと多く、最終盤の、実際の活動上に形となってみえてくるであろう具体例を軸に、展開いただいた方がよりためになったと思いました。
- ・改めて生成AI の使用について深く考えさせられました。特に授業での使用と学生のレポートや論文の作成について、今までは、利用に前向きながらも、具体的にどういったところにどうすればいいか戸惑うところも多かったが、運用方法を示していただいたために、大変勉強になりました。
- ・情報リテラシー教育の重要性を改めて考えました。活用法はたくさんあることは分っていますし、共存していくことになる中で、やはり基本が大切だと思います。
- ・学生たちがAI を使用することはもはや止められないという現状を、よく知ることができた。プロセスを見ることの重要性の指摘が、特に記憶に残った。但し、卒論指導等においては学生たちの個別指導を通して、学習及び作業過程のプロセスを十分把握することができるが、一般の講義におけるレポート等は、受講人数が多い場合はなかなか簡単ではない。他大学で非常勤講師として教えているが、AI 使用に関する大学のガイドラインを非常勤講師も含めて配信されている。本学においても情報関係の授業で、AI 使用に関する規定や倫理条項を学生に教えると共に、改めて本学のガイドラインをバージョンアップして、教員（専任及び非常勤）、教員への周知をはかることを希望したいと思う。
- ・レポートなどの成果物による学生評価が難しくなっていることを実感していたが、むしろ学生が成果を作り上げていくプロセスを評価すべきだという指摘は参考になりました。ただし、人数の多い授業でそれをやることは、教師の負担が大きすぎると感じました。
- ・お話を伺い、生成AI を「答えを得る道具」ではなく、「思考を促す支援ツール」として利用できればよいと思いました。学生の主体的な学びを損なうのではなく、問いの立て方や振り返りの質を高める活用を工夫したいと思います。
- ・教員はAI と協力し、学生もAI を正しく批判的に使いこなすといった中でのAI リテラシーが求められている段階にあることを改めて学ばせていただき、感謝しております。
- ・事例が多いお二方目のご発表が参考になった。
- ・これまで教師も学生も、生成AI について語ることを避けてきました。学生にはそれを使うことへの、そして教師にはそれをみとめてしまうことへの後ろめたさがあったからです。しかし講師の先生方の、もはや生成AI を使うことは避けられないという考えによって当然視できるように考えが切り替わりました。その上で、指導での使い方のアドバイスはとても参考になりました。
- ・1回では消化できないので、後で資料を見させていただきます。
- ・問題点と活用の方法が共有できた。
- ・AI との関わり方について、きちんと整理して落とし込むことができました。これからAI の利用は広がっていくことと思います。学生が利用することを前提に、課題をどのように設定していくべきか、また自身がどのように利用していくことができるのか、さまざまな学びの多い講演会でした。ありがとうございました。
- ・生成AI のヘビーユーザーが学生・教員双方で増える中、どのように使い分け、学びに生かすかが今後の課題だと感じました。
- ・何となくもやもやしていた生成AI に関して、概略をご説明いただき大変勉強になりました。このテーマについては、もう少し時間をかけて話を伺いたかったです。特に、授業での具体的な活用法や、プロンプトの作成などについて理解を深めていきたいと思います。
- ・タイトル通りの実践事例紹介はとても参考になりました。広瀬先生、豊田先生、本日はありがとうございました。大変

参考になる内容で充実した時間でした。豊田先生のオフラインでできるレポート評価のプログラム、ぜひ活用させていただきたいです。

- ・AI を利用した底上げ、スタートアップの推進力が当たり前になるのであれば、「良い」と思われるものもおしなべて統一される方向になるのかもしれないと思って伺っていました。興味深い内容でした。
- ・約 3 年程前から少しずつ、AI を授業などへ活用する途を探索したり、断続的に試行したりする機会をつくってきました。ただ直近の 3 か月ほどは進化のスピードが急激に速くなった実感もあって、次年度からは AI を主体的に取り入れた授業導線を年間を通じてデザインせざるを得ないだろう、でもどのような導線が効果的なのだろう... という迷いを感じておりました。今回、講師の先生方が様々なアプローチを試行錯誤しながら AI を積極的に導入している旨をお聞かせ頂き、様々な場で使ってみることを優先事項の一番とすべきなのだろうと理解しました。進化中の商品は完璧な扱いを目指さず、取り合えず使ってみることが必要だという基本的なことを思い出しました。タイムリーな内容のプレゼンテーションを実施して頂き有難うございました。
- ・広瀬教授のご意見について、私は、AI をすべての問題の答えとして考えるのではなく、あくまで一つの「支援ツール」として考えるべきだと賛同します。授業資料の作成に AI ツールを使うことについて、私は複雑な気持ちを持っています。一方で、AI ツールは時間と労力を大きく節約できる便利な存在だと感じています。しかし、AI に頼りすぎることはには注意が必要だとも思います。これは哲学的な考え方かもしれませんが、機械に仕事を任せすぎることは、人間らしさを形作る個人性を弱めてしまうのではないかと考えています。また、「もう学生に AI を使うなどとは言えない」という豊田教授のお話にも賛同しました。さらに、盗用検出ツールは実際にはあまり機能していないという点にも同意します。最終的に盗用を見抜くのは、人間の感覚や判断力だと思います。私は英語のアカデミック・ライティングを教えています。学生には、読み手の英語レベルを意識することが大切だと伝えています。そのレベルは CEFR の B1 です。もし学生が AI ツールを無意識に使って英語に翻訳すると、出力は多くの場合 CEFR の C2 レベルになります。それは、学生にとっても高すぎるだけでなく、口頭発表を聞く学生にとっても難しすぎます。そのため、学生は聞き手を意識し、CEFR B1 レベルに合わせて表現する必要があります。最後に、AI 技術に盲目的に頼るのではなく、授業の中で学生を導くための多くの教育基準を示してくださった点についても、豊田教授に感謝しています。
- ・生成 AI を教育のサポーターとして利用する、といった姿勢がとても印象に残りました。自分自身があまり使いこなせていないので、漠然とした不安を感じていたのですが、生成 AI の活用例などを知ることによって、大学生の教育に活用できる可能性が広がると思います。いい意味でたくさんのヒントを得られた講演でした。ありがとうございました。
- ・広瀬先生の「AI は考えることを奪う技術ではなく、考えるためのデータを提供してくれるツールである」という言葉がストンと落ちました。現代は、もはや「授業に AI を使うか否か」という局面ではなく、「どう使うか」を考えなければならない時代に入ってきているのだと実感させられました。
- ・生成 AI を使用することで、学生にとっても、教員にとってもメリットがあることがわかりました。いろいろなことに配慮しながら、今後は積極的に生成 AI の技術を授業に取り入れていきたいと思っています。
- ・お二人の講演の組み合わせが良かったと思います。学生の生成 AI 利用への対応も含めて、生成 AI にどう向き合うかは切実な問題ですが、あまり把握できていませんでした。今回、具体的な例も含めたお話を伺い、大変に参考になりました。
- ・学生が AI を使うことは前提とすべきというのは理解していたし、自分で日々 AI を使う中で、アイデア出しのようなクリエイティブな作業に非常に有益であることは分かっていました。今回の講演を聞いて、改めて AI を上手く使わせれば、これまで踏み込めなかった面での教育が可能になるという思いがしました。AI とのやり取りを学生がどう判断して選び、どういう追加質問をしてさらにやり取りし、内容を深めていくかが大事であり、そのようなプロセスが授業の中で実装できればとても AI は絶大な可能性を秘めたツールであると思います。授業の中でどう運用するかがカギだと思います（ここが最も難しいところであり、さらに深めていきたい部分です）。
- ・「時間が短すぎる」と 5・3 で回答したのですが、2 つのコンテンツで 1 時間半は短い、ということですので、その点は誤解なきようお願いいたします。年に 2 度しか FD 講演会は認められていないのでしょうか？教員としてどのように AI を利用するか、ということに感銘しました。豊富な実例、経験談が説得力がありました。
- ・自分がまだ生成 AI を検索時での利用程度で、文章作成には利用していなかったのが、学生がどの程度駆使しているかイメージが湧かなかった。ただうかがったお話しから、授業最後の自筆のリアクションペーパーも、その場でスマホでサッサッと生成 AI を利用してそれを書いているのかも？と、いままで意識のなかった疑念が出てきた。こちらも時代に対応できる知識は身につけ、有効な利用を検討したいと思った。
- ・AI の扱い方についてとても悩み困っていたので助けになるトピックを挙げていただきました。効率よく利便性があることは分かりましたが、しかし、学生個人を正確に評価しようとするなら、AI があるがゆえにかえって増える手間や時間があるように感じ、もどかしさを禁じえませんでした。レポートなのか、卒論なのかでも対応は大きく異なると感じます。来年度の卒論指導は今までは違う指示や方法を考えてみたいと思うきっかけになりました。
- ・お二人の講師の先生方のお話が、全体を通して大変興味深かったです。AI について、歴史をふくめ網羅的に現状を把握することにやや困難を覚えていたので、廣瀬先生にはそれらに対する明確な回答を頂けたように感じました。私自身、学生たちとの対話の中で、彼らの生活環境には AI が深く浸透していることを実感する場面がこの 1 年で飛躍的に増えていたので、AI の過信や依存の問題というお話と実によく符合するように思いました。人間に対するよりも深い友情や愛情を AI に対し抱いている学生も散見され、心理学者としてこうした問題について今後どう向き合うべきなのか、あれこれ考えていたところでしたので大変参考になりました。今回のお二人のご講義を通じて、教育場面での活用

はもとより、具体的にどのような点に注意しながらAI と付き合っていくと、人間が豊かに学び、暮らしていけるのかどうかのヒントを得られたように感じています。自分でも使ってみて、また考えてみたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

- 様々な分野に特化（対応）したAI ツールがあるようなので、使用そのものを制限することはナンセンスなんだろうと実感した。一方、いろんな取り組みをうかがっていると、人間がAI を活用すると言いつつ実際にはAI に寄っていつている感じも受けた。教員・学生の相互作用だけでなく学生間の相互作用が人間成長に与える可能性を考えると、女子大学の生き残り対策も兼ねて授業のさらなる少人数化や1 授業2 コマでの実施（集中演習）を取り入れることによって、AI をはじめとするツールとアナログ教育を併用するのもありなのかなと考えながら話をうかがっていました。
 - 学生、教員ともに生成AI を利用することが避けられないこと、そして生成AI をいかに活用すれば良いかについて学ぶ有意義な機会になりました。ご講演ありがとうございました。
 - これまでに、本学の過去のFD 講演会も含め、生成AI に関する研修会や講演を聴く機会が増えてきました。また、自分自身でも生成AI を使用してみる機会が出てきていたので、今回のご講演内容はとてもよく理解でき、授業への示唆も多く得ることができました。思っていた以上に、ニーズに合わせたたくさんの生成AI があることがわかったので、今後の授業に生かしていきたいと思います。
 - AI に向き合う姿勢が何より大切であることが再認識されました。
 - AI の利用方法について、利用方法を学生へどのように定義しておくか、という部分が非常にわかりやすく解説がなされ、今後の参考になりました。
 - タイムリーで大変参考になるテーマでした。録画視聴できることも有難いです。内容も盛り沢山でしたし、学期末で何度もゆっくり拝聴できるような時間もなくて、後日また視聴できたらありがたいと思うのですが、この録画は来月以降も随時視聴できるのでしょうか。
- ➡学内教職員サイト「FD 関連」からご覧ください。
- 生成AI 利用に関する注意事項はどこで配布されているでしょうか。また、利用に関するガイドラインを发出している大学もあると思います。成績評価にも関わる点なので、本学でも出していただけるとありがたいです。
 - 参考になりました。ありがとうございました。
 - 私自身も生成AI を用いて投稿論文の英文校正などを行っているが、それをどのように授業に活かせるかについては悩んでいるところだった。今回、専門家の先生および授業で実践されている先生方の話を聞いて、生成AI を用いた授業についての具体的なイメージを持つことができた。学生に対して、ガイドラインを示し、生成AI のメリットとデメリットを確認しながら、「学習目標に結びつけ」つつ、倫理的・適切な利用に関する教育こそが重要であることを学んだ。生成AI を用いる際のリスク（誤った情報を生成する可能性、著作権、公正性）などについてはきちんとしたガイドラインが必要であり、こうした問題があるという点を学生たちに周知する必要があると実感した。それにしても、都立AI については驚きであった。つまり、高校生の時点ですでに使いこなしている学生たちが東京都には多く存在しており、使い方についてははるかに習熟している可能性がある。こうした情報を知ることでもできてよかった。いかに活用して役立てていくか、手探りであるが、学生の学習スキル向上のために今回のFD 講演会で提示された教授法を活かしたいと強く思った。
 - ちょうど卒業研究提出の時期で、学生のAI 利用への対応に悩んでいたタイミングだったこともあり、大変参考になりました。また教員側の具体的な活用例が挙げられていたのも良かったです。今後の指導に反映したいと考えています。
 - 生成AI のレポートへの利用について悩んでいましたので、大変参考になりました。特に答えの評価よりプロセスを評価すること、思考力・創造力・倫理観を育てることの重要性を感じ、教師側も評価の基準を変えていく必要があることを理解しました。講師側も今後生成AI を利用していくことを考慮していこうと思いました。
 - 教員がAI を活用して授業資料を作成する、採点するといった発想がなかった。先生方も仰っていたが、そのようになると何のための大学なのか分からなくなってしまいそうです。過程が重要というお話しでしたが、その通りだと思う。一方、当面は豊田先生が提案されたAI を使わせない環境の維持も大切かと思います。
 - 講演の中でいくつかのアイディアを提案いただきましたが、非常に有効ですぐに実践できる、と思えるものは残念ながらありませんでした。とくに大人数の授業でどのようなAI 対策が可能なのか（あるいは難しいのか）が知りたかったです。
 - 豊田先生が生成AI をもちいたレポート採点・レポートフィードバックの仕組みをつくられており、特に刺激を受けました。実際の授業で使用された感想なども伺いたいと思いました。
 - 広瀬先生のお話は、全くの初心者には少しついていけない部分もあったが、これはこちらの問題かとも思う。お二人ともにそれぞれご担当の内容が決まっていたと思うが、豊田先生のお話は、教育の現場で生成AI に関しての専門知識がなくてもすぐに実施できるような具体性があったので理解が深まった。このテーマは、これから取り上げてほしい。
 - 避けられない問題だったので、勉強になりました。実際に使ってみることで課題も出てくるとは思いますが、まずは嫌がらずに活用してみるところから始めたいと思います。使い方だけでなく、講演者がおっしゃっていたように学習者の学びがどこにあるのかも理解していく必要があると感じました。
 - 今回のFD 研修では、生成AI を授業の中でどのように位置づけるかについて、技術面と教育実践の両面から考えるきっかけを得ました。生成AI が大量のデータやモデル構造に基づいて応答を生成しているという点を踏まえると、その出力をそのまま正解として扱うのではなく、教員・学生の双方が内容を評価しながら活用することの重要性を改めて意識しました。また、生成AI の利用を前提とする場合と、あえて利用しない環境を設定する場合のいずれもが、授業設計の選択肢として考えられる点は、自身の授業を振り返る上で参考になりました。

- ・教育に関する AI の良い面や課題を深く理解することができました。具体例な実践例を教えていただき、今まで AI に対し不安や課題を持つことが多かったのですが、使い方や示し方次第では効果的になることがわかりました。これから生成 AI を使用しないことにはならないと思うので、使える部分はうまく使いながら行っていきたいと思います。プロンプトの設定など、非常に参考になりました。
- ・学生がレポートを AI を使って作成しています。記述式の期末レポートなのに、皆、同じ論調になっており頭を痛めています。今回の講演会で、問いの出し方の工夫が必要であることを痛感しました。
- ・今回はお2人とも駆け足で話されていたようでしたので、お1人ずつの講演でも良かったように感じましたが、お二人から興味深いトピックを多く聞くことができたのは自分で調べるための良いきっかけとなりました。
- ・講義の資料（スライド）が頂けましたら幸いです。もっと良く理解できると思います。
- ・内容的にはおおむね承知していることではありましたが、ファカルティや大学全体で問題意識を共有し、どうやって効果的に活用していくかという検討のベースとして広く共有してほしい（いきたい）講演として、実施していただいていたことが良かったです。
- ・やはり今後の流れとしては、AI の使用を禁止するのではなく、AI をいかにして正しく／効果的に使わせるかを教育するのが自然なのだと再認識した。ただ、「AI を使ってズルをする」学生への対応はそれとは別に考えていく必要があり、また、ある程度大学全体でルールがあった方が良いのではないかと感じた。
- ・お二人の先生方どちらの講演も大変参考になりました。
- ・学生が AI を使用してレポートを提出してくることに頭を悩ませていたので今回の講義で対応のヒントを頂きました。ありがとうございました。
- ・近年は生成 AI を利用したと思われるレポートも散見され、今年の担当授業ではレポートを課すことをやめました。しかし、生成 AI の利用を前提としたレポート作成課題というのもありうるのだと知り、とても参考になりました。尤も、知識の整理・要約のような課題であれば生成 AI を使うと依存になってしまうので、やはり生成 AI の利用に向いている分野とそうでない分野があるのだということも理解できました。とても有意義でした。
- ・生成 AI の授業での使用方法
- ・生成 AI が登場してから様々な変化がある中、現時点でビジネス分野ではどのくらい導入が進んでいるのか。また、どのように活用されているかという点とともに、有効な活用法や留意点を知ることが出来ました。実際にプロンプトを使う際のポイントについても伺いましたが、早速実行してみたいと思います。大学での活用については、現状記述式のレポートについては人数の多い授業で頭を悩ませています。豊田先生から採点支援のローカル LLM のご紹介がありましたが、今後学内全体としてもどのような考え方に基づいて行っていくべきなのか、検討する必要性もあるかと思われます。
- ・コンピューターについて詳しくないので、お話の中でわからない用語があり、話が頭に入ってこなかった部分があったので少し残念でした。お話を聞き、やはり生成 AI を回避する方法としては、考えなどを授業中その場で手で書かせるということが一番なのかなと思いました。学生にとっても、生成 AI の活用は必要だとは思いますが、やはり、どこまで AI に頼っても良いのかというある程度の基準が示されると教師のほうも気が楽だなと思いました。
- ・具体的な内容で、授業設計を考える上で参考となる視点が多く勉強になりました。一方で、人文系授業では、AI の活用や制限は容易ではないという印象を得ました。レポートや卒業論文に際しての、学生向け AI 使用ガイドラインのような指針があると重宝します。
- ・プロンプトの語彙選び、AI を使用させる場合の学生への周知（自分の意見を記述させる大切さ）
- ・教員として、AI を活用しながら教育効果を上げていく方策を真剣に考えていかなくてはならないと思った。そのために、さらに AI に関する知識や情報を収集し、授業の改善につなげていきたい。
- ・授業への生成 AI の活用
- ・お話を伺い、AI が教育現場にもたらす可能性の大きさを改めて実感するとともに、その可能性を現実のものとしていくためには、私たち教育に携わる者が、まず主体的に、そして深くこの技術とその本質と対話していかなければならないという、強い使命感を覚えました。確かに、AI の教育活用に際しては、慎重に考え、対処すべき課題が山積していることも、具体的に挙げられた通りです。例えば、生成 AI による著作物の剽窃や不正利用の問題、学習者が AI への過度な依存により自らの思考力や創造性を育む機会を損なうリスク、また、アルゴリズムのバイアスが評価や学習支援に潜り込み、公平性を損なう可能性など、枚挙に暇がありません。さらに、学生の個人情報や学習データの取り扱いに関する倫理的・法的な課題も、極めて重大です。これらの問題は、決して軽視できるものではなく、むしろ教育の本質に関わる核心的な問いを私たちに投げかけていると言えるでしょう。しかし一方で、力強くお示しになったように、AI は、これらの課題に目を閉ざす理由ではなく、それらを注意深く管理・検討しながらも、前向きに取り組むべき「教育のパートナー」として登場したのです。具体的には、AI による個別最適化された学習支援は、従来の画一的な授業では対応が難しかった、学生一人ひとりの理解度や興味・関心に沿った学びの道筋を提供する可能性を秘めています。また、研究面では、文献の分析やデータ処理、仮説生成の補助など、研究者の創造的な作業を大幅に加速させるツールとして機能しつつあります。教育事務の効率化によって、教員が本来の教育的対話や教材研究に割く時間を確保するなど、間接的でありながら教育の質を高める貢献も見逃せません。重要なのは、AI を「敵」や「単なる便利なツール」と矮小化して捉えるのではなく、先生が強調されたように、「教育の在り方そのものを再構築するための触媒」として捉え直す視点ではないでしょうか。AI の登場は、「知識を伝達する」ことから、「知識を活用し、新たな価値を生み出す力を育む」ことへ、教育の重心を移行させる大きな契機となります。その転換期において、私たち教育専門職が果たすべき役

- 割は、むしろより重要かつ人間らしいものになると確信します。それは、AI には代替できない、批判的思考、倫理的判断、共感に基づく対話、学問への情熱を伝えることなどにほかなりません。
- ・生成 AI を、大学の授業に対するネガティブ要因ではなく、ポジティブな契機として活用するためのヒントが得られた。とくにレポート作成における活用（動画の 32 分台）など。
 - ・AI をいかにうまく利用して教育に活用していくのかを学んだ、生成 AI の仕組みからわかりやすく説明いただき、教育において活用する際の有効性と注意点なども含まれた講演で大変参考になりました。
 - ・学生がレポートや卒論を執筆する際に、生成 AI をどのような目的、範囲内で使用すればいいのかは、早急に方針を定めた方が良くと改めて痛感しました。その中で、今回の講演は大変有益なテーマ・内容であり、条件付きで使用を認めるメリットが再認識できました。ありがとうございました。ご講演、大変ありがとうございました。
 - ・豊田先生のこれからの教育は対面を重視し、平常点や口頭試問を活用するというご意見に賛同しました。
 - ・すでにレポートやコメントペーパー、発表で生成 AI に丸投げの学生たちが多数いるなか、多い人数の学生に一人ひとり向き合い、過程をみていくことはもうできない状況です。たとえば、インタビュー調査をしたとしてレポートや卒論を書きながら、インタビュー調査のデータを求めると出せない（すでに破棄したと主張）、文章として使っている単語や表現の意味を聞いてもわからないと答えるなど、一人二人の現状ではないです。大学全体で、学生向けに生成 AI で作成したレポート（文章）を自分のもののように提出するのは不正になり得るなど、生成 AI をめぐる倫理、方針、注意などをはっきりと出す必要があると思います。また、教員がどのように対応すればよいかの準拠点／基準点など、参考になりそうな指針も欲しいと思います。個別の教員が判断することももう手におえないほどの状況になっていると実感しています。
 - ・ここ 1 年で学生が生成 AI を使うことが当たり前のものになりましたが、課題などの手抜きのために使う者がほとんどです。今回紹介されたような使い方は、参考にはなりましたが、本学学生のほとんどにとっては程度が高すぎるもので、現場レベルで調整する必要があるかと思いました。ありがとうございました。
 - ・やはり課題の作り方が勉強になった。一斉に口頭試問をするという方法は思いつかなかったもので、今後の参考にしたい。
 - ・今回のテーマは、私自身がまさに現在進行形で現場にて直面する課題でもあり、ご登壇の先生方の詳細なお話が非常に興味深く参考になりました。こうした機会をいただきありがとうございました。
 - ・使用できる生成 AI の数の多さに驚いた。学生は 100% 使用するものだと考えて、授業の進め方や評価方法を今すぐに考える必要があることを痛感させられた。
 - ・（1）生成 AI の活用法を、具体例とともに、わかりやすく説明してほしかった。（2）前提概念の説明から、初めてほしかった。（たとえば、encoder/decoder の区別など）（3）都立 AI が 16 万人に活用されていることに驚いた。大妻に入学した都立高校卒業生は、本学に相当物がないことに驚くのではないかな。
 - ・生成 AI につきまして、基本的な内容から授業に活用できる内容まで、幅広い分野で新たな知識を得ることができました。ありがとうございました。
 - ・生成 AI のメカニズムについて：生成 AI → 入力したプロンプトの理解のメカニズム → 回答の生成メカニズム → 回答文章の生成メカニズムといった一連の流れを LLM やトランスフォーマーがどのように関与しているかももう少し詳しく説明して頂きたかったです。
 - ・生成 AI とどう付き合うかは継続して考えていかないといけないと改めて感じました。
 - ・とても参考になりました、ありがとうございました
 - ・生成 AI はこれまでの Office ソフトと同じような立ち位置になっていくのかなと思いました。なので授業としてもしっかり使い方をガイドしたうえで積極的に利用するのが良いかと思い、今回の内容を早速活かしたいと感じます。
 - ・プロンプトを紹介くださったので、自分でも活用しようと思います。学生にどのように生成 AI を使わせるのかについては、ある程度の共通認識を持てるとよいと考えており、継続して検討していただければと思います。
 - ・AI に対応した試験問題の作成について
 - ・学生が生成 AI 利用にあたっての注意事項やその評価についてとても良い知見を得られた
 - ・自分の知らない情報を色々と得ることができてよかった。まだまだ、多くの教員が生成 AI との付き合い方を試行錯誤していることも認識できた。
 - ・学生が生成 AI を使用してレポートを提出してくることにについての悩みは他の先生方からもお聞きする共通の課題であり、今回のテーマは大変タイムリーで有意義な講演であったと感謝いたします。中でも、豊田先生のお話は、まさにそのポイントに合致する内容であったと思います。質問はございません。今後は個人情報などもクリアしながら事務部門でも活用することが増えていくと思います。
 - ・参考になるご講演、まことにありがとうございます。ご講演の広瀬先生、豊田先生まことにありがとうございます。また、ご企画と運営にあたった皆様に感謝申し上げます。1、個々の教員が教育の中で生成 AI をどう活用するかはもちろんですが、広瀬先生が都立 AI のとりくみを挙げていたように、全学的なガイドライン類（教員向け、学生向け）を整備する必要があると感じました。大学全体としての制定をお願いできればと思います。2、両先生のご講演内容、メモを取ることができなかったもので、スライドを pdf かなにかで公開していただけると幸いです。広瀬先生のループリックやプロンプトの基本要素、豊田先生の生成 AI による教材開発支援で生成 AI の使い分けなど、参考にしたい内容が多かったので、ぜひお願いできれば幸いです。
 - ・生成系 AI のおおまかな考え方（仕組み）や企業での活用、教育現場での学生・教員それぞれの立場からの利用やその注意点を解説していただき、概略を把握できました。私自身、学生には生成系 AI をアシスタント的に活用するように

促しており、その方向性を続けつつも、どのように過度な依存を防ぐのか、仕組みづくりが求められると感じます。なお、(私自身の勉強不足に起因して)先生方が紹介された専門用語や考え方の前提などが分からず、解説を理解しきれない部分もありました。今後、自分自身でも生成系AIへの理解を深める必要があると実感しました。

- ・専門的な「説明」の精度はていねいで、とても高かったと思いますが、受講者の担当部署・御専門・関心領域などによって、ほとんど意味のわからなかったかたも一定割合いたと容易に察せられます。難解語、「素人」には不要な説明の構成、構文がちょっと多く、最終盤の、実際の活動上に形となってみえてくるであろう具体例を軸に、展開いただいた方がよりためになったと思いました。
- ・教育における生成AIの問題について二人の発表者から話を聞き、自分の経験や思っていたことを確認することができた。学習のプロセスを重視しつつ、教育に生成AIを取り入れることの重要性を理解した。生成AIの能力は日に日に高まっており、今後統制が効かないほどの化け物になるのではないかと、というのが、発表を聞いた感想である。私たちが日々感じていること以外の専門家による知見というものが出しにくい道具ではないかと思った。テストを作ってくれるAIなどについてもっと聞きたいと思いました。
- ・学生のAI利用についてのガイドラインが必要と感じました。
- ・生成AI利用に関する注意事項はどこで配布されているのでしょうか。また、利用に関するガイドラインを発出している大学もあると思います。成績評価にも関わる点なので、本学でも出していただけるとありがたいです。
- ・AIの使い方について参考にできた。一方で授業で使うにあたっては状況に応じてその方法を考える必要があると改めて感じた。学生も教師も、どんな状況で、どんな目的で、どのように使うか、を体験していくしかないことにならないと認識した。ためになる講義、ありがとうございました。
- ・今回のFD研修では、生成AIを授業の中でどのように位置づけるかについて、技術面と教育実践の両面から考えるきっかけを得ました。生成AIが大量のデータやモデル構造に基づいて応答を生成しているという点を踏まえると、その出力をそのまま正解として扱うのではなく、教員・学生の双方が内容を評価しながら活用することの重要性を改めて意識しました。また、生成AIの利用を前提とする場合と、あえて利用しない環境を設定する場合のいずれもが、授業設計の選択肢として考えられる点は、自身の授業を振り返る上で参考になりました。
- ・学生がレポートをAIを使って作成しています。記述式の期末レポートなのに、皆、同じ論調になっており頭を痛めています。今回の講演会で、問いの出し方の工夫が必要であることを痛感しました。
- ・講義の資料(スライド)が頂けましたら幸いです。もっと良く理解できると思います。

➡UNIPA 掲示の期間は終了したため、ご入用の旨、教育支援グループへご連絡ください。

- ・今後、授業でのAIの活用について考えるよいきっかけとなりました。ありがとうございました。
- ・生成AIについての知識があまりなかったので、とても勉強になった。
- ・プロンプトの語彙選び、AIを使用させる場合の学生への周知(自分の意見を記述させる大切さ)
- ・生成AIとどう付き合うかは継続して考えていかないといけないと改めて感じました。
- ・生成AIの教育の利用のあり方という大変重要なテーマを取り上げていただいたことは大変感謝申し上げたい。一方、同じ学部でも教員間の理解度、利用度には大きな開きがあるように思われ、自身にとっては新たな学びはあまりなかった。そもそもインターネットが登場してきた時点でありきたりなテーマでレポートを書かせる意味が既になくなっていくことに留意する必要がある。また、AIの利用とその添削、採用などを報告することをレポート課すすべての授業で行うのは学生、教員にとっても負担。むしろ、学部全員が参加する授業で演習形式で生成AIの使い方を指導する機会を何回か確保すべき。
- ・この1年で学生が生成AIを使用すること(特に卒論時)も珍しくなくなった。講演会でもお話があったが過程を重視することがこれまで以上に必要となると思われる。教員はこうした現状をキャッチアップする必要があるが、FD講演会のみでは必ずしも対応が追い付かないような気がしている。今後は、学外の講習などを受講する制度をつくるなどし、教員が新しい教育手法を学ぶ機会を設ける必要があるかもしれない。
- ・自分の知らない情報を色々と得ることができてよかった。まだまだ、多くの教員が生成AIとの付き合い方を試行錯誤していることも認識できた。
- ・学生への生成AIリテラシー教育の必要性は極めて大きい。そのために広く深い議論がなされなければならないと思う。
- ・生成AIを授業にどのように使うか。具体的な事例を伺うことができて参考になりました。AIの使用を踏まえ、学生たちの判断や説明などを段階的に聞きながら進めていきたいと思いました。
- ・AIを利用する学生に対する指導について、我々もこれから創意工夫する必要があり、まだまだ難しいポイントもかなりあることが再確認できた。
- ・生成AIの活用とそれに対する対応の仕方を学ぶことができた。時期が卒論締め切り直前で少し時期を考えてほしかった。
- ・生成AIの授業での使用方法と学生に周知すべき注意点を知ることが出来た。「フェーズを記録として可視化し、どのような理由で自分が意思決定したのか」を確認すべきという指摘もあったが、残念ながら十分に吟味しないまま提出されたレポート・卒業論文が今年度散見された。また、「学習の効率化」の一例としてプログラミングが挙げられていたが、人文科学分野でも「学習の効率化」につながるのかがどうか、疑問点として残った。
- ・豊田先生の講義がとても分かりやすかったです。
- ・既に卒業研究の準備段階のレポートなどから、AIを利用したものが増えていたことから、2025年度の卒業研究指導では、AIを利用した論文の書き方を工夫している。全面的に依存して文章を書くと、現在のAIレベルでは参考文献やそ

の引用ページが明示されないので、AI を使ってまとめても、参考文献のページ、利用した企業HP の URL などを出典注で明記するように指導している。今回の講演でも、そうした使い方が適切なのだろうという方向性を確認できたのがよかったと思います。

- とても勉強になりました。ありがとうございました。
- AI のシステム的な説明（エンコーダ、デコーダ、トランスフォーマ等）が分かりやすく、自身の理解に大いに役立ちました。また、飛躍的に機能が上がったAI に対して、教員や学生がどのように「利用すべきか」を再考するきっかけにもなりました。AI は、利用者からのプロンプトと既存の情報をもとに、「それらしき文章（情報）」を生成できますが（ビジネスにおいては広く活用可能）、本来「学ぶ」という概念には、能動的な情報の入手・選択・加工と、自らの知識を加えた考察や知見の整理、それらのまとめを他者に伝える出力が必須です。一番のポイントである「考察や知見」を組み立てられる能力を育成するのが教育であり、それをAI に任せるべきではないと再確認もできました。「あなたが考えたことをまとめてください」という投げかけだけにならないような教育手法を組み立てるべきだと確信できました。
- 卒論やレポートでのチャットGPT の使用の課題がある昨今、学生が用いる「チャッピー」がどのようなもので、どう考えたらいかがか理解できた。また、我々がそれをどう活用でき得るのかについても示唆を得ることができた。
- お話を伺って、改めてAI を学生が使っているという前提で授業や成績評価をしていくことを考えていかなければいけないと思いました。大変勉強になりました。ありがとうございました。
- AI の話題はこれから避けて通れないトピックスですし、自分も興味があるので、とてもためになりました。事務局の方へ、音声小さく少し、ボリュームを大きくすると音が割れて聞き取りにくかったです。自分が使う時に物事の構造解析や、データ分析、要約にはとても役に立つと思うが、それを授業や基礎実験のレポートで生かすことにまだイメージが沸きません。また課題を出す時に、最初から学生にAI ありきでレポートを書く指示を出すべきか？言わなければ使う・使わないは自分の判断になるので。必ず、AI の回答と自分の考えが最期一致しているかどうかを確認する必要があります（かなりズレている、特に感性の部分や、時系列など）、余計に手間がかかっている印象がまだ強いです。糺、要約についてはポイントが絞られて、整理をするのにはとても役に立ちます。
- 生成AI がどういうモデルで学習しているのか、ということについて学べたのがとても良かったです。一方で、生成AI の使用を学習に生かすということに関しては、「やはりこんなものはそもそも存在しない方が、人間が学習をするということに関しては良かったのではないか」と思うところがあり、多少後ろ向きな気持ちになってしまいました。
- 基本的なところからご説明くださったので、とても理解が進みました。お二人とも「授業の目的を達成すること」を第一に挙げていた点が印象的でした。一方で、レポートなど面接のできないものについてどのように対応したらよいかはやはり悩みとして残ってしまったので、文系の先生方がどうされているのかが気になりました。
- 教育現場の課題は、禁止することや使わせなくすることではなく、学習目標と結び付けて考えること。授業で学生に指導する基本ルールやレポート、文章の校正に関して具体的でわかりやすく、今後活かしていきたい。
- 今回の研修を通して、AI が普及する中で、教員自身がAI リテラシーを身に着けることの重要性について改めて考えられました。単に活用するだけではなく、批判的にとらえる視点を育てることが必要だと感じました。学生に対して、どのように判断するか、どのように責任を持つかを指導することが、これからの教員の重要な役割になると思います。AI を敵視するのではなく、学習支援や業務効率化に前向きに活用していく姿勢が大切だという点も改めて思いました。

以上

大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

平成 15 年 3 月 7 日

制定

(設置)

第 1 条 大妻女子大学大学院、大妻女子大学及び短期大学部（以下「本学」という。）に、本学の教育の内容及び方法の検討、さらにそれらの組織的な研修、研究及び改善（以下「FD」という。）を推進するため、大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 副学長 1 名
- (2) 人間文化研究科長及び人間文化研究科FD委員長
- (3) 各学部長及び大妻女子大学短期大学部長
- (4) 各学部及び短期大学部から選出された教員各 1 名

2 学長及び委員以外の副学長は、必要に応じて出席することができる。

(任期)

第 3 条 前条第 1 項第 4 号の委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員が欠員となった場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(審議事項)

第 4 条 委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) FDの企画及び実施に関する事項
- (2) FDに関する情報の収集及び提供に関する事項
- (3) FDの実施に係わる支援及び評価に関する事項
- (4) 研究科、各学部及び短期大学部におけるFD活動に関する事項
- (5) その他、委員会が必要と認める事項

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、副学長をもって充てる。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長が指名した者がその職務を代理する。

(議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。

(委員以外の出席)

第 7 条 次の各号の者は委員会に出席して意見を述べることができる。

- (1) 事務局長、教育支援センター部長、多摩事務部長
- (2) 委員会の同意を得て委員長が必要と認めた者

(事務)

第 8 条 委員会の事務は、教育支援センターにおいて処理する。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学運営会議において定める。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成17年1月11日から施行し、平成16年12月1日から適用する。ただし、第7条第1項第1号の規定は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成18年3月23日から施行する。

附 則

この規程は、平成22年5月7日から施行し、平成22年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（令和7年4月8日 大学運営会議）

この規則は、令和7年4月8日から施行し、令和7年4月1日から適用する。

大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会

大妻女子大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

第2条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

2 学長及び委員以外の副学長は、必要に応じて出席することができる。

		令和7年度
(1)	副学長(委員長)	山 倉 健 嗣
2	副学長	小 川 浩
	副学長	田 中 直 子
(2)	人間文化研究科長	青 江 誠 一 郎
(3)	家政学部長	中 島 永 晶
	文学部長	増 野 弘 幸
	社会情報学部長	山 崎 志 郎
	人間関係学部長	齊 藤 豊
	比較文化学部長	佐 藤 実
	データサイエンス学部長	冨 浦 英 一
	短期大学部長	谷 口 新
(2)	人間文化研究科	金 田 卓 也
(4)	家政学部	水 谷 千 代 美
	文学部	石 川 千 暁
	社会情報学部	市 村 哲
	人間関係学部	三 好 真
	比較文化学部	安 藤 恭 子
	データサイエンス学部	永 瀬 伸 子
	短期大学部	玉 木 伸 介

第7条 次の各号の者は委員会に出席して意見を述べることができる。

(1)	事務局長	杉 田 学
	教育支援センター部長	安 倍 達 哉
	多摩事務部長	岩 下 忠 司